

鳥取市湖山

湖山第2遺跡発掘調査報告書

鳥取大学附属小中学校移転整備事業に伴う
埋 藏 文 化 財 発 掘 調 査

1982

財團法人 鳥取県教育文化財団

正 誤 表

頁	行 数	誤	正
P 3	ℓ 11	…の畠地の $\cdot \cdot$ m 2 である。	…の畠地の約 1 万 m 2 である。
P 4	ℓ 16	棚列状遺構	棚列状遺構
P 14	第13図	第 1 溝 状遺跡	第 1 溝 状遺構
P 17	第21図	Po.2	1 つ上の土器が Po.2 である。
P 21	第29図		図の上の土器が Po.1 である。
〃	ℓ 5	P5 (80×34-15)	P5 (80×34-15) cm

序 文

鳥取市の西に位置する湖山池は、太古より人々の生活と密接な関係を保ってきました。この湖山池の東岸に鳥取大学が移転してから16年が過ぎようとしています。今度は、鳥取大学附属小中学校の移転地が大学の南に決まりました。この地は、鳥取大学造成工事の際、土器の散布がみられた所に隣接しており、遺跡の存在が想像されました。

そこで、財団法人鳥取県教育文化財団は、鳥取県教育委員会から「鳥取大学附属小中学校移転に先だつ埋蔵文化財の発掘調査」の委託を受け、実施してきました。

調査の結果、堅穴住居跡をはじめとする弥生時代から中世にまで及ぶ集落跡を発見しました。また、湖山池が海続きであった時の海岸線と思われるものも発見しました。これらの調査結果が、古代因幡の歴史解明ばかりではなく、地理学・地質学においても貴重な資料となり得ることと思われます。本報告書が多方面で御利用いただければ幸いです。

終りに、調査に御協力いただいた鳥取大学・鳥取県教育委員会・湖山地区・松保地区の方々をはじめ関係者の方々に深甚なる謝意と敬意を表して序にかえさせていただきます。

昭和 57 年 3 月 25 日

財団法人 鳥取県教育文化財団

常務理事 平木安市

例　　言

1. 本報告書は、鳥取大学附属小中学校移転に先だつ湖山第2遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本遺跡は、鳥取大学構内（鳥取市湖山町南4丁目101番地）と南接する民間の畠地（鳥取市湖山町南4丁目134～147番地）に所在する。
3. 調査は、財団法人鳥取県教育文化財団が鳥取県教育委員会から委託を受けて、1981年6月6日から1982年3月25日まで実施した。
4. 調査は、鳥取県教育委員会文化課文化財主事田中弘道氏の指導のもとに、中村徹、坂本敬司、津川ひとみが行った。
5. 本書の執筆並びに編集は中村徹、坂本敬司、津川ひとみの討議にもとづいて作成した。
6. B地区の地層について、鳥取大学教育学部教授豊島吉則、赤木三郎両氏に御教授をいただいた。銘記して感謝いたします。
7. B地区出土の木製品の樹種鑑定を鳥取大学農学部助手古川郁夫氏にお願いした。銘記して感謝いたします。
8. 調査に際し、鳥取大学および湖山、松保、賀露地区の方々をはじめ、多方面からの参加、援助を得た。銘記して感謝します。



調査関係者一覧

総括 平木安市 烏取県教育文化財団常務理事
春田 明 同 事務局長
加島俊朗 同 次長
太田垣甚一 東部埋蔵文化財調査事務所長
調査指導 田中弘道 烏取県教育委員会文化財主事
調査員 中村徹・坂本敬司・津川ひとみ

作業従事者—(五十音順・敬称略)

黒田 勤	有田やす子	有本弘孝	荒木秀樹	網干浩光	尼子裕史
石本晴繁	池信悟子	岩田義之	岩成寿美代	岩崎修	漆原広美
江山 薫	岡野悦子	岡本安子	奥戸輝寿	音田正顕	音田恭宏
尾崎 恵	加藤千代恵	影井美佐子	桂川孝文	金本典之	川戸義之
川村 勝	岸本君子	北野 薫	北野 稔	北脇かよ子	木村二三男
楠 幸二	倉地真由美	元録孝夫	小谷育江	小谷辰子	小坂きみ子
近藤英生	後藤武昭	佐藤敏彦	笹井茂行	沢 之裕	坂口菊代
白神俊幸	清水 亨	下山良二	志俵政夫	柴崎章生	杉浦雅史
杉浦尚宏	杉浦 聰	杉谷康伸	清山浩司	瀧 昌明	多田圭一
多田博司	田中昌平	田中出夫	田中一幸	田中美智枝	田中きく江
田脇さよ子	高場克己	戸出鶴彦	徳田恵美子	鳥飼一吉	中藤博幸
中本栄子	永浜直行	二木 隆	西垣勇信	西村浩二	西原徳善
野村悦生	橋本貴志江	橋本一恵	福田菊枝	福田末子	福田しづえ
福田利美枝	藤原浩司	平家 正	牧野泰治	星見小夜子	細田 巧
本庄よし子	前田ふさ子	松川宏之	松岡 均	宮阪 満	宮本真澄
宮脇君枝	宮本成行	村上松江	村上富士枝	村田由美子	三村健一
森本すみ江	森本愛子	森下洋一	森田篤篤	木村喜彦	安井 章
山内玲子	山根範久	山根辰己	山根雅美	湯谷一也	米沢とし子
吉川淳史	渡辺文子				

目 次

序 文	
例 言・調査関係者一覧	
目 次	
挿図・図版目次	
第1章 位置と環境	1
第2章 調査の概要	3
第3章 A地区	7
第1節 概 要	7
第2節 遺 構	8
(A) 堅穴住居跡	8
(B) 掘立柱建物跡	29
(C) 土 坡	33
(D) 溝状遺構	40
(E) 檻列状遺構	43
(F) 貯藏穴状遺構	46
(G) 井戸状遺構	47
第3節 まとめ	48
第4章 B地区	49
第1節 概 要	49
第2節 遺 構	50
堅穴住居跡	50
掘立柱建物跡	53
土 坡	64
井 戸	64
第3節 出土遺物・遺構に伴わない土器	68
黒色土出土遺物	68
旧海岸線	74
第4節 まとめ	77
第5章 参考資料	78
第6章 まとめ	86

挿図・図版目次

挿図目次

第1図	湖山第2遺跡周辺遺跡地図	1
2図	" トレンチ配置図	3
3図	A地区全遺構図	5
4図	第2トレンチ出土土器・管玉未製品実測図	7
5図	第1堅穴住居跡遺構図	8
6図	" 遺物実測図	9・10
7図	第2 " 遺構図	10
8図	" 遺物実測図	11
9図	第3 " 遺構図	12
10図	" 遺物実測図	12
11図	第4 " 遺構図	13
12図	" 遺物実測図	13
13図	第5 " 遺構図	14
14図	" 遺物実測図	14
15図	第6 " 遺構図	15
16図	" 遺物実測図	15
17図	第7 " 遺構図	16
18図	第8 "	16
19図	" 遺物実測図	16
20図	第9 " 遺構図	17
21図	" 遺物実測図	17
22図	第10 " 遺構図	18
23図	" 遺物実測図	19
24図	第11 " 遺構図	19
25図	" 遺物実測図	19
26図	第12 " 遺構図	20
27図	" 遺物実測図	20
28図	第13 " 遺構図	21
29図	" 遺物実測図	21
30図	14 " 遺構図	21
31図	" 遺物実測図	22

第 32 図	第15竪穴住居跡遺構図	22
33 図	“ 遺物実測図	23
34 図	第16 “ 遺構図	24
35 図	“ 遺物実測図	24
36 図	17 “ 遺構図	24
37 図	18 “ “	25
38 図	“ 遺物実測図	25
39 図	19 “ 遺構図	26
40 図	20 “ “	26
41 図	21 “ “	27
42 図	22 “ “	27
43 図	23・24 “ “	29
44 図	第1掘立柱建物跡遺構図	29
45 図	“ 遺物実測図	30
46 図	第2 “ 遺構図	30
47 図	“ 遺物実測図	30
48 図	第3 “ 遺構図	31
49 図	第4 “ “	32
50 図	第1 土塙遺構図	33
51 図	“ 遺物実測図	34
52 図	第2 “ 遺構図	35
53 図	“ 遺物実測図	35
54 図	第3・4 土塙遺構図	36
55 図	“ 遺物実測図	38
56 図	第5・6・7・8・9 土塙遺構図	37
57 図	第6・8・9 土塙遺物実測図	38
58 図	第10 土塙遺構図	39
59 図	“ 遺物実測図	39
60 図	第1 溝状遺構遺構図	40
61 図	“ 遺物実測図	40
62 図	第2・3 溝状遺構遺構図	41
63 図	第4・5 “ “	41
64 図	第2・3・4・5 溝状遺構遺物実測図	42
65 図	第1・2 棚列状遺構遺構図	43

第 66 図	第 2 棚列状遺構遺物実測図	43
67 図	第 3 棚列状遺構遺構図	44
68 図	第 4 ~ 7 棚列状遺構遺構図	45
69 図	第 6 棚列状遺構遺物実測図	45
70 図	第 8 棚列状遺構遺構図	46
71 図	“ 遺物実測図	46
72 図	貯蔵穴状遺構遺構図	46
73 図	“ 遺物実測図	47
74 図	井戸状遺構遺構図	47
75 図	A 地区東西断面概念図	48
76 図	作業風景	49
77 図	“	49
78 図	第 1 壁穴住居跡遺構図	50
79 図	“ 遺物図	50
80 図	B 地区全体遺構図	51
81 図	第 1 挖立柱建物跡遺構図	53
82 図	“ 遺物図	53
83 図	“ 柱根図	54
84 図	“ 柱根図	55
85 図	第 2・3 挖立柱建物跡遺構図	56
86 図	第 2 挖立柱建物跡遺物図	57
87 図	第 3 挖立柱建物跡 “	57
88 図	第 4 挖立柱建物跡遺構図	57
89 図	“ 遺物図	58
90 図	第 5 挖立柱建物跡遺構図	58
91 図	第 6 挖立柱建物跡 “	59
92 図	第 6 挖立柱建物跡遺物図	60
93 図	第 7・8 挖立柱建物跡遺構図	61
94 図	第 7 挖立柱建物跡遺物図	62
95 図	第 8 “ “	62
96 図	第 8 “ “	62
97 図	第 1 土塙遺構・遺物図	62
98 図	第 2 土塙・遺構図	63
99 図	第 2 土塙・遺物図	63

第100図	第3土塹	64
101図	井戸・木枠実測図	65
102図	井戸遺構図	67
103図	井戸遺物図	67
104図	北側黒色土層蓋実測図	69
105図	北側黒色土層土器口縁部実測図	69
106図	" 底部実測図	70
107図	" "	71
108図	" "	72
109図	" "	73
110図	北側黒色土層土製品	73
111図	採集遺物図	74
112図	土層図	75
113図	採集遺物図	75
114図	石鍤実測図	76
115図	育種場出土弥生土器実測図	79
116図	" 弥生土器底部実測図	80
117図	" 土師器実測図	81
118図	" 土師器実測図	82
119図	" 土師器実測図	83
120図	" 土師器・須恵器実測図	84
121図	" 土製品実測図	85
122図	" 石製品・木製品実測図	85

図版目次

- 図版1 A地区全景・A地区北側地形写真
- 2 第1～6竪穴住居跡遺構写真
 - 3 第7～12竪穴住居跡遺構写真
 - 4 第13～17竪穴住居跡遺構写真
 - 5 第18～22竪穴住居跡遺構写真
 - 6 据立柱建物跡、第1土塙遺構写真
 - 7 第3～9土塙遺構写真
 - 8 第10土塙、溝状遺構、貯蔵穴状遺構、井戸状遺構遺構写真
 - 9 栅列状遺構遺構写真

図版10 第1堅穴住居跡出土遺物写真

- 11 第2～5堅穴住居跡出土遺物写真
- 12 第6・8・9・11・12堅穴住居跡出土遺物写真
- 13 第10・13・14堅穴住居跡出土遺物写真
- 14 第15・16・18・22堅穴住居跡出土遺物写真
- 15 第1・2・3・4・6・9・10土塗遺物写真
- 16 第8土塗、第1・2掘立柱建物跡、第2トレンチ出土遺物写真
- 17 溝状遺構、柵列状遺構、貯蔵穴状遺構出土遺物写真
- 18 B地区全体写真北側（北側より）、南側（南側より）
- 19 第1堅穴住居跡・第1掘立柱建物跡、同柱根を抜いた跡
- 20 第4掘立柱建物跡
- 21 第7掘立柱建物跡
- 22
- 23
- 24 井戸遺構、木わくを伴うもの、同掘り上げたもの
- 25 第1堅穴住居跡遺物、第1掘立柱跡遺物
- 26 第2掘立柱建物跡遺物、第3掘立柱建物跡遺物
- 27 第4掘立柱建物跡遺物、第6掘立柱建物跡遺物
- 28 第18掘立柱建物跡、第1土塗遺物、第3土塗遺物高杯、杯、小型丸底壺
- 29 井戸遺構遺物
- 30 井戸遺構木わく、木わくの抜大部分
- 31 井戸遺構、板状遺物、同抜大部分
- 32 北側黒色土層、口縁部
- 33 北側黒色土層、弥生底部
- 34 北側黒色土層、弥生底部
- 35 北側黒色土層底部、手づくね土器、壺、同高杯、脚、器台、高杯
- 36 表採須恵器、壺、北黑色土、蓋、紡錘車、土玉
- 37 旧海岸線
- 38 同 採集遺物
- 39 参考資料（育種場出土遺物）
- 40 "
- 41 "
- 42 "
- 43 "

第1章 位置と環境

湖山第2遺跡は、鳥取大学キャンパスのある鳥取市湖山町の濃山台地南の崖下、海拔2～5mの平地にある。その南には周囲18km、面積7.25km²、東西距離4kmの湖山池があり、この地域の自然的、歴史的条件を大きく規定している。

湖山池周辺の自然的条件は、湖山池の形成と密接な関係をもつ。湖山池は約3000年前の縄文・弥生期に湖沼化した潟湖（ラグーン）である。それ以前の湖山池は、北側にも開口した内湾であって、その当時の面影は旧海島である青島、天神山、山王山、足山等の小丘陵に残っている。土壤的には、湖山池の北には、砂丘があり、その砂丘はラグーンを形成した砂である。湖山池東岸は先の小丘陵を除けば、低位泥炭土壌あるいは細粒灰色低地土壌である。南・西側には、支陵線上に沿って褐色森林土壌があり、谷底平野は、灰色低



第1図 湖山第2遺跡周辺遺跡地図

地土壤あるいはグライ土壌である。植生もその土壌に規定されるが、現在はほとんどの低地は水田または住宅地となっている。しかし、多くの低地は、下層に泥炭土壌を持ち恵まれた水田とはいがたい。

このような自然的条件のもとで、この地域に人間の生活の跡が現在たしかめられるのは、繩文前期以降である。南東岸の桂見遺跡で、前期最終末の繩文土器が出土しているが、その量はごくわずかである。繩文時代後期になると、遺跡の数は多くなる。湖山池にうかぶ青島遺跡、南東岸の桂見遺跡、布勢遺跡、大桶遺跡が繩文後期の遺跡として知られ、また今回の湖山第2遺跡B地区の調査で北東岸でも繩文後晩期と思われる土器が出土した。

弥生時代から古墳時代にかけての集落跡はあまり確認されていない。今回の調査によって発見された、20数棟の堅穴住居のある湖山第2遺跡が、今までのところ最も大きな集落遺跡である。その他には、湖山池と千代川の中間に岩吉遺跡で弥生前中期と古墳後期を中心とする遺物がみつかっており、弥生中期から古墳前期の祭祀跡である青島遺跡、流水文銅鐸の発見された高住遺跡、弥生後期と古墳後期の住居跡の検出された布勢第2遺跡、他に松原・谷田遺跡、塞ノ谷遺跡といった遺跡がみられる。

この地域はかなり大きな前方後円墳の密集地としても知られる。湖山池南東岸の桶間1号墳(92m)をはじめ、布勢1号墳(59m古墳中期)大熊段1号墳(46.5m・古墳中期末～後期初頭)三浦1号墳(30m・古墳後期中葉)等の大古墳がある。とりわけ、湖山第2遺跡の北にある濃山台地上の大熊段1・2号墳、三浦1・2号墳が、5世紀末から6世紀末までの大古墳であり、6世紀における湖山池を支配する首長の墓であると考えられる。その他にも、湖南の松原良田古墳群の7基の前方後円墳はじめ、湖山池周辺には多数の古墳が存在している。

奈良時代以降になると、湖山池のある高草郡の政治的中心は、千代川左岸の古海郷付近と推定され、その付近には、菖蒲磨寺、大野見宿弥神社(徳尾)がある。そこには、古代因幡の代表的豪族である因幡氏が居住していたと思われる。因幡氏は、8世紀中葉、東大寺領因幡国高庭庄の開発にあたり、また、8世紀後半、朝廷に貢進された因幡国造淨成女が位階を高めていく中で一族の勢威も拡大していった。しかし、11世紀初頭に、因幡介因幡千里が國守橘行平によって殺害されるという事件がおこり因幡氏の勢力は衰退していく。

その後、この地が政治的中心としてあらわれるのは、15世紀に入って、山名氏が居城を湖山池東岸の天神山に築いてからである。近世においては、この地は普通の村方となり、現在に至っているが、昭和41年鳥取大学が湖山池北東岸の湖山の地に移転し、湖山の地は文教地区として、文化的な環境を整備しつつある。

第2章 調査の概要

湖山第2遺跡は、鳥取大学造築の際、土器の散布がみられ、その存在が明らかにされた。土器の散布は、育苗場等鳥取大学の南端と民有地の畠地を含み、東西に長く続いている。昭和48年、鳥取大学は育苗場造成地の埋蔵文化財調査を鳥取県立博物館に委託し調査した。

調査は昭和49年4月29日より49年5月6日まで実施された。調査の結果、育苗場の南側で土負墓5基とピット数個を検出するとともに、弥生土器、土師器、須恵器多くの遺物が検出され、鳥取県立博物館『郷土と科学』第18巻49-3号にて、その概要が報じられた。

昭和56年、育苗場の西に鳥取大学附属小中学校が移転することになり、鳥取県教育委員会は、小中学校建設に伴う事前の埋蔵文化財の調査を財団法人鳥取県教育文化財団に委託した。財団法人鳥取県教育文化財団は、鳥取県教育委員会と協議し、遺跡の範囲を調べたうえで、全面発掘を行うこととした。

調査区域は、鳥取大学の実験圃場である桑畠と演習林、民有地の畠地の $100 \times 100\text{m}$ である。

大学構内における試掘調査は昭和56年6月6日に杭打ちを行い、同月22日より調査を開始した。試掘トレンチは桑畠に $2\text{ m} \times 5\text{ m}$ のトレンチを6本、演習林に4本の計10ヶ所、 100 m^2 である。調査の結果桑畠の旧地形は台地の西斜面にあたり、東側が削平されて平坦となっていた。第1トレンチでピット1個、第2トレンチで竪穴住居跡1棟、第5トレン



第2図 湖山第2遺跡トレンチ配置図

チで竪穴住居跡2棟、土塙1基、ピット2個を検出した。演習林に設定した第7～9トレンチは、地表下約3mの古砂丘面まで後世（明治以降）に擾乱されており、遺構は検出されなかった。第10トレンチでローム地を確認したが、遺構は検出されなかった。

民有地の畠地に設定したトレンチは10m×2mのトレンチ10本（200m²）であった。14、19トレンチのローム層でピットをそれぞれ8個と19個を検出するとともに土師器片や須恵器片を多く検出した。15トレンチは、青黒色グライ土壤下で弥生土器・上師器・須恵器片が流木とともに検出され、以前ここが波打ち際であったことが想像される。他のトレンチは耕作土下が古砂丘となっていた。

以上の調査結果をまとめると、今回の調査区域は、濃山台地の一部が舌状に南側につきでた台地であったが、後世、畠作等によって鞆部部分が削平され、大学構内においてはその西側斜面の桑畠1000m²が、畠地においては東側斜面の1200m²に遺構が残存しているものと思われる。

そこで、大学の桑畠をA地区、畠地をB地区とし、A地区的調査を昭和56年7月29日から同年9月17日まで、B地区的調査を11月30日から翌年3月6日まで行った。

A区の調査は炎天下の中で行なわれた。遺構の多くは互いに重複し合っており調査を複雑なものとしたが、竪穴住居跡をはじめ、掘立柱建物跡、土塙、溝状遺構、棚列状遺構、ピット等多くの遺構を検出することができた。

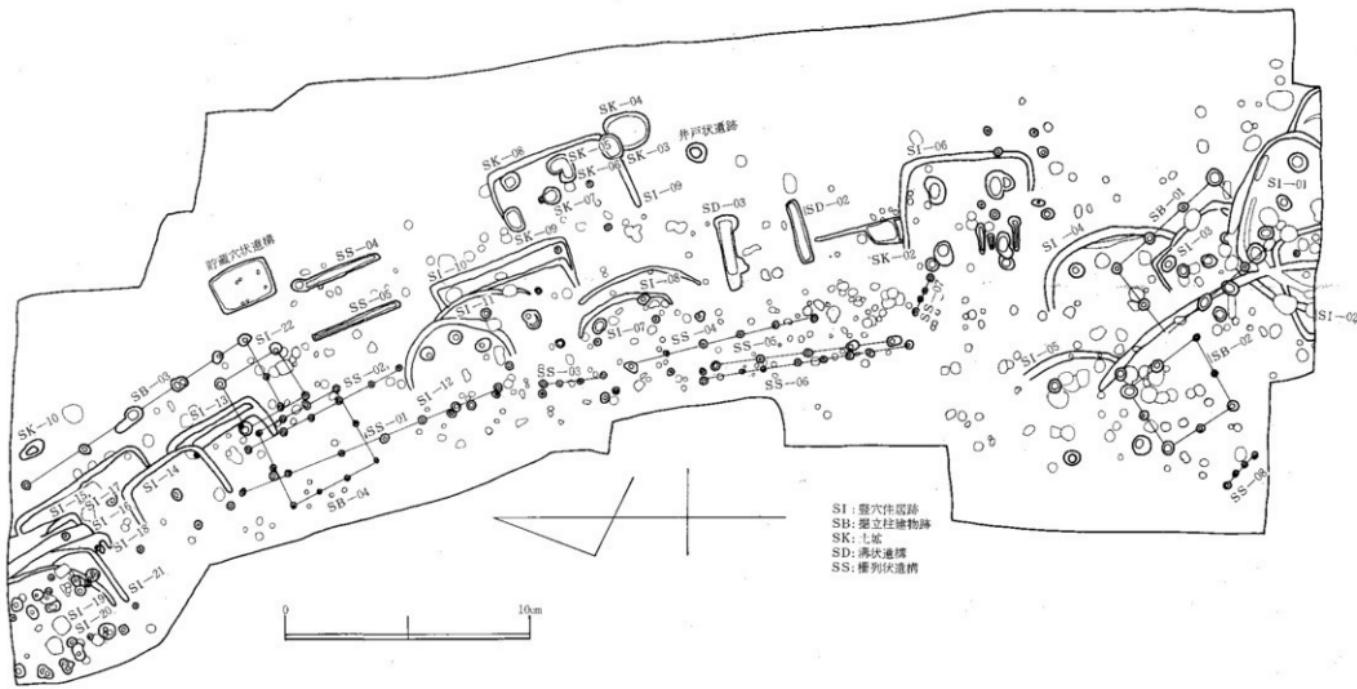
B区の調査は、北側から開始した。ところがここにはローム層がみられず、黒色粘質土の下に褐色腐植土が堆積していた、これは試掘時には得られなかつた結果であったため、急拠、幅2mのトレンチを東西に入れたところ、褐色砂、灰白色砂、青色粘土が堆積しており、褐色砂中より縄文土器片、石鍤等が出土し、深さ約80cmの落ち込みもみられたことから、縄文時代の遺構の存在が想像された。その範囲は北西部の約400mにおよぶものであった。

調査はまず、南側のローム層と北側の黒褐色土層で行なわれ、弥生時代から中世までの遺構を検出したが、北側では土層の識別が困難であったためかなりの調査時間を費やすこととなった。それでも竪穴住居跡1棟をはじめ掘立柱建物跡3棟、井戸、ピット等を検出することができた。ローム層では総柱の掘立柱建物跡を含む掘立柱建物跡5棟、土塙3基、ピット多数を検出することができた。

縄文時代の遺構が存在すると思われた北西部は、湧水に悩まされながら調査を行ったところ、縄文海進にともなう旧海岸線であったことがわかり、遺構は存在しなかつた。

炎天下の中で始められた調査は、途中休止期間はあったが、雪の降る中も行なわれ、歴史の解明に多くの成果を得た。また、重機を導入し表土をはぐことによって、発掘の費用節減と期間の短縮が可能となつた。しかし、この方法には、我々調査員の不慣れ等反省すべき点もあった。

なお整理期間は昭和56年10月21日より翌年3月25日まである。



第3図 A地区全遺構図

第3章 A 地区

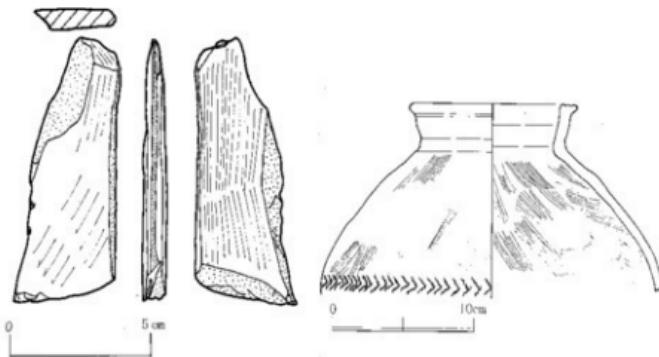
第1節 概 要

A地区は、鳥取大学キャンパス内、農学部校舎の南の丘陵（濃山台地）の南に位置し、その丘陵の崖下、海拔2～5mの地区である。発掘以前は農学部の桑園として利用されていた。それ以前は柿園として利用されていた。（調査の際にも、地山まで掘り込まれた桑栽培用トレッチャ跡、柿植樹用ピット等が検出された。）発掘以前の地形は、ほぼ平坦であったが、南・西方向にやや傾斜する地形であった。

調査はまず2×3mのトレッチを6ヶ所あけ、遺跡の範囲を確認した。（第2章調査の概要参照）その結果、第2・5トレッチで住居跡らしい遺構が検出され、また第1トレッチでも、内面ハケ目の弥生土器が出土したピットを検出した。第3・6トレッチではすでに地山まで削平されていることがわかったが、より深く掘り込まれている遺構がある可能性があり、以上の結果より、A地区全域約1000m²の全面発掘調査を行う必要があると考え、重機によって表土をはいだ。

全面発掘の結果、検出された遺構は、竪穴住居跡24棟、掘立柱建物跡4棟、土塹10基、溝状遺構5、柵列状遺構8、貯蔵穴状遺構・井戸状遺構各1、他多数のピットである。（第3図A地区全遺構図参照）

また、遺構のある層はローム化した倉吉バミスの層で、その下にはローム化していない倉吉バミス層があり、また西側低地には、クロボク層の厚い堆積がみられる。クロボク層での遺構の検出が難しく、多くの遺構をとぼした可能性がある。



第4図 第2トレッチ出土管玉未製品・土器実測図

第2節 遺構

(A) 壊穴住居跡

第1壊穴住居跡

A地区調査区域の最南端に位置し、遺構の南半分は調査することができなかった。南西の第2壊穴住居跡によって、遺構をきらされているが、また、この遺構が第3壊穴住居跡をきって掘り込まれている。一辺が6.60mの隅丸方形の形で、深さは北側で57cmを測る。地山の褐色ローム土を掘り下げ、床面を倉吉バミスまで下げた住居跡は、A地区の中には他になかった。

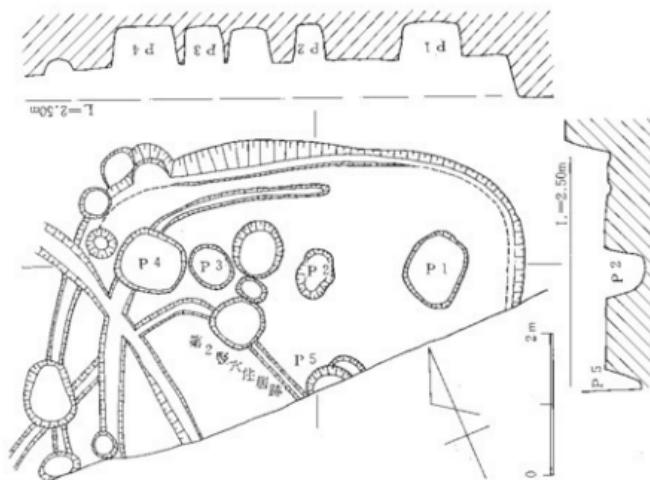
床面には2つの溝がみられ、内側の溝はP1、P3を柱穴とする4本柱の壊穴住居の側溝と思われる。その後、P1、P2、P4を柱穴とする6本柱の外側の溝を側溝とする住居へ拡張したと考えられる。

拡張前の床面積は、(住居跡の形を正方形とすると)約28m²、拡張後は約35m²である。

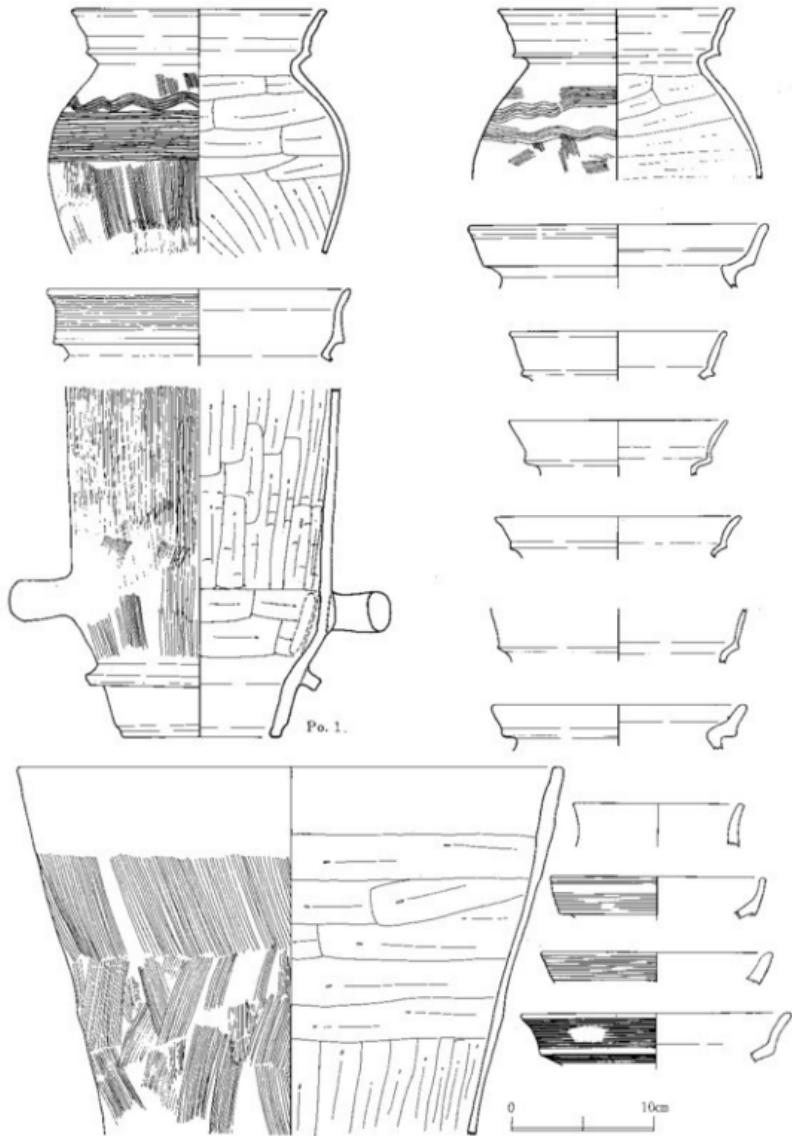
柱穴の大きさは、P1から順に(103×83-54)(70×52-56)(67×56-51)(96×86-58)で、柱穴間距離はP1、P3間3.20m、P1、P2間1.80m、P2、P4間2.20mである。

遺物は大量に出土をみたが、床面上だけでなく埋土の中からも多く出土した。床面の20cm程上で、ほぼ完形のこしきP0.1を検出したが、単なる住居廃棄後の流入とは考えがたい。他にも大きな破片が多くかった。床面から多くの土器が検出された。その遺物から、この

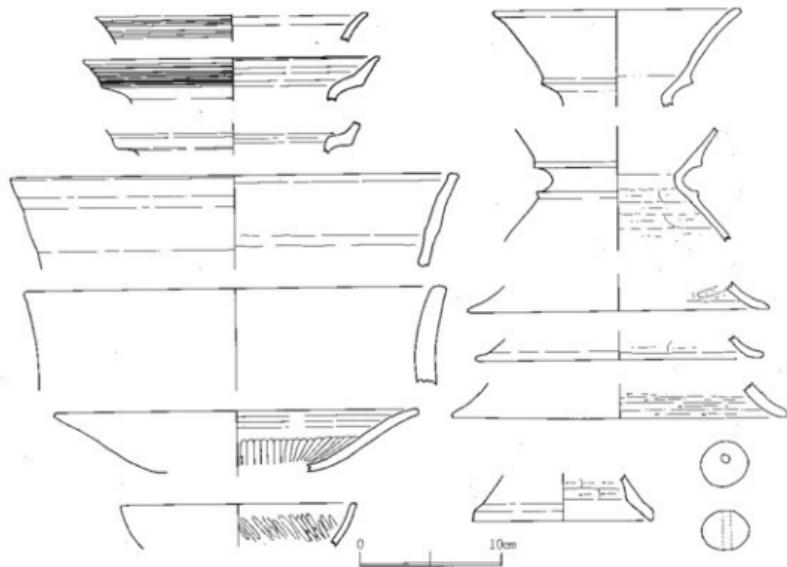
住居跡は古墳時代前期(青木IV期)の住居跡と推定される。



第5図 第1壊穴住居跡遺構図



第6図の1 第1堅穴住居跡土器実測図



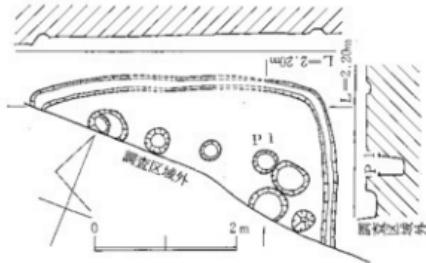
第6図の2 第1堅穴住居跡土器実測図

第2堅穴住居跡

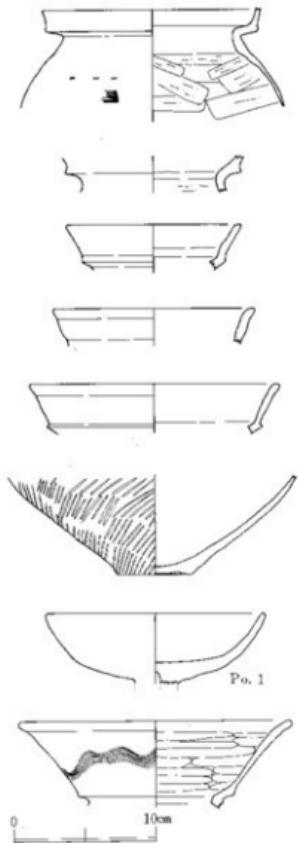
A地区の最南端に位置し、第1堅穴住居跡を掘り込んで作られている。南側 $\frac{2}{3}$ は調査区域外のため、調査できなかった。

平面形は、 $4.10m \times ?$ の方形と考えられる。ピットは7つ検出されたが、P 1 ($34 \times 33 - 54$) が柱穴と考えられ、他の柱穴は調査区域外と考えられる。

遺物は側溝内から高杯杯部 Po、1 が検出された。遺物よりこの住居跡は、古墳時代前期後葉（青木VII期）頃の住居跡と考えられる。



第7図 第2堅穴住居跡遺構図



第8図 第2竪穴住居跡土器実測図

穴間距離はP 4・P 5間が1.54m、P 1・P 2間2.34m、P 2・P 3間が2.28mである。

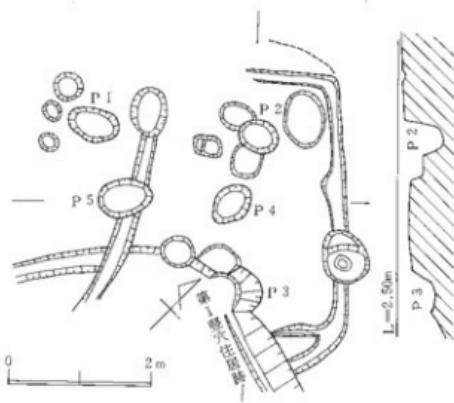
遺物は多くないが、側溝と床面直上から、第10図のツボ・カメ口縁部片が出土しており、いずれも弥生後期の土器である。その中で最も新しいと思われるP 0.5のカメ口縁部の時期が、この住居跡の時期と考えられる。すなわち、青木Ⅲ期の古から新へ移行するような時期が本住居跡の時期と考える。

第3竪穴住居跡

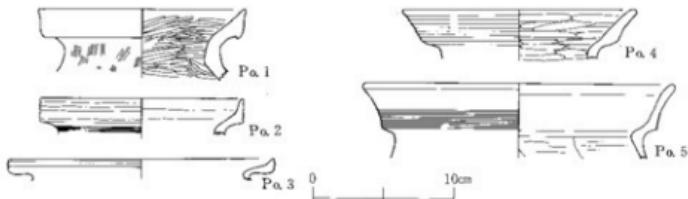
第1竪穴住居跡の北に位置し、第1竪穴住居跡に南側を削られている。北には第4竪穴住居跡があり、一部床面が重なる。

南西側は、床面・側溝は確認できなかった。A地区の他のほとんどの住居跡も同様であるが、このことは、竪穴住居を作る際に、床面を完全にローム層まで掘り込むのではなく、クロボク層までしか掘り込んでいない部分もあることを示すものであろう。あるいは、クロボクの堆積が古墳時代以降のことと考えれば、貼り床とした可能性も考えられる。

東側で側溝が2列に別かれていることと、ピットの配列から考えると、当初はP 4・P 5を柱穴とする2本柱の長方形の竪穴住居が作られ、後にP 1・P 2・P 3を柱穴とする（もう1つの柱穴は第1竪穴住居跡によって削られたため残っていない）外側の溝を側溝とする方形の竪穴住居へと拡張されたと考えられる。その推測に立てば、当初の住居は推定床面積規模4.70×3.66mの住居で、拡張後の床面積規模は推定4.80×4.80mである。柱穴の大きさはP 1から順に(72×47-30)(58×44-56)(64×44-45)(66×48-34)(75×54-24)cmである。柱



第9図 第3竪穴住居跡遺構図



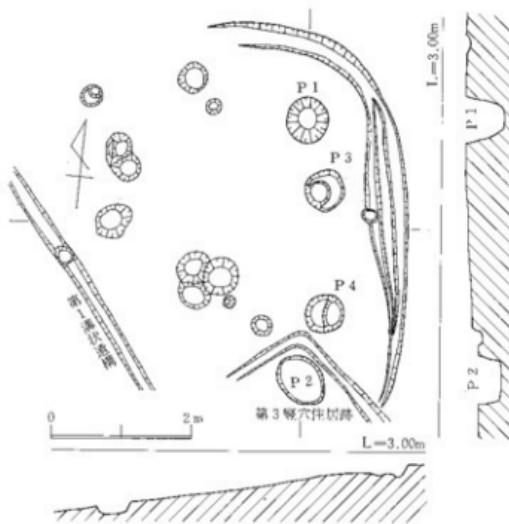
第10図 第3竪穴住居跡土器実測図

第4竪穴住居跡

第3竪穴住居跡のすぐ北に位置し、一部を第3竪穴住居跡と重なる。西側はクロボク屑のため、第3竪穴住居と同様、床面、側溝を喪失した。

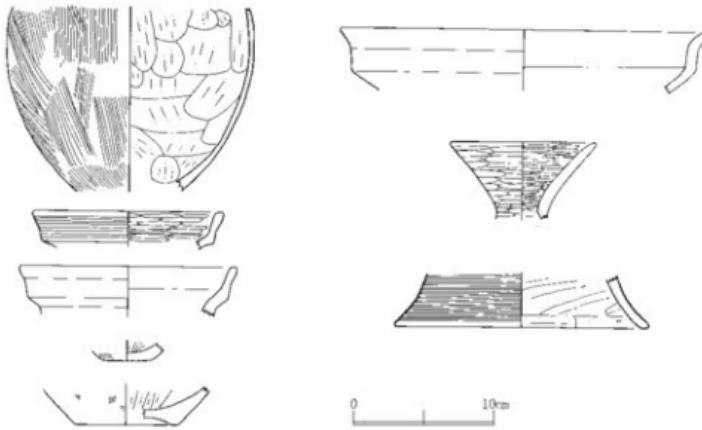
平面形は、北東部の側溝より隅丸方形と考えられる。この住居跡は側溝が東側で二重になっている点が注目され、何らかの建替が推測される。柱穴と思われるピットはP1、P2であり、それぞれ(67×58-54) (80×60-36) の大きさで、底の絶対高差はほとんどない。2つのピット間は3.60mである。P3、P4もかなり深いピットで、それぞれ(54×58-55) (54×54-82) であるが、性格は不明である。西側をかなり削られているため、西側の柱穴にあたると考えられるものは検出されなかった。

この住居跡をP1、P2を柱穴とする隅丸の正方形の住居跡と考えると一辺約5.90mとなり、床面積は約34m²となる。



遺物は、側溝・柱穴より土器片が少量出土したが、の土器から判断すると弥生後期（青木Ⅲ期）頃の竪穴住居と考えられる。第3竪穴住居跡とはほぼ同時期であるが、遺物から判断すると第4竪穴住居のほうがやや新しいと思われる。

第11図 第4竪穴住居跡構造図



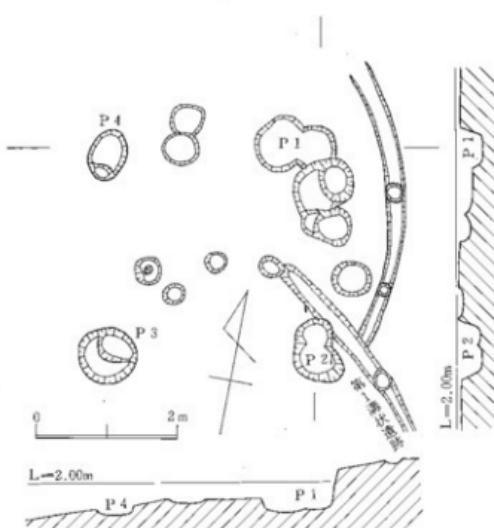
第12図 第4竪穴住居跡土器実測図

第5竪穴住居跡

A地区の南、第3、4竪穴住居跡の西に位置する。すぐ南に第2掘立柱建物跡がある。西側は、ローム層（地山）が傾斜しているため、住居跡の肩・側溝を確認することができなかった。

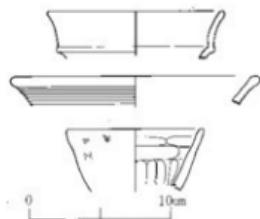
東側の側溝から推測して、平面形は約5.20m程のやや正方形に近い円形の住居跡と考えられる。

柱穴と思われるものはP1、P2、P3、P4で、それぞれ(52×51-58) (80×56-36) (80×82-33) (72×54-14)で柱穴間距離はいずれも3.00mである。



第13図 第5竪穴住居跡遺構図

出土遺物は、柱穴から少量出土しているが第14図のp.0.1をそのうちでもっとも新しく古墳時代前期後葉（青木VII期）と考えられ、本住居跡の時期と考える。



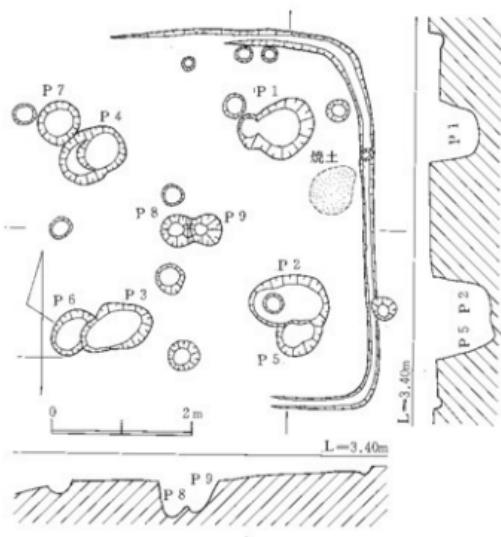
第14図 第5竪穴住居跡土器実測図

第6竪穴住居跡

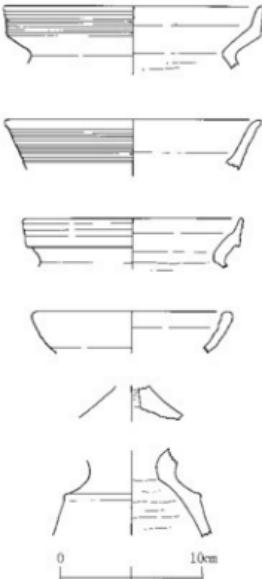
第4竪穴住居跡の北東に位置する。A地区で検出された住居跡の中では、かなり高い位置にあり、そのため、住居跡の肩は畑の耕作によりほとんど削られ、かつ、西側の測溝も地山の傾斜のため検出できなかった。しかし、幸い、東側で側溝のみが検出された。

平面形は、一辺が5.30m程の正方形に近い隅丸方形と考えられる。

床面で多くのピットが検出されたが、そのうち柱穴と思われるものはP1、P2、P3、P4で、さらに、P1、P5、P6、P7も対称に並んでいる。この住居跡も建て替えが行われているようである。そして、中央にもP8、P9が並んで掘られ、特殊ピットも移動したと考えられる。ピットの大きさはP1から順に、(85×80-55) (116×68-76) (106×66-57) (71×66-60) (70×60-70) (70×90-24) (60×60-33) (45×40-52) (45×44-46)cmである。P1～P4の柱穴間距離は3.00、3.20、3.10、3.15mとなる。遺物は、柱穴から土器片が少量出土した。それから判断すると、本住居跡は古墳時代前期（青木IV期）のものであろう。



第15図 第6竪穴住居跡遺構図



第16図 第6竪穴住居跡土器実測図

第7竪穴住居跡

A地区のはば中央に位置する。東側に側溝が残っており、それから推測すれば、直径はほぼ6mの円形の住居跡となる。柱穴と思われるものはP1～P5で、未調査の西壁の中にもう1つの柱穴があり、6本柱の竪穴住居跡と推定した。

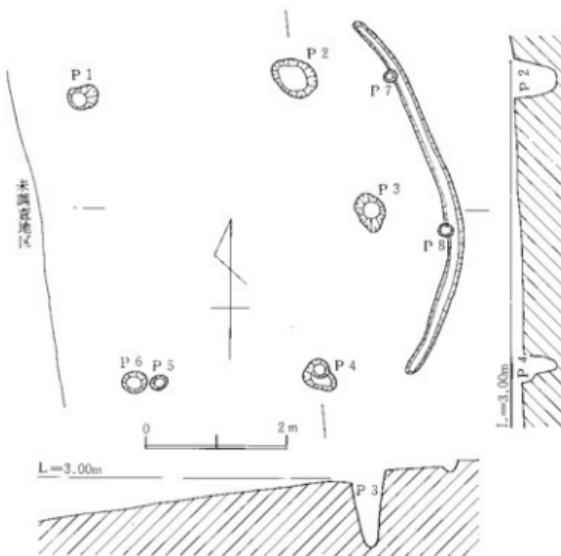
柱穴はP1から順に(44×32-30)(69×50-60)(56×37-102)(50×41-49)(25×20-27)cmを測り、柱穴の底の絶対高差に21cm、柱穴間距離はP1から時計まわりに3.00、2.21、2.36、2.30mを測る。

側溝沿いにP7、P8があり、補助的な柱があったことを推測させる。P7、P8はそれぞれ、(20×16-14)(23×18-12)cmである。

遺物は、P1とP4で内面にハケ目をもつ弥生土器片が出土しているが、図化できなかった。その遺物から、本住居跡は弥生中期の住居跡と推定する。

第8竪穴住居跡

第7竪穴住居跡の床面の中にすっかりおさまた位置にあたる。検出された側溝は、第7竪穴住居跡の側溝の西側にあたり、ほぼ平行するが、南北でやや曲がる傾向をみせ、平面形が、方形に近いことをうかがわせる。



第17図 第7竪穴住居跡遺構図

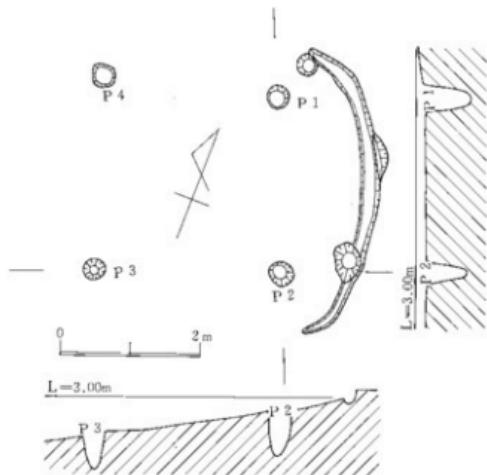
柱穴と思われるものはP1～P4で、それぞれ、(33×32-66) (38×34-65) (31×30-50) (38×35-46)cmの大きさである。底の絶対高差は25cm。柱穴間距離はP1から時計まわり方向に、2.48、2.66、2.78、2.50mである。

東側側溝で、焼土と炭が検出された。その切りあい関係から第7竪穴住居跡より新しいものであることがわかる。

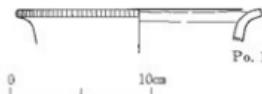
遺物はほとんどなく、わずかに第19図Po.1が柱

穴より検出されたが、弥生前期のものと思われる。しかし、先に記したように、切りあい関係からは第8住居跡のほうが新しく、混入したものと考える。本住居跡の時期はにわか

に決めがたいが、第7住居跡の弥生中期より新しく、平面プランから弥生後期と推測する。



第18図 第8竪穴住居跡遺構図



第19図 第8竪穴住居跡土器実測図

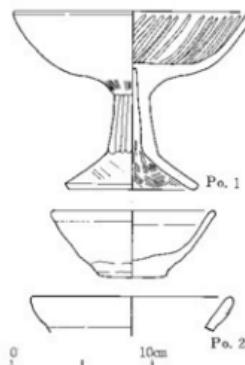
第9堅穴住居跡

A地区のはば中央に位置し、北西の第10堅穴住居跡と一部重なる。床面内に第3～9の土塗がある。住居跡の肩はほとんど削平され、かろうじて側溝が東側で検出された。平面プランはほぼ正方形で、側溝から判断すると、一辺5.56m程の住居跡であろう。

柱穴と思われるビットはP1～P4でそれぞれ(30×21-49) (28×25-56) (32×27-53) (30×28-18) cmの大きさである。P4は第10堅穴住居跡内にあるため、他より浅い。底の絶対高差は23cmである。柱穴間距離はP1から時計回りに2.08、1.96、2.26、2.10mを測る。遺物はP1からほぼ完形の土師器高杯・塊型土器(Po. 1, 2)が出土した。その遺物から本住居跡は古墳時代中期(青木Ⅲ期)頃の住居跡と考えられる。



第20図 第9堅穴住居跡遺構図



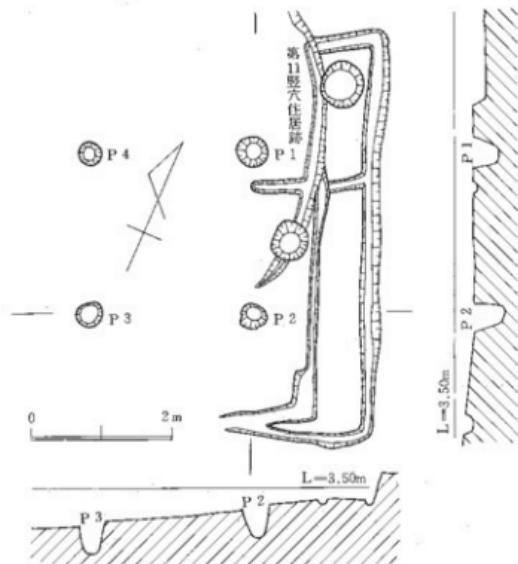
第21図 第9堅穴住居跡土器実測図

第10堅穴住居跡

A地区のはば中央に位置し、第9堅穴住居跡の北西、第7・8堅穴住居跡の北に位置する。また、第10堅穴住居跡は、その下層の第11・12堅穴住居跡を切って作られている。西側は、側溝を消失した。

平面形は、方形と推測され、東側に残る側溝は2本あり、この住居跡も改築されたものと推測される。柱穴から想定すると、一辺が約5.60mの正方形プランの住居跡であろう。残っていた肩部からの深さは36cmを測る。

柱穴はP1～P4で、大きさはそれぞれ(50×48-36) (37×37-43) (38×34-42) (33



第22図 第10号穴住居跡遺構図

×32~24) cmである。底の絶対高差は30cmであるが、これは西側の2つの柱穴が東側よりも深く掘り込まれていたためである。柱穴間の距離はP1から時計回りに2.30、2.35、2.30、2.32mを測る。

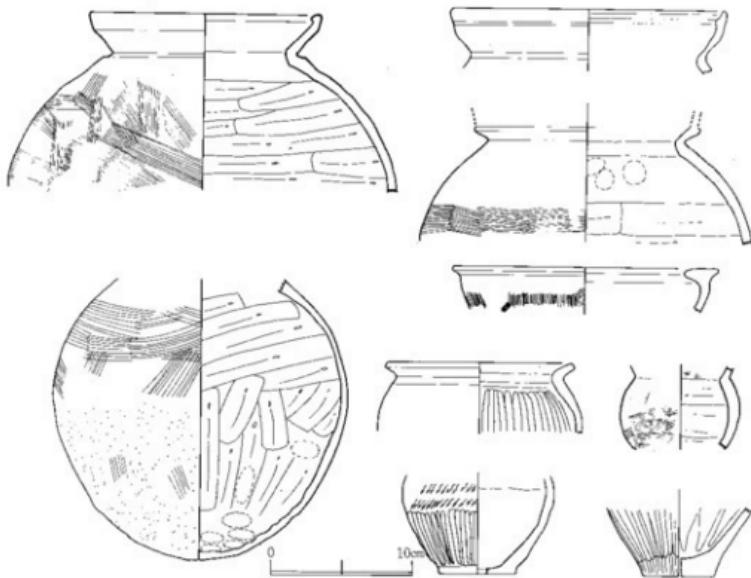
床面積は、外側の側溝で考えると、約31.4m²となる。東側の外側と内側の側溝の間の部分の面積は、約4.3m²である。

遺物は、住居跡の肩がかなり残っていたこともあり、多く検出された。北東隅で土師器カメの胸部が出土し、これはもと完形であったものが、耕作によって口縁部が削られたと思われる。遺物よりこの住居跡の時代は古墳時代前期後葉（青木VII新）と考えられる。

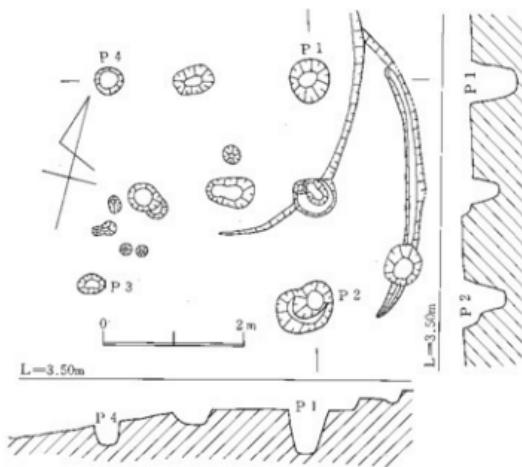
第11号穴住居跡

A地区のほぼ中央に位置し、第10号穴住居跡、第12号穴住居跡とはほぼ重なる。側溝が東側でわずかに残る。その側溝から推測すると直径5.90m程の円形の住居跡となる。柱穴と思われるものは、P1~P4の4つで、それぞれ(62×58-63)(52×58-54)(28×41-23)(40×36-33)cmである。底の絶対高差は9cm。柱穴間距離はP1から時計回りに3.18、3.20、2.94、2.94mを測る。

2つの住居跡と重なり、遺存状況が非常に悪いため、検出がおくれた。そのため資料をまとまって提出しえないが、柱穴からツボ頸部が1点出土しており、円形の平面プラン

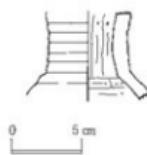


第23図 第10竪穴住居跡土器実測図



第24図 第11竪穴住居跡構図

第25図
第11竪穴住居跡土器実測図



であることを考えると、弥生後期の住居跡かと思われる。

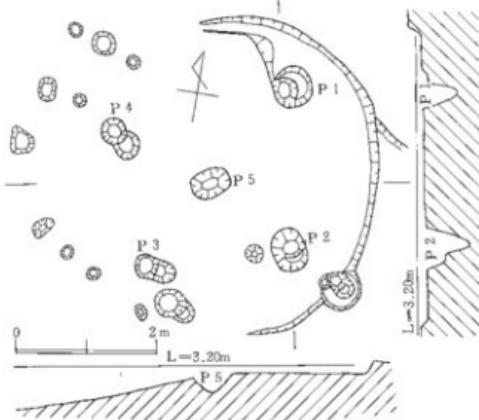
第12竪穴住居跡

A地区のほぼ中央にあり、第10・11竪穴住居跡に西接する円形の住居跡である。東側で住居跡の肩が検出され、深さ16cmを測る。西側は消失した。側溝は北側にわずかに検出された。おそらく全体をめぐっているものと思われるが、床面に埋土と同じような土を貼っていたため検出できなかったものと思われる。

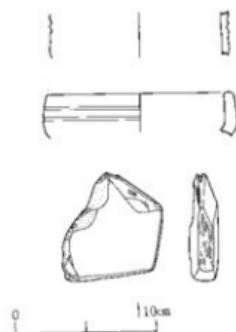
柱穴はP 1～P 4で、その配置は、台形に近い。ピットの大きさはP 1から順に、(56×56-50) (49×44-60) (32×32-42) (37×37-43) cmである。底の絶対高差は13cm。柱穴間距離はP 1から時計まわりに、2.28、2.10、2.00、2.50 mである。

残っている肩から、本住居跡は直径約4.40 mの円形住居跡で、その床面積は、約14.2 m²と推測される。

遺物は、土器が少量ではあるが出土し、いずれも弥生土器で、弥生中期後葉(青木I期)と推測される。また磨製の石製品が出土した。緑色凝灰岩系の石で、玉作に関係するかと思われるが、はっきりした性格は不明である。



第26図 第12竪穴住居跡遺構図



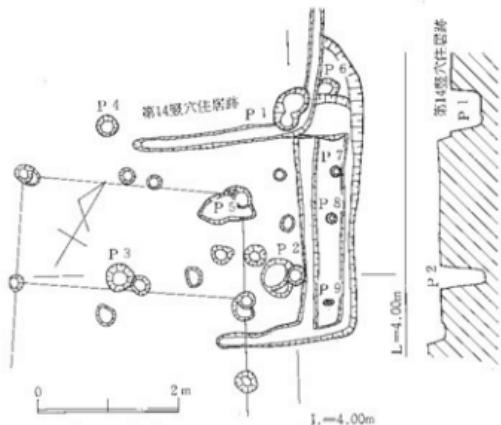
第27図 第12竪穴住居跡土器実測図

第13竪穴住居跡

A地区の北側、第3掘立柱建物跡の北側、第14竪穴住居跡の南に位置し、第14竪穴住居跡によって北側を削られている。

東側に住居跡の肩がわずかに残り、その深さは、24cmである。この住居跡も東側に二重の側溝を有し、何らかの改築を想像させる。

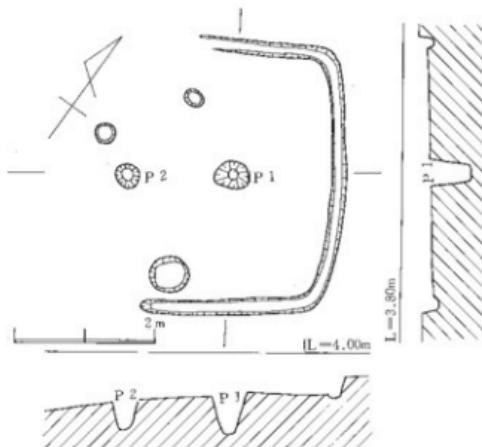
柱穴はP 1～P 4で、それぞれP 1 (36×24-60) P 2 (29×26-64) P 3 (40×38-24) P 4 (30×29-40) cmの大きさである。底の絶対高差は16cmである。柱穴間距離は、P 1から時計まわりに、2.20、2.50、2.15、2.50 mである。外側の側溝と柱穴から推測する



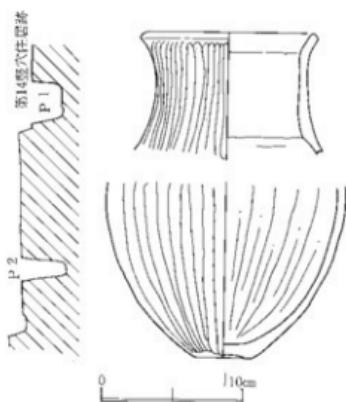
第28図 第13堅穴住居跡遺構図

また、東側に、P 6～P 9の小ピットがあり、それらはほとんど直径15cmくらいで深さ10cm前後である。補助的な柱穴の可能性がある。P 5 (80×34-15) は特殊ピットかもしれない。

遺物は、多くないが、壺口縁部(Po.1)とカメ底部が検出された。その土器から判断して、本住居跡は弥生後期(青木Ⅲ新)の住居跡と考えられる。



第30図 第14堅穴住居跡遺構図



第29図 第13堅穴住居跡土器実測図

と、本住居の大きさは約4.20×4.10mとなり、平面プランはほぼ正方形となる。

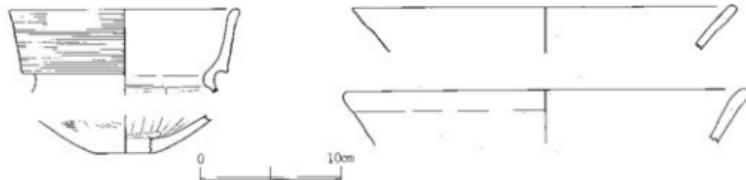
第14堅穴住居跡

A地区の北側、住居跡の密集地に位置する。平面プランはやや隅丸気味の長方形で、柱穴は2つである。第13堅穴住居跡と南側で重なり、西側の側溝は消失した。残った住居跡の肩からの深さは東側で26cmを測る。

柱穴は、P 1 (50×38-60) P 2 (36×32-42)cmである。底の絶対高差は20cmである。柱穴間距離は1.50mである。側溝、柱穴から

想定するところの住居跡は 3.82×4.58 m の長方形、面積約 17.5 m² である。

遺物は、床面で第31図の土器片が検出された。遺物よりこの住居跡は第13竪穴住居跡とほぼ同じ弥生後期（青木Ⅲ期）のものと考えられるが、切りあい関係からは、本住居跡のほうが第13住居跡を切っており、第13竪穴住居跡よりも新しい。



第31図 第14竪穴住居跡土器実測図

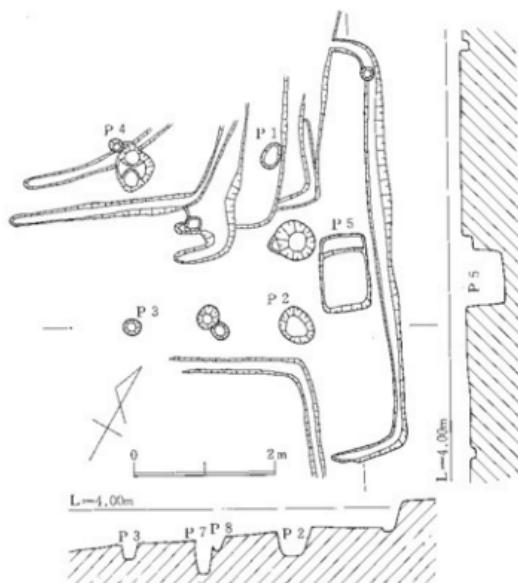
第15竪穴住居跡

A地区の北端、住居跡の密集地に位置する。西側では、第16～21住居跡と重なり、南西では第14竪穴住居と重なっている。東側で住居跡の肩が残り、住居跡の深さは、38cmである。柱穴はP 1～P 4と思われ、それぞれP 1 ($38 \times 26 - 15$) P 2 ($56 \times 44 - 46$) P 34

($24 \times 23 - 22$) P 4 ($22 \times 19 - 10$ cm) である、底の絶対高差は 14 cm。柱穴間距離は、P 1 から 2.50, 2.30, 2.58, 2.20 m を測り、柱穴の並びはやや長方形となる。柱穴、側溝から推測すること、本住居跡は 5.88×5.02 m の長方形プランとなる。

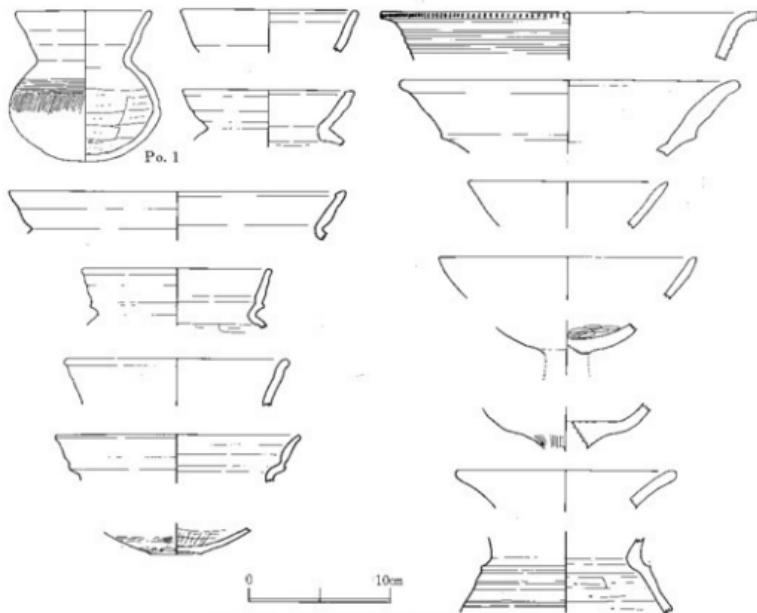
P 5 は貯蔵穴と思われ、中から完形の小型丸底壺 (Po.1) が出土した。直方体状に掘られていて、上面には板によって蓋をされていたのか、10cmほど北側が掘り込まれている。

遺物は先の小型丸底壺の



第32図 第15竪穴住居跡遺構図

他にも多く出土したが、それらの遺物により、本住居跡は、古墳時代前期（青木VII新）頃の住居跡と考えられる。



第33図 第15竪穴住居跡土器実測図

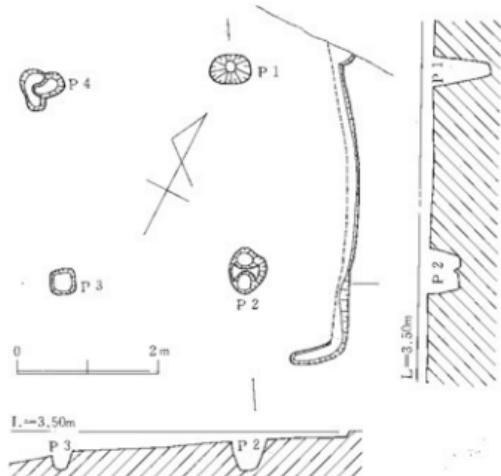
第16竪穴住居跡

A地区の北西すみに位置し、第15竪穴住居跡のすぐ西にある住居跡である。この地域からは多数のピット・溝が検出され、どのピットがどの側溝に対応するのか判断するのに非常に困難をきわめた。

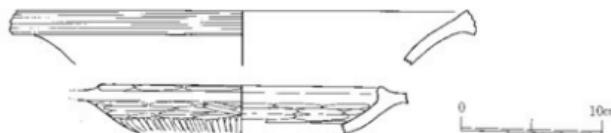
この地域には、溝などから判断して6個の住居跡があると思われ、何度も建て替え、建て直しが行われていると考えられる。

この住居跡の側溝は、東側のみ検出され、北側は未調査区域へつながっていく。また東南で溝となっているが東側では、段だけが残っており、溝をめぐらしたのは一部だけである可能性を持つ。

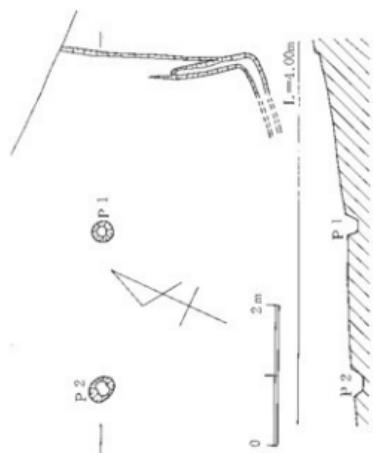
平面形は1辺約5.40m程の正方形と考えられる。柱穴と思われるものには、P1～P4で、それぞれ(43×60-80) (34×34-44) (36×43-23) (37×46-50)cmで柱穴底の絶対高差は42cmであるが、これはP1が極端に深いためである。柱穴間距離は、P1から順に、3.04、2.60、2.80、2.70mである。



第34図 第16竪穴住居跡遺構図



第35図 第16竪穴住居跡土器実測図



第36図 第17竪穴住居跡遺構図

遺物は、柱穴より弥生中期（青木Ⅰ期）の壺の口縁、高杯口縁が出土した。この遺物から本住居跡は弥生中期のものと考えられる。

第17竪穴住居跡

第16竪穴住居跡とほぼ重複する平面上に位置する。

東側に住居跡の肩と側溝がわずかに残る。側溝の残存部分と肩の部分の線がややずれているため、もう1つ住居跡がある可能性を持つが、対応するピットをみつけられなかった。

推定される柱穴はP1、P2で平面形で約 $5.66 \times 4.80\text{ m}$ の長方形、2本柱の竪穴住居である。ピットの大きさはP1 ($30 \times 32 - 16$) P2 ($131 \times 40 - 14$) で、その底の絶対高差は9 cmである。柱穴間距離は、2.26 m。ピットが浅いのは、他の住居跡に床面をかなり削られているからである。

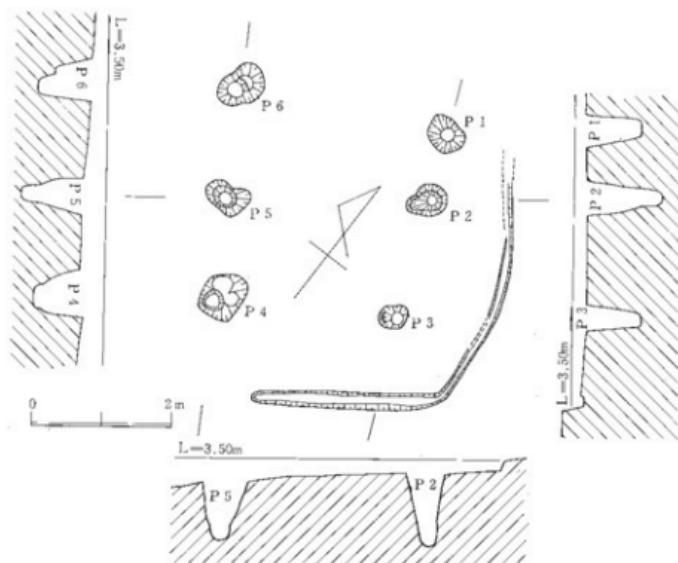
遺物は検出されなかった。時期は不明であるが、弥生中期から第15堅穴住居跡の時期（青木VII新）の間であることは確かであろう。

第18堅穴住居跡

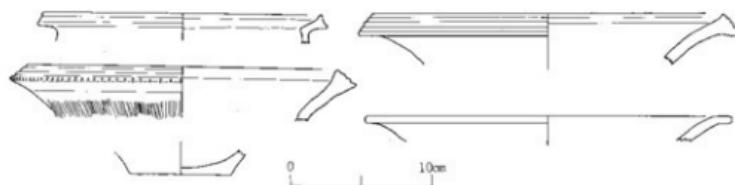
第16・17堅穴住居跡とほぼ同位置にあって、ほとんど重複する。

東側と南側一部に側溝が残っている。柱穴と推測されるものは、6個で、P1からそれぞれ、(44×57-79) (27×60-107) (32×62-87) (44×71-76) cmを図る。平面形は、やや長辺がふくらんだ方形で推定5.42×5.48 mの規模である。柱穴間距離は、P1から順に1.00、1.74、2.60、1.50、1.52、3.00 mである。

遺物は、P2、P4から弥生時代中期の土器が出土しているので、本住居跡の時代もその時期としてよいと考える。



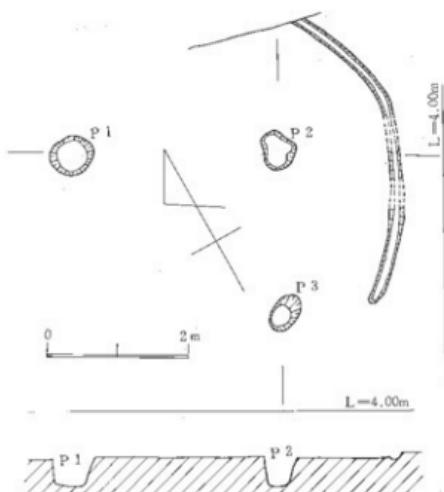
第37図 第18堅穴住居跡遺構図



第38図 第18堅穴住居跡土器実測図

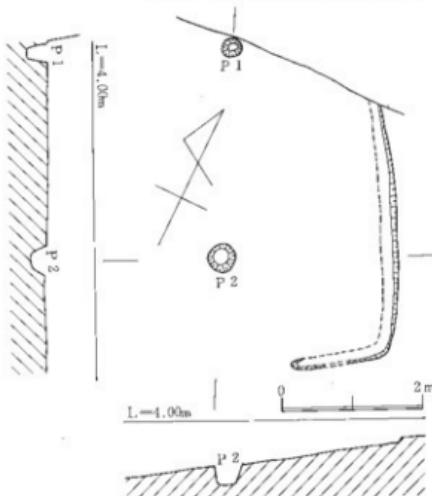
第19堅穴住居跡

第16～20堅穴住居跡の範囲とほぼ重複する。側溝と思われる溝は、その中では、最も西側にある。側溝はほぼ円形に近く、平面形を推測させる。柱穴と思われるものは、3つで、



もう1つあるものと思われるが、調査での西壁の下にあたり検出されなかった。P1から順に(53×64-27)(46×56-26)(36×58-48)cmである。柱穴の底の絶対高差は38cmである。柱穴間距離はP1・P2間2.90m、P2・P3間2.38mである。遺物はなかった。平面形から考えると弥生時代のものと考えられるが、断定することはできない。

第38図 第19堅穴住居跡遺構図



第40図 第20堅穴住居跡遺構図

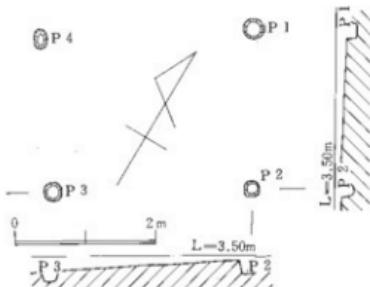
第20堅穴住居跡

第16～19堅穴住居跡の範囲とほとんど重複する。東側にわずかに肩が残るが、側溝があったかどうかは不明である。

推測される柱穴は2つである。P1(28×30-29)P2(38×43-28)cmで、底の絶対高差は0である。ピットの配列から復元すると、本住居跡は、5.20×4.85mのやや長方形の住居跡となる。遺物は、P1から弥生土器片が出土したが図化できるものではなかった。

第21堅穴住居跡

第16~20堅穴住居跡にはほぼ重なるが、やや南に位置する。側溝は検出されなかったが、ピットの大きさ深さがよくそろい、長方形に対応して並んでいるため、堅穴住居跡で側溝と肩部を失ったものと判断した。ピットの大きさはP1から順に(29×30-16)(22×26-24)(26×28-14)(18×29-14)cmで、深さが20cm内外と浅いことから、床面は、かなり上にあったと思われる。柱穴底の絶対高差は15cmである。柱穴間距離はP1から順に、2.26、2.84、2.00、3.00mである。



遺物はP1から土師器片が出土しているが、図化できるものはない。しかし、ここ多くの住居跡同様古墳前期の住居跡と考えられる。

第41図 第21堅穴住居跡遺構図

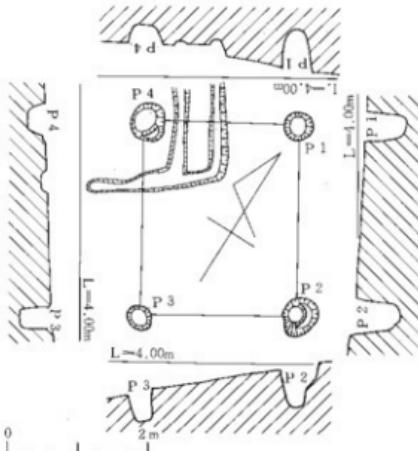
第22堅穴住居跡

第13堅穴住居跡の東側に位置する。大きさ、底の絶対高の似た4つのピットが長方形に対応して並んでいるところから、側溝は検出されなかったが堅穴住居跡の柱穴と推定した。

ピットの大きさはP1から順に(40×42-57)(47×58-66)(32×38-46)(48×56-22)cmで、底の絶対高差は22cmである。P4は第13堅穴住居跡内にあるため他より浅くな

っている。

遺物はP1・P2から、古墳時代前期と思われる土師器片が出土したが図化できなかった。また、P1から多量の碧玉片が出土した。この住居跡付近は、試掘時の第2トレンチにあたり、色凝灰岩の管玉未製品が出土しており、同じような場所で、古墳時代前期の玉作用の石材が出土したことは興味深い。原石は住居跡廃棄時に埋めたと推測される。ここで出土した碧玉原石が、直接にこの住居跡自体が玉作工房であったと断定する材料にはならないが、玉作工房である可能性は大きいと思われる。



第42図 第22堅穴住居跡遺構図

ここで、因幡地方の玉作遺跡について概観しておこう。昨年当財団によって調査された布勢第2遺跡から、弥生後期の玉作工房跡が発見された。これは工房跡としては因幡地方ではじめての発見であった。それ以前には、浜坂遺跡で「瑪瑙・出雲石片10数」が採集されており（弥生中期頃のものと推定される）、また青島遺跡で玉砥石が出土している。（現在その所在は明らかでない。青島遺跡の玉砥石は共伴する玉類から古墳時代のものと思われる）（梅原末治「鳥取県史蹟勝跡調査報告書第1冊」による。）

玉作遺跡は今後の発掘調査でさらに増加することは確かであろうが、現在までに発掘調査された、布勢第2遺跡、湖山第2遺跡から考えると特徴的なことは、湖山第2遺跡で弥生中期と古墳前期と思われる遺構から未製品・原石が出土しているのに対し、布勢第2遺跡の場合、弥生後期の竪穴住居1棟から未製品・原石が出土しており、時代が重ならないことである。この2つの遺跡は湖山池の北東岸と南東岸に位置し、距離的にはそう離れていず、湖山池を中心とする同一の文化圏に属する遺跡であろう。したがって、湖山→布勢→湖山という人の移動を考えられぬこともない。しかし、攻玉技術は、弥生中期の溝をつくり割っていくやり方、弥生後期前葉の四角柱を作りそれを面取りして研磨する方法、古墳前期は、弥生時代の両者が緑色凝灰岩を原石としているのに対し碧玉を原石としている点、それぞれ異なっており、技術的な系譜はつながらない。

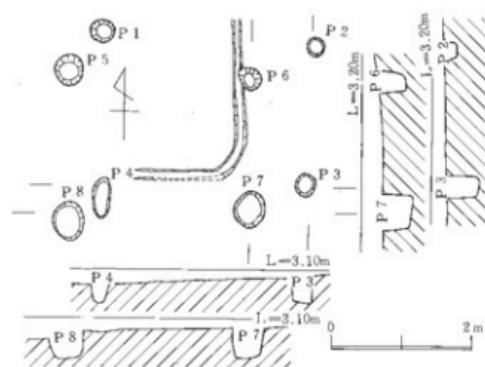
また湖山第2遺跡の玉作関係の遺物の出土の仕方をみると、同時代の他の遺構からは全く玉類の出土をみないことが興味深い。それは、この地での玉作生産は（生産していたと考えるならば）集団内専業的生産の形態をとっており、集団自体が玉作にかかわっているのではないことを意味する。布勢第2遺跡では、弥生後期の竪穴住居跡は1棟しか検出されず集落内の位置は不明であったが、おそらく、湖山第2遺跡同様、集団内専業的生産の状態であったと推測される。

問題はその生産がムラ規模での自給的生産にあたるのか、それとも湖山池周辺といったまとまりを持つ地域を対象とした生産なのかということである。この点は今後の課題であるが、遺物の量から考えると、大規模な玉生産は行われていないようと思われる。

第23、24竪穴住居跡

第6竪穴住居跡の南東に、第6竪穴住居跡の柱穴とは考えられないピットが数個検出され、そのピットは図43のように、4つずつのピットが2組、ほぼ長方形に対応していることがわかった。この位置はかなり地山を削平されている場所であり、側溝は検出されなかったものの、竪穴住居跡と判断した。

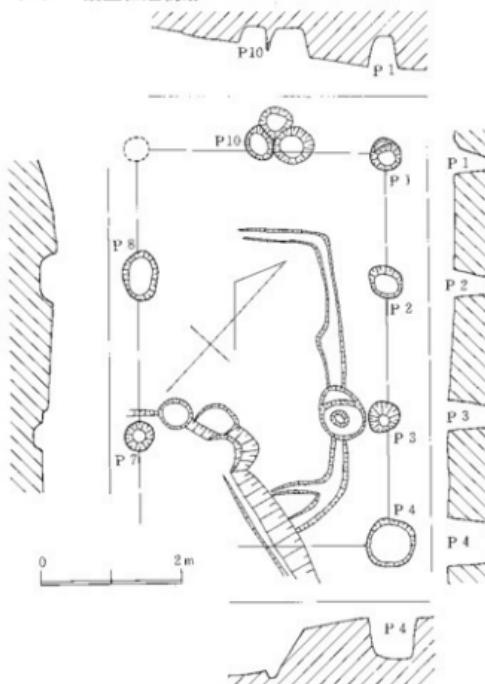
竪穴住居跡とすると、P 1～P 4を柱穴とする第23竪穴住居跡と、P 5～P 8を柱穴とする第24竪穴住居跡で、ピットの大きさはP 1から順に、(32×36-24) (25×26-18) (29×33-37) (24×58-27) (40×42-36) (29×36-40) (44×52-42) (44×56-34)cmである。第23竪穴住居跡の柱穴の底の絶対高差は30cm、第24竪穴住居跡は9cmとなる。



第43図 第23・24竪穴住居跡遺構図

柱穴間距離は第23竪穴住居跡でP1から順に3.00、1.96、3.06、2.20m、第24竪穴住居跡でP5から順に2.58、1.84、2.60、2.10mである。遺物はP1とP6で小片が出土しているが図化できるものはなかった。第6竪穴住居跡との新旧関係も明らかでないが、のちに作る住居跡の方が床面を深くつくると考えると、両住居跡は第6竪穴住居跡よりも古いものであると推測する。

(B) 掘立柱建物跡

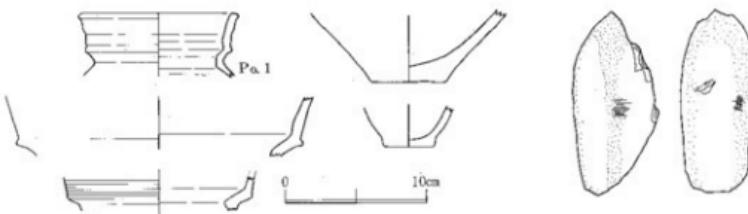


第44図 第1掘立柱建物跡遺構図

第1掘立柱建物跡

A地区の南にあり、第1、3、4竪穴住居跡とほぼ重複する位置にある。推定2間×3間の掘立柱建物跡である。

柱穴は7個検出され、3個の柱穴を推定した。柱穴の大きさはそれぞれP1(35×44-45)、P2(43×56-61)、P3(42×48-74)、P4(71×73-65)、P7(40×42-15)、P8(51×71-21)、P10(39×50-29)cmである。底の絶対高差は22cmである。柱穴間距離はP1～P4間は順に1.84、1.94、1.76m、P7 P8間は2.28m、P10 P1間は1.80mである。以上から推測すると、3.50m×5.54mの広さを持つ掘立柱建物跡となる。



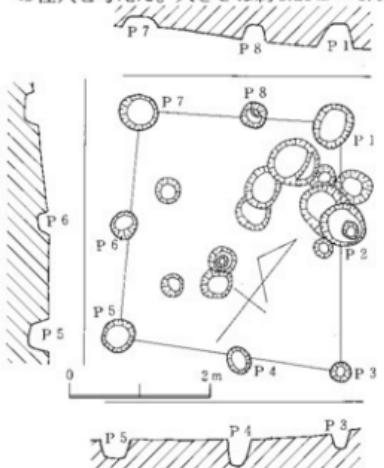
第45図 第1掘立柱建物跡遺物実測図

遺物は、少量出土したが、混入した遺物が多いと思われ、第45図のうち、一番新しいと考えられるPo.1のカメ口縁部より、この建物跡の時期は、古墳時代前期の掘立柱建物跡と思われる。

第2掘立柱建物跡

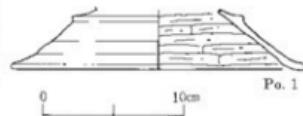
A地区の南西、第5竪穴住居跡の南に位置し、一部が第5竪穴住居跡と重複する2間×2間の掘立柱建物跡である。

柱穴は8個で、P1から順に(53×64-39)(61×63-43)(30×30-24)(32×39-38)(46×48-30)(37×46-16)(52×56-15)(36×36-26)cmの大きさである。柱穴の底の絶対高差は28cm。柱穴間距離は、P1から時計回りに、1.74、1.80、1.70、1.64、1.62、1.18mである。ややいびつな形ではあるが、柱穴らしいピットであり、掘立柱建物の柱穴と考えた。大きさは約3.20m×3.40mとなる。

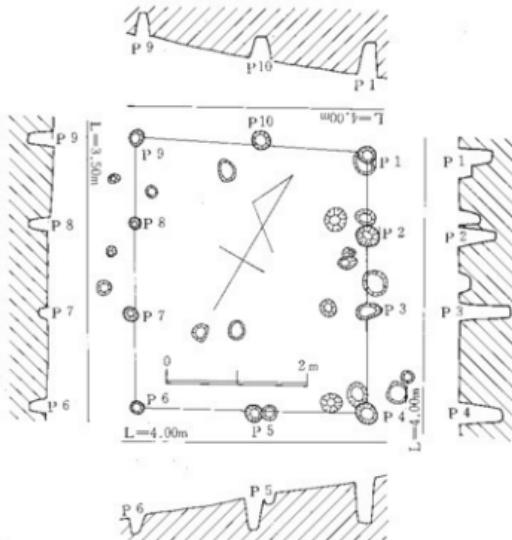


第46図 第2掘立柱建物跡遺構図

遺物はP2、P3、P5、P7で検出されたが、図化できるものは少ない。Po.1の器台から判断すると、この建物跡は古墳前期の掘立柱建物跡と考えられる。



第47図 第2掘立柱建物跡土器実測図



第48図 第3掘立柱建物跡遺構図

第3掘立柱建物跡

A地区の北部にあり、第13竪穴住居跡の南に位置し、第13竪穴住居跡と重複する2間×3間の建物跡である。柱穴はP1から順に(23×24-47)(30×34-54)(22×37-74)(28×32-61)(24×24-46)(17×18-24)(20×24-12)(26×27-32)cmの大きさである。柱穴としては非常に小さく、おそらく文字通り掘立小屋程度の建物であったと思われる。柱穴の底の絶対高差は40cmであるが、これは西側に傾斜する地形のため、西側の柱穴を深く掘っ

たためと思われる。柱穴間距離はP1から時計回りに1.14、1.10、1.44、1.58、1.80、1.36、1.26、1.20、1.80、1.50mを測る。

平面規模は3.28×3.84mとなり、その面積は12.7m²となる。

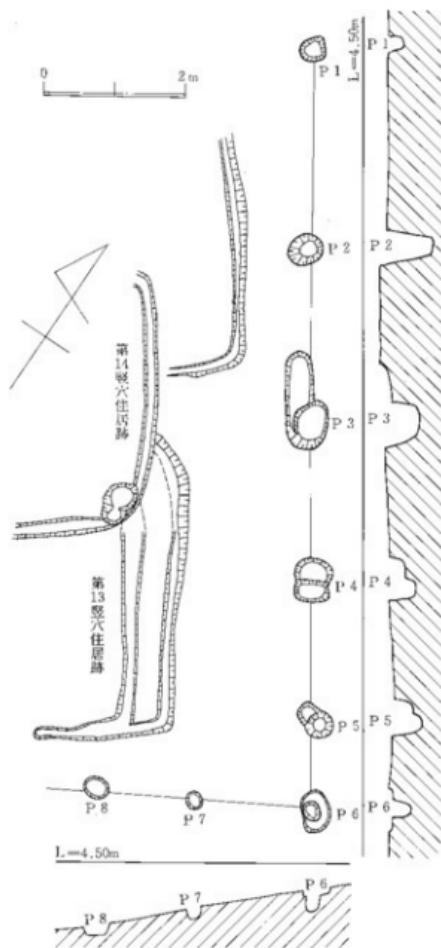
遺物はP3から土器片が検出されたが、図化できるものはなかった。他では検出されなかった。土器片が小さく、時期は推測しがたい。

第4掘立柱建物跡

A地区の北部、住居跡の密集する地区にある。北側は未調査地区に入り、西側は住居跡があつたため柱穴は検出されず、全ぼうは明らかでない。

検出された柱穴と思われるピットは8個でこの建物は5間×2間の建物と思われるが、後述するように、別の考えもできる。柱穴の大きさはP1から順に(32×41-22)(41×51-70)(48×72-50)(62×50-36)(30×57-42)(23×30-31)(20×26-15)(30×35-14)cmである。柱穴底の絶対高差は46cm。柱穴間距離はP1から2.86、2.50、2.40、1.90、1.23、1.75、1.36mを測る。P1が非常に浅く、また柱穴間距離もP1 P2間は他より長く、P1は独立したピットとも考えられる。またP6もやや浅く、P5 P6間の距離も狭いことから、P6～P8も独立したピットである可能性がある。そう考えると3間×?間の掘立柱となる。

当初想定した掘立柱建物跡の大きさは、10.85m以上×3.11m以上であり、P1、P6



第49図 第4掘立柱建物跡遺構図

～P 8が独立したものと考えると、 $6.80\text{ m} \times ?$ となる。

遺物はP 3、P 4、P 5、P 7、P 8で土器片が検出されたが、図化できるものは少ない。そのため時期の決定はむずかしいが、土器片は土師器であった。

(C) 土 坡

A地区で検出された土坡は10基であるが、そのうち7基は、A地区のほぼ中央に集中しており、他の3基の土坡とは異った性格をもつと推測される。中央の7つの土坡も、竪穴住居跡と重なっており、時期もかなり差があり、性格も不明のところが多い。土坡のうちのいくつかが土塙墓であるならば、集落と墓地の関係を考える上で貴重ではあるが、両者の関係については考察できなかった。しかし、土塙墓と思われるものと集落との時期は同一であり、集落→墓地、あるいは墓地→集落といった土地利用の変遷はなかったように見える。

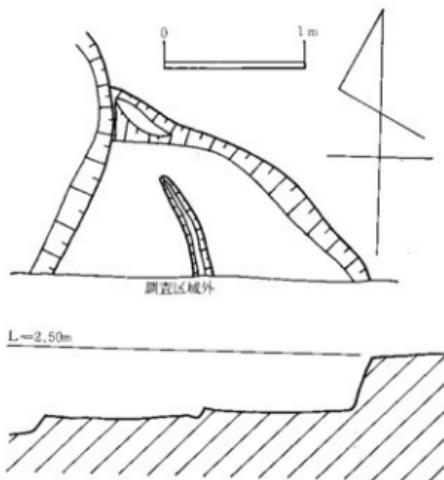
第1土坡

第1竪穴住居跡の東に位置し、南側は調査地区外に入り全体は明らかでない。西側は第1竪穴住居跡と重なり、調査時には第1竪穴住居跡のほうが新しいと考えて調査したが、出土遺物から見ると、第1土坡のほうが新しく第1竪穴住居跡を切っているようである。

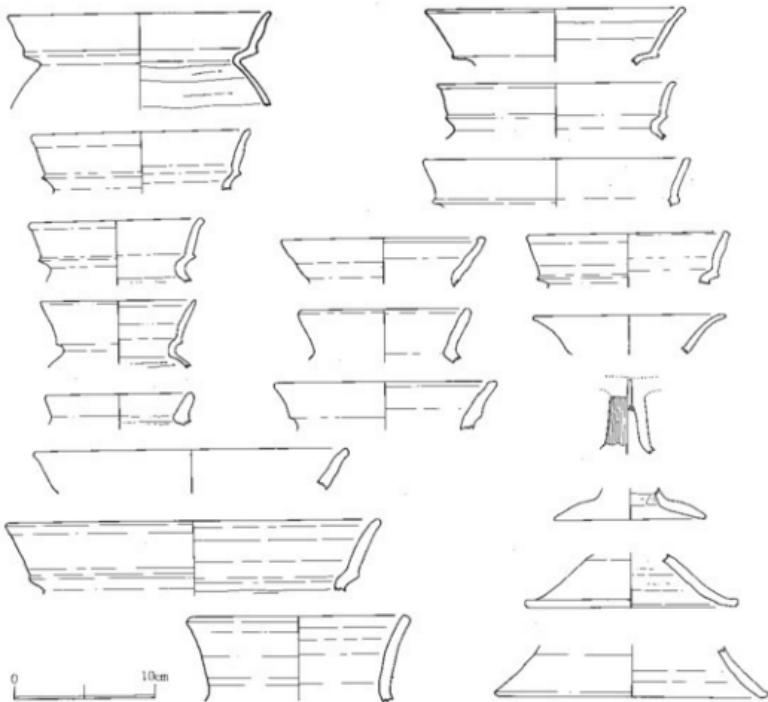
深さは40~50cmで、検出された部分の中央には浅い溝がある。床はほぼ平坦で、溝の東側が10cmほど高い。

この土坡の性格は全体が明らかでないためよくわからないが、埋土中から多量の土器片が出土しており、床もほぼ平坦であることから竪穴住居跡かと思われる。しかし、柱穴と思われるピットは検出されなかった。

遺物より、本土坡は古墳時代前期後葉（青木VII新）頃のものと思われる。



第50図 第1土坡遺構図



第51図 第1土塙土器実測図

第2土塙

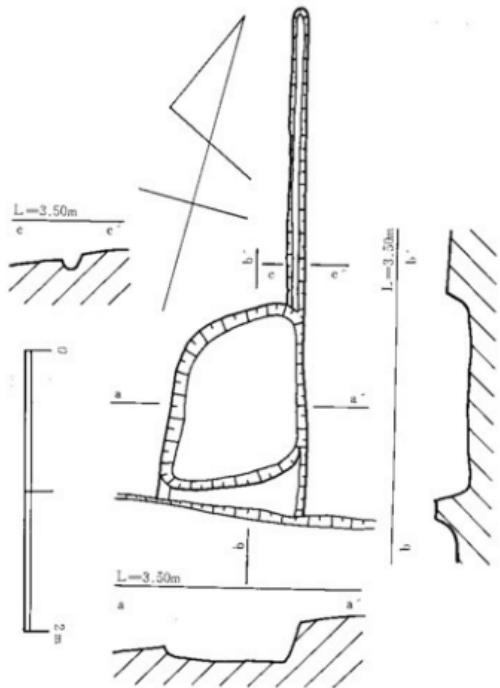
第6竪穴住居跡の北に位置する土塙である。(95×127-28)cmの土塙に、深さ10cm程、ほぼ14cmほどの溝が北に伸びている。その両者が同一の遺構なのか、単独の遺構が切りあっているのかはわからなかった。土塙の底は平坦であり、すぐ南の第6竪穴住居跡の床面とはほぼ同じ高さにあることから、実際の深さはかなり深いと考えられ、土塙墓かと思われる。しかし、他の土塙墓と思われる土塙からは少し離れており、貯蔵穴的な土塙であるかもしれない。

遺物は少なかったが、少量の土器片が出土した。遺物より本土塙は古墳時代前期（青木IV期）頃のものと考えられる。

第3土塙

A地区のほぼ中央に位置し、第9竪穴住居跡に接する。第4土塙を切って掘り込まれている。長軸127cm、短軸82cm、深さ約30cmの長円形の土塙である。底はほぼ平坦である。

遺物は、底面で、高杯杯部Po.1が検出された。脚部を欠いてはいるものの、床面にはば



第52図 第2土塙造構図

完形のまま入れたものと思われ、この土塙が土塙墓であり、高杯は枕として使われた可能性がある。他の遺物もかなり検出され、それらの遺物から考えると、本土塙は古墳時代中期（青木Ⅶ期）頃の土塙墓と考えられる。

第4土塙

第3土塙の南にあり、1部第3土塙にきられている。長軸188cm、短軸150cm、深さ22cmの土塙である。底はほぼ平坦である。

遺物は多くはないが少量出土しており、その遺物から本土塙の時期は古墳時代前期（青木Ⅳ期）頃と考えられる。

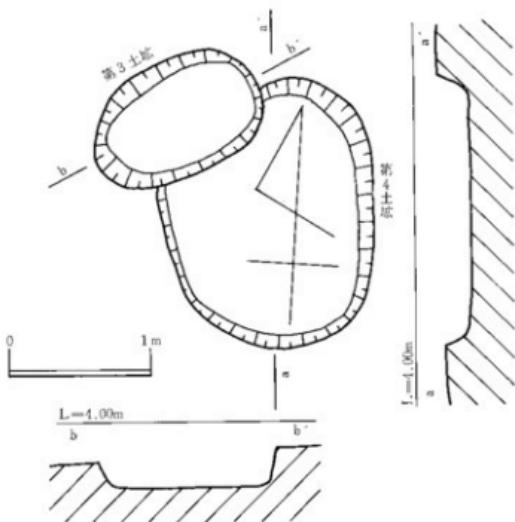
形態から判断して土塙墓と思われるが、断定はできない。

第5土塙

第9竪穴住居跡の中に位置する。南側で第6土塙と重なる。長軸78cm、短軸60cm、深さ25cmを測る。第6土塙の埋土と似かよっており、切りあい関係は不明。本土塙からは遺物の出土をみなかった。土塙墓と思われるが、時期・性格ともに決定しがたい。

第53図 第2土塙土器
実測図





第54図 第3・4土塚遺構図

第6土塚

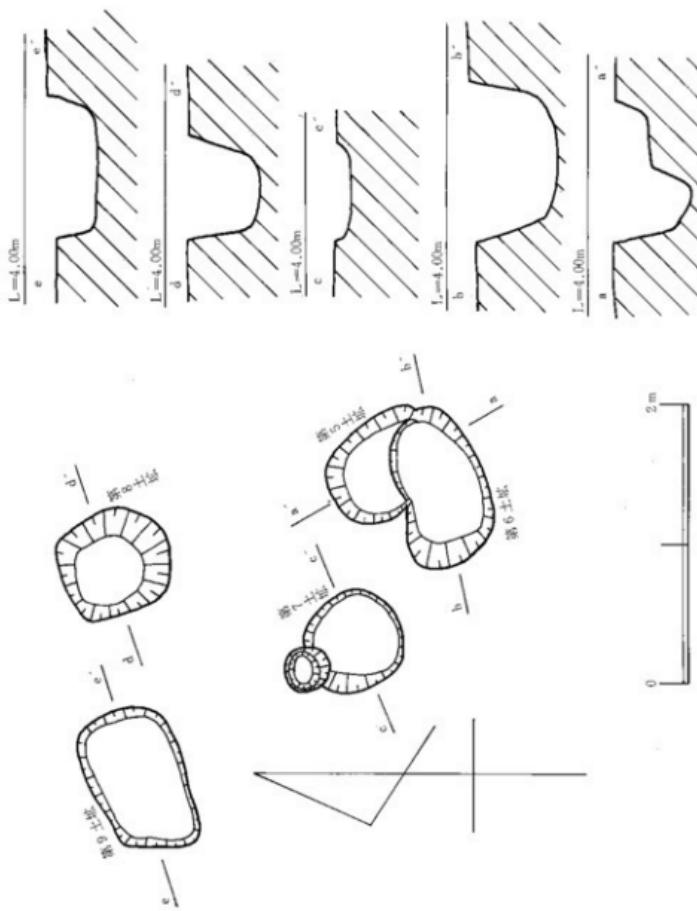
第5土塚の南にあり、第5土塚ときりあう。長軸114cm、短軸56cm、深さ55cmを測る。第5土塚と同じく、土塚墓と思われるが、決定しがたい。遺物は、土師器器台片が出土しており、古墳時代前期のものと考えられるが、本土塚の時期もその頃であろう。

第7土塚

第9竪穴住居跡の北東柱穴に接する(72×68-11cm)の土塚である。出土遺物がなく、時期・性格ともに不明である。

第8土塚

第9竪穴住居跡の床面北側にある、(81×72-50cm)の土塚である。上層で、土師器カメ上半部分が出土した(Po. 1)。土塚墓かと思われるが、第9竪穴住居跡の時期とほぼ同じと考えられるから、住居跡の貯蔵穴かもしれない。遺物の時期から推測すると、本土塚は古墳時代前期(青木VII新?)頃の土塚と思われる。

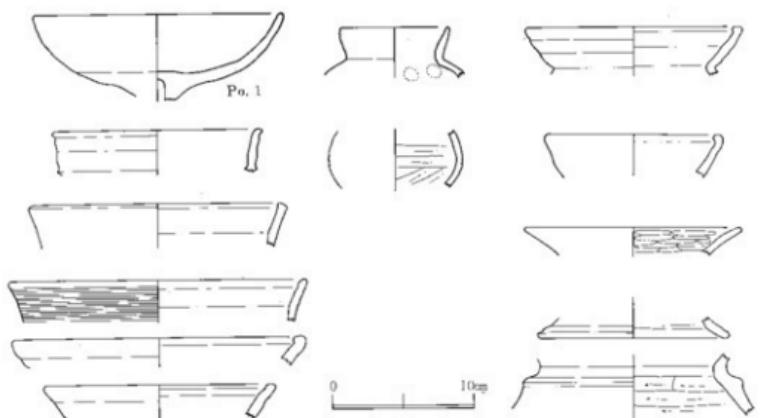


第56図 第5～9土塚遺構図

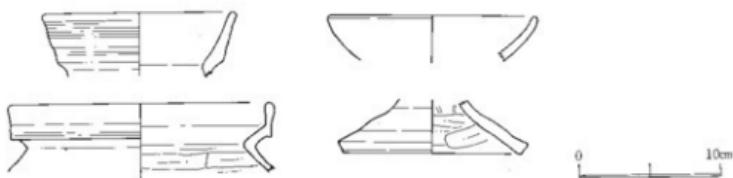
第9土塚

第8土塚のすぐ西にあり、長軸112cm、短軸68cm、深さ32cmのやや長方形に近い土塚である。底は平坦であった。

遺物は、土師器カメ破片が1点出土している。遺物から考えると古墳時代前～中期の土塚であろうが、第9竪穴住居跡の中にあることから、第9住居跡の貯蔵穴の可能性がある。しかし、土塚墓の可能性もある。



第55図の1 第3土埴土器実測図

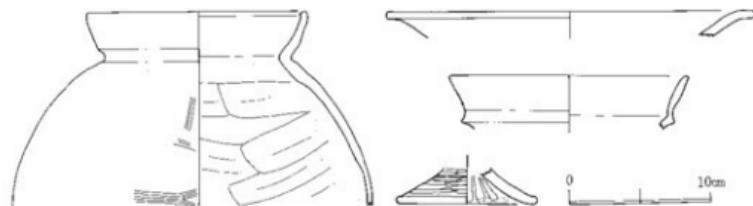


第55図の2 第4土埴土器実測図



第57図の1 第5土埴土器図

第57図の3 第9土埴土器図

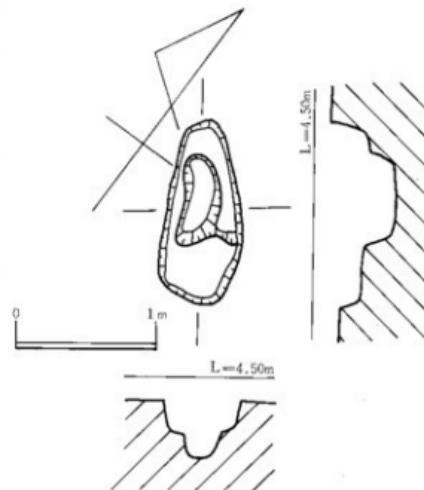


第57図の2 第8土埴土器図

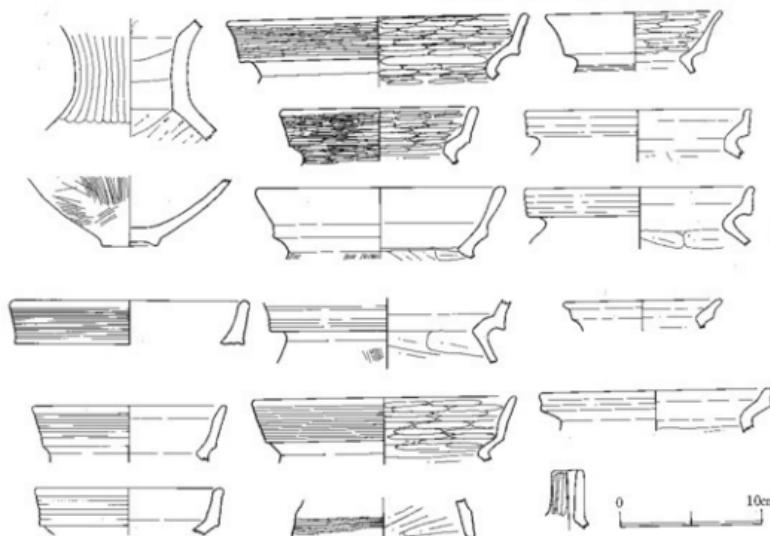
第10土塚

A地区の北端にある土塚である。2段に掘り込まれているが、外側は長軸129cm、短軸53cmである。2段目は長軸63cm、短軸27cm。深さは一番深いところで41cmである。

遺物は多く出土しており、その遺物より考えると弥生時代後期(青木Ⅲ新)頃の土塚と思われる。性格は不明であるが、土塚墓・木棺墓の可能性がある。



第58図 第10土塚遺構図



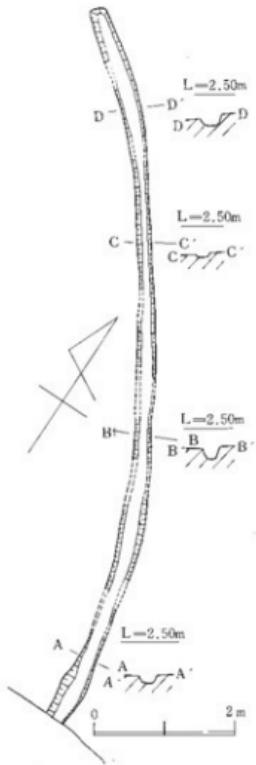
第59図 第10土塚土器実測図

(D) 溝状遺構

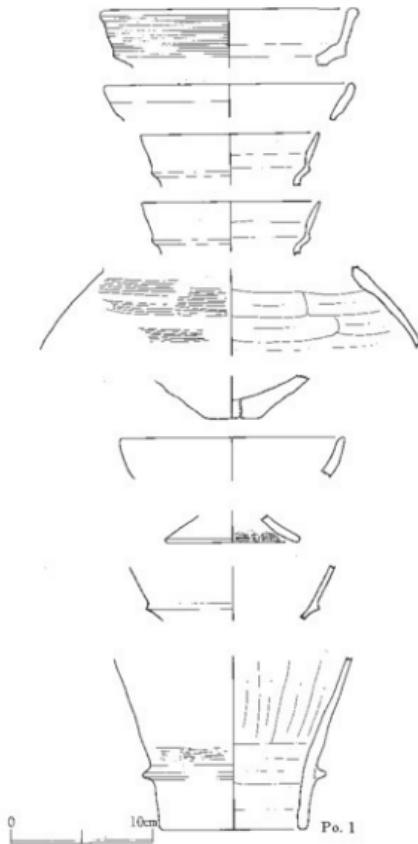
A地区で検出された溝状遺構は、5本であるが、そのうち4本は2つずつ対応している。遺構の性格はいずれも不明であるが、平行に並ぶ2本の溝は興味深い。不勉強のため類例を知らないが、御教示を得たい。

第1溝状遺構

A地区の南にあり、ゆるやかに湾曲する北北西—南南東方向に伸びる溝である。南側は調査区域外に入り、全体は把握できない。多くのピットと切りあい、第1・2堅穴住居跡と南で重なる。



第60図 第1溝状遺構遺構図



第61図 第1溝状遺構土器実測図

深さは5cmから16cmであるが、その底は北よりB-B'点ころまでは水平であり、その南から、16cmほどの高度差をもち、なだらかに傾斜している。

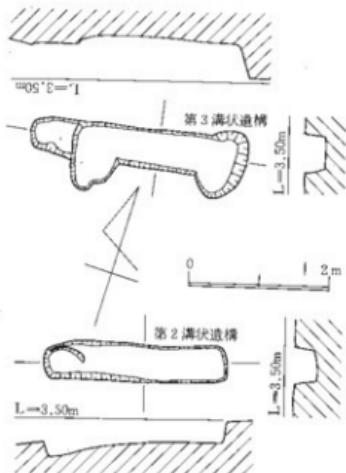
遺物はそう多くなく多少時代差のある遺物も出土しているが、P0.1のこしき他から考えると青木Ⅷ新頃に比定されよう。

性格は不明であるが、ほぼ等高線に沿って掘られている。

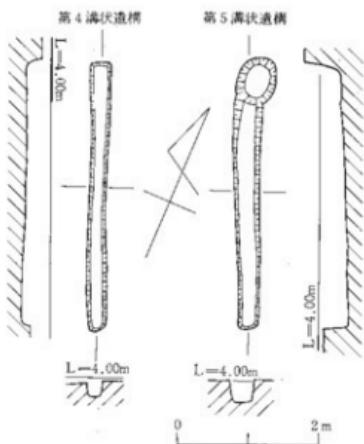
第2・3溝状造構

第6竪穴住跡の第2土塙の北に位置する。2本のほぼ平行する溝である。第2溝状造構は幅約54cm長さ260cm深さ約32cmの溝で主軸は東北東-西南西の方向である。第3溝状造構はピット2つとなっていると思われるが(新旧はわからなかった)、そのピットの端から測れば、幅55cm長さ308cm深さ29cmの溝である。また西側の底に段差があるが、そこまでとすると224cmとなる。両者とも底は平坦で壁面もほぼ90度に掘り込まれている。両者の間は2.50mを測る。

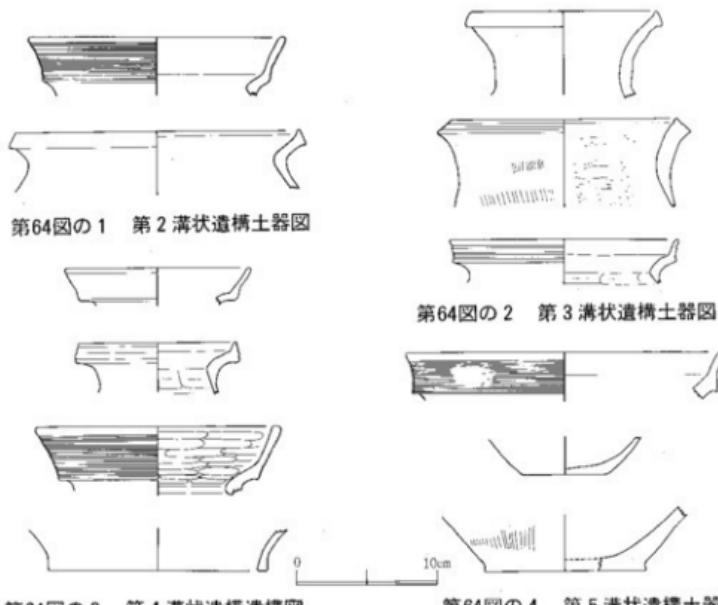
遺物は第2・3ともに弥生後期(青木IV古)に比定される。その大きさから、当初土塙墓と考えたが、次の第4・5溝状造構が検出され同様に平行する溝であることから、平行して掘り込まれていることに意味があり、土塙墓ではないと思われる。しかしその性格は不明である。



第62図 第2・3溝状造構造構図



第63図 第4・5溝状造構造構図



第64図の1 第2溝状造構土器図

第64図の2 第3溝状造構土器図

第64図の3 第4溝状造構造構図

第64図の4 第5溝状造構土器図

第4・5溝状造構

第10・11・12堅穴住居跡の北に位置する平行する2本の溝である。

第4溝状造構は、幅33cm長さ382cm（北側に桑耕作用の穴があり、それを含めた）を測る。ほぼ垂直に掘り込まれ底はほぼ平坦である。方向は北北西—南南東である。

第5溝状造構は、幅24cm長さ383cm深さ約21cmを測る。これもほぼ垂直に掘り込まれており、底は平坦である。

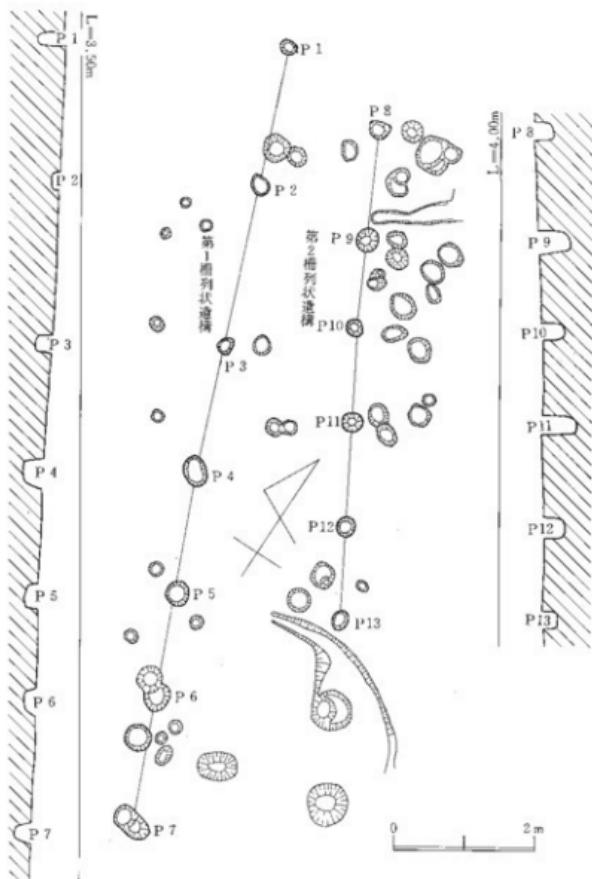
2つの溝は平行で、その間は約182cmである。底は第5溝状造構の方が6cm程低くなっているが、これは第5溝状造構が西側にあり、地形が西に傾斜しているためと思われる。幅で約10cm程差があるが、この2つの溝が1つの目的のために同時に掘り込まれたことは推測される。その目的はおそらく第2・3溝状造構と同様であろうと思われるが、その目的が何であるのかは不明である。

遺物は、多くないが、それぞれで出土を見た。遺物より弥生後期（青木Ⅲ古）頃に比定され、第2・3溝状造構と同様である。

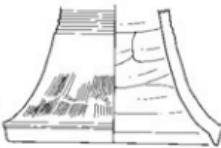
(E) 櫛列状遺構

A地区では、柱穴と考えられない多数のピットが検出され、そのうちのいくつかが直線的に並んでいることがわかった。間隔もほぼ同程度で並んでおり、何らかの人為的意図を持って作られた遺構であると考えた。また、直線的には並ばないが遺物の出土する小ピットも多くあり、それらのピットも人為的に掘り込まれたものと思われるが意味はつかめなかった。

第1櫛列状遺構



第65図 第1・2櫛列状遺構遺構図



第66図 第2櫛列状遺構土器図

A地区の北側、第13堅穴住居跡の西から、南に続くピット列が検出された。いずれのピットも、住居の柱穴と考えるにはやや小さく、掘立柱建物跡となるには対応するピットもなく、柵列ではないかと想像した。以下の柵列状遺構も同様である。ピットは7つ並び、P1から順に(22×20-40)(30×25-12)(25×20-24)(44×36-30)(36×34-10)(34×28-18)(33×26-24)cmの大きさを持つ。ピット間距離はP1から順に2.00、2.30、1.90、1.70、1.50、1.96mである。全長は11.26mとなる。

遺物は検出されなかつたが、他の柵列状遺構から考えると弥生中期かと思われる。

第2柵列状遺構

第1柵列状遺構の東に、ほぼ平行してピット列がみられ、第2柵列状遺構とした。ピットは6個で、P8から順に(30×30-26)(34×30-44)(26×24-50)(30×26-50)(28×29-30)(30×20-22)cmの大きさである。ピット間の距離は1.60、1.26、1.34、1.38、1.30mである。全長6.98m。

遺物は、P10、P11で高杯脚部が検出され、それが同一個体であることがわかつた。他にも弥生土器片が少量出土した。遺物より本遺構は弥生中期のものと考えられる。

第3柵列状遺構

第1、第2柵列状遺構の南に、4個のピット列があり、柵列と考えた。P1から順に(28×41-36)(22×35-26)(20×22-39)(24×30-19)cmの大きさである。底の絶対高差は14cm。ピット間距離はP1から、1.02、0.86、0.66mである。全長2.54m。

遺物はなかつた。

第4柵列状遺構

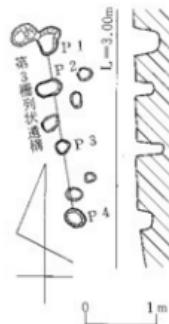
A地区のほぼ中央の南北に走るピット列である。6個のピットが並ぶ。P1から順に、(46×49-32)(18×30-24)(32×38-36)(30×15-18)(16×16-42)(38×42-40)cmの大きさである。底の絶対高差は48cm。ピット間距離はP1から順に1.62、1.56、1.52、1.54、1.50mを測る。全長7.74m。

遺物は弥生土器片が少量出土したが、図化できるものはなかつた。

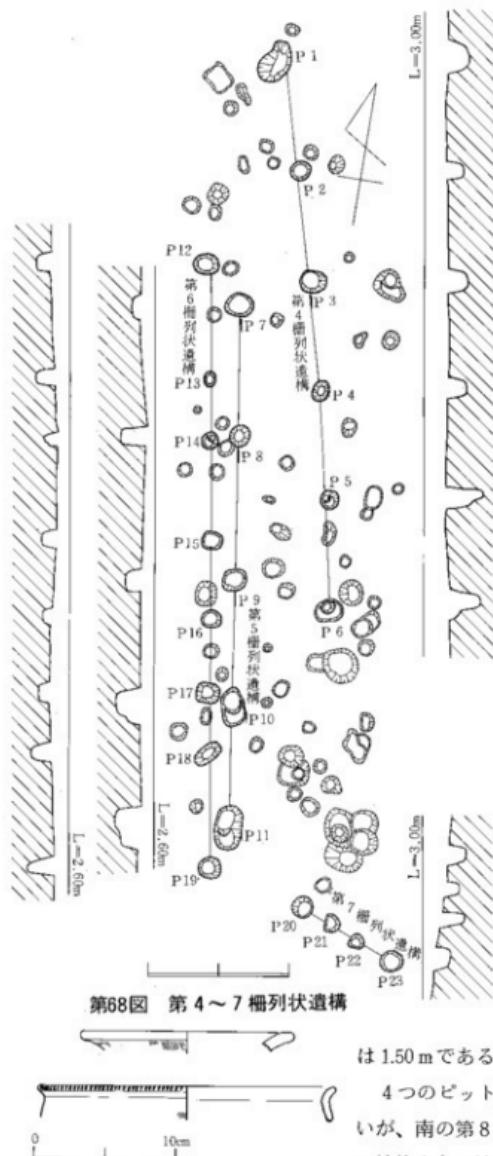
第5柵列状遺構

第4柵列状遺構の西に、ほぼ平行する5個のピット列があり、第5柵列状遺構とした。ピットの大きさはP7から順に(36×40-12)(30×30-26)(32×34-16)(56×38-36)(63×40-38)cmである。底の絶対高差は23cm。ピット間距離は、P7から順に1.86、2.04、1.78、1.74mである。全長は7.42m。

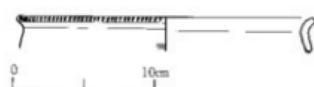
遺物はピット内から弥生土器片が検出されたが図化できるものはなかつた。



第67図



第68図 第4～7柵列状遺構



第69図 第6柵列状遺構土器図

第6柵列状遺構

第5柵列状遺構の西にはほぼ平行する8個のピット列があり、第6柵列状遺構とした。

ピットはP12から順に(30×36-20) (22×17-16) (24×24-18) (26×30-20) (24×28-12) (32×34-16) (36×40-16) (30×32-38) cmの大きさである。底の絶対高差は、22cm。ピット間距離はP12より、1.64、0.90、1.40、1.10、1.08、0.86、1.62mである。全長は8.60m。

遺物はP15より弥生土器片が検出された。破片で、にわかに時期を決めがたいが、弥生時代の柵列であることはたしかであろう。

第7柵列状遺構

第4柵列状遺構の南に北西-南東方向に並ぶ4つのピット列があり、第7柵列状遺構とした。

ピットの大きさは、P20より順に(32×30-18) (24×26-20) (22×22-34) (24×30-22) cmである。底の絶対高差は22cm。全長

は1.50mである。

4つのピット例で、遺構かどうかはっきりしないが、南の第8柵列状遺構とよく似ており、同様の性格をもつ遺構と思われる。遺物はなかった。

8柵列状遺構

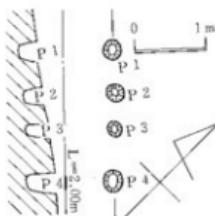
A地区の最南端に位置し、北西—南東方向に並ぶ4つのピット列である。

ピットの大きさはP 1から順に(26×28-26) (23×28-28)

(20×23-35) (27×32-41)である。底の絶対高差は8cm。

ピット間距離はP 1から0.62、0.52、0.72m。全長は1.86mである。

遺物は、P 4から弥生上器ツボ底部が出土した。第7柵列状遺構と同様、4つのピット列で、遺構といえるかどうか疑問だが、直列していることに何らかの意味があったと考えられる。だが、その意味は不明である。

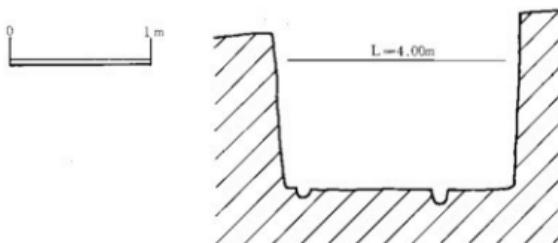
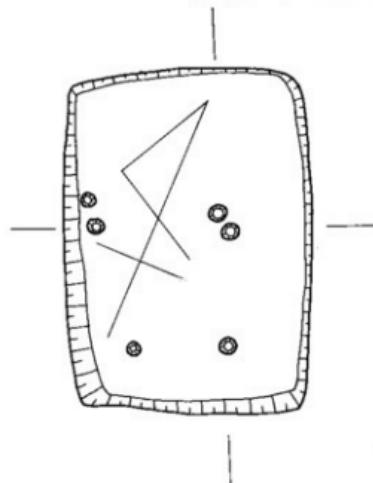
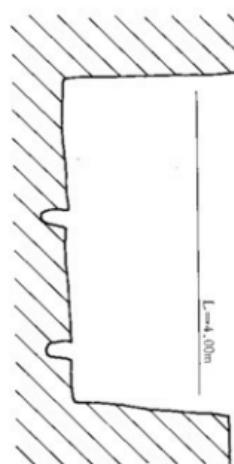


第70図 第8柵列状遺構



第71図 第8柵列状遺構土器図

(F) 貯蔵穴状遺構

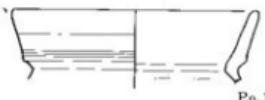


第72図 貯蔵穴状遺構遺構図

A地区の北側、第4・5溝状遺構の北に位置する大きな土塹である。

176×246cmの大きさで、深さは約125cmである。ほぼ垂直に掘り込まれ、底は平坦である。ローム層から掘り込まれているが、底はバミス層になっている。底には、小ピットが6つ検出されたが、バミス層にバミス混りの土が落ちているため検出はむずかしく他にもある可能性はある。

遺物は底面に密着してPo.1のカメ口縁部が出土したが、埋土は他の遺構の埋土と全く異なり、バミスが多く混っていることが特徴であり、しかも非常にやわらかかった。そのことから考えて、この遺構は、近代の貯蔵穴で、底の小ピットは空気孔として作られたものではないかと思われる。しかし、遺物通りの時期である可能性もあり、類例を待ちたい。

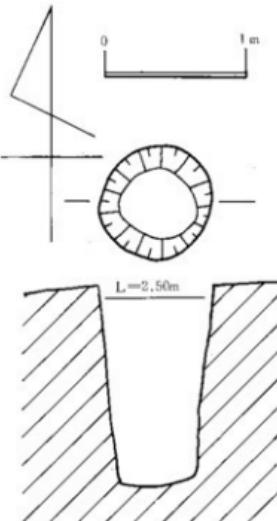


第73図 貯蔵穴状造構土器図

(G) 井戸状遺構

A地区のはば中央部、第9竪穴住居跡の南に位置する。直径80cmのはば円型な穴で、深さは144cmを測る。埋土は、ローム質に似た淡褐色粘質土で、他の遺構の埋土のクロボクとは異っている。井戸状遺構と仮称したが、底からは湧水はなかった。貯蔵穴的なものと考えられようが、遺物はなく、また北側で検出された長方形の貯蔵穴の埋土とも異なる。

遺物は検出されなかった。性格・
時期ともに不明である。



第74図 井戸状遺構

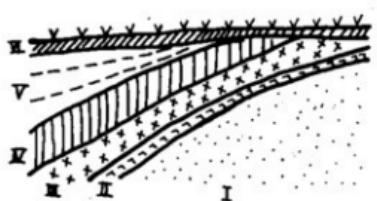
第3節 A地区まとめ

A地区は調査の結果弥生時代中期から古墳時代中期にかけての集落跡であることがわかった。しかも、その竪穴住居跡は、きわめて密集しており、建てかえ・拡張のあとがみえるものも多い。このことは集落が弥生中期から古墳中期まで、絶えることなく続いたことを示すと思われる。しかし、古墳時代後期以降の住居跡は検出されず、この集落は古墳後期まで続かないことがわかる。上層の遺物の中に須恵器片は混じっていたが、明確な遺構から須恵器の出土をみていらない。（採集された須恵器は、この地区的すぐ北にある5世紀末～5世紀末にかけての古墳群を築造する際に、この地が何らかの形で利用されたため出土したという可能性がある。）

また、今回調査した地域の北側には、急な崖があり、図版1の写真でわかるように、この地区と同様の地形がその崖下まで続き、その部分にも集落が続いていると思われる。さらに崖下の湾曲した部分にまで続く可能性がある。南側は、試掘調査時の第15トレンチがあり、そこでかっての湖岸と思われるような層がみられた。したがってA地区的集落がそのまま南へ続くとは考えられないが、A地区的東側の尾根は続いているはずであるから、尾根沿いに住居跡の続いていた可能性はある。そして、それはB地区へ続く可能性がある。

A地区的旧地形について多くのことが判明した。A地区的東側には、南にのびる丘陵が北の台地から続き、西側の低地へかなり急な傾斜を形成する。住居跡はその丘陵と低地との間の海拔2～4m付近にはば線状に形成されている。調査区の西はかなり低地であり、海拔0mに近く湧水もみた。この集落が成立していた頃は、その低地は湿地であった可能性がある。しかし、B地区にみられるような腐植土・砂層の堆積はなかった。A地区的土層は東西断面の概念図（第75図）に示した通り、下層は古砂丘(I)があり、古砂丘の上層はローム化しており(II)、その上層は倉吉バミスで、その上層もローム化している。このロームが本遺跡の地山である。その上層にクロボク層の堆積がみられ、その堆積は3層に分かれている(VI)。これらの結果は鳥取大学による三浦古墳の調査によって判明した上層と一致する。

A地区的集落で興味深いことは、近くに適当な耕地がみあたらないことである。A地区的西には、現在新田部落があるが、そこは近世以後の「新田」であり、それ以前の耕作は



第75図 A地区東西断面概念図

されていないと思われる。と考えると、ここに集落を形成した人々は、何らかの農業には携わっていたにしても、湖山池（湖山池-湖山川-千代川-日本海へ）の漁業・水運に関わっていたと考えられよう。それを示すものは土錐が少量出土しているのみであるが、湖山池を目の前に見る集落としては、池の存在を無視することはできないであろう。

第4章 B 地 区

第1節 概 要

A地区の南東に位置し、サッカー場の南西に隣する。A地区より一段低い平坦部で、南西に湖山池がある。

発掘前は畠地として利用されていた。本調査に先だち、 $2\text{ m} \times 10\text{ m}$ のトレーニングを入れたところ、第14、19トレーニングにて地表下40cmで黄色バミス（みそ土）とローム層がみられ、この面で遺構を検出した。下層に古砂丘があり、古砂丘の上にローム層、その上にバミスが堆積している。同トレーニング以西においては耕作土下は古砂丘でありバミス、ローム層は後に畠作で削平されている事がわかった。第13、20トレーニング以西は、調査の対象からはずし、東側の 1200 m²に対して、調査が行なわれた。

発掘方法はA地区と同様重機により、地山面の黄色バミス（みそ土）と黄灰色粘土層を目標に北側から表土の除去を行なうこととした。しかし、北側部分には、ローム層がみられず、腐植土が堆積していたため、試掘調査の時とは、予想外の調査となった。そこで、北側隅に $2\text{ m} \times 10\text{ m}$ （深さ3.5m）のトレーニングを東西に入れ土層を観察したところ、縄文土器や石錘が出土し、この時代の遺構が存在することが想像された。このトレーニングにより、第4～6層の黒色土層から、多くの遺物を検出し、黒色土を目標として、表土はぎが行なわれた。その結果、この北側黒色土面において、柱根が残る第1掘立柱建物跡、木枠を伴う井戸遺構、第2、3掘立柱建物跡、第1竪穴住居跡等を検出し、南側のローム面上からは、第4～第8掘立柱建物跡、第1～第3土塙等を検出した。また、縄文時代の遺構と思われたものは、鳥取大学教育学部教授豊島吉則、赤木三郎両氏に観ていただいたところ、縄文海進に伴う旧海岸線であることがわかった。以上調査で明らかになったものは、竪穴住居跡1棟、掘立柱建物跡8棟、土塙3基、井戸1基である。遺構は標高2～3mの平地に検出された。時期的には、弥生前期～中世までまたがっている。



第76図 作業風景

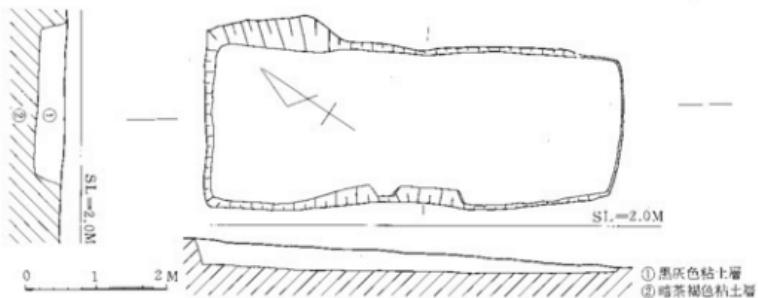


第77図 作業風景

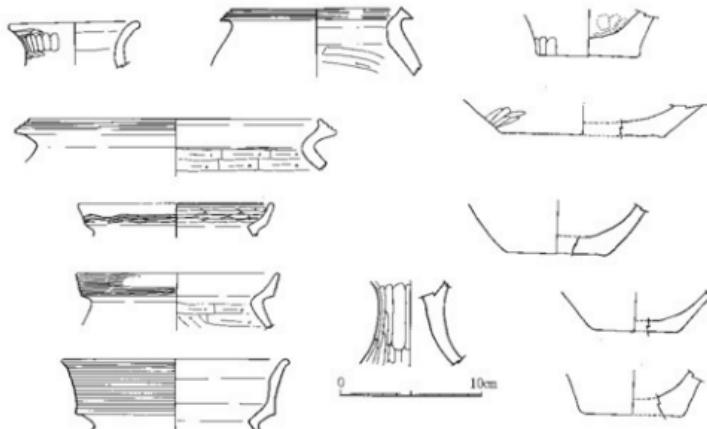
第2節 遺構

第1堅穴住居跡

B地区の北側に位置し、第1掘立柱建物跡の南々東、第2、第3掘立柱建物跡の北東に存在する。主軸は北西—南東軸にとり第1掘立柱建物跡と直交する。平面形は長方形をなし、上縁部長軸5.9m、端軸2.2m、深さ0.35mである。底面も長方形で、長軸5.75m、短軸1.86mを測り、底面積約10.5m²である。柱穴は検出していない。遺物は、少量であった。時期は弥生後期（青木Ⅲ）頃と思われる。



第78図 第1堅穴住居跡遺構図



第79図 第1堅穴住居跡遺物図

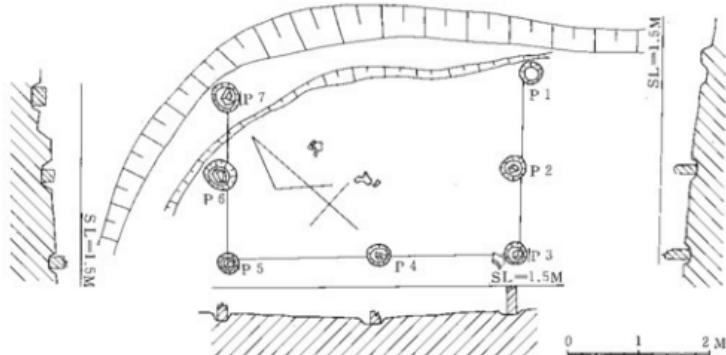


第80図 B区全体造構図

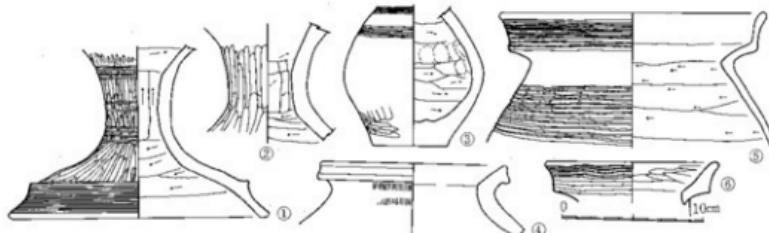
第1掘立柱建物跡

B地区北東すみに位置し、井戸遺構の北々東に存在する。北東側は調査区外にあたり、壁に入っているため規模はつかめなかった。主軸は北東—南西軸にとる、梁間2間、桁行2間以上の建物と推定される。桁行2.7m、妻通4.1mを測り、床面積11.1m²である。

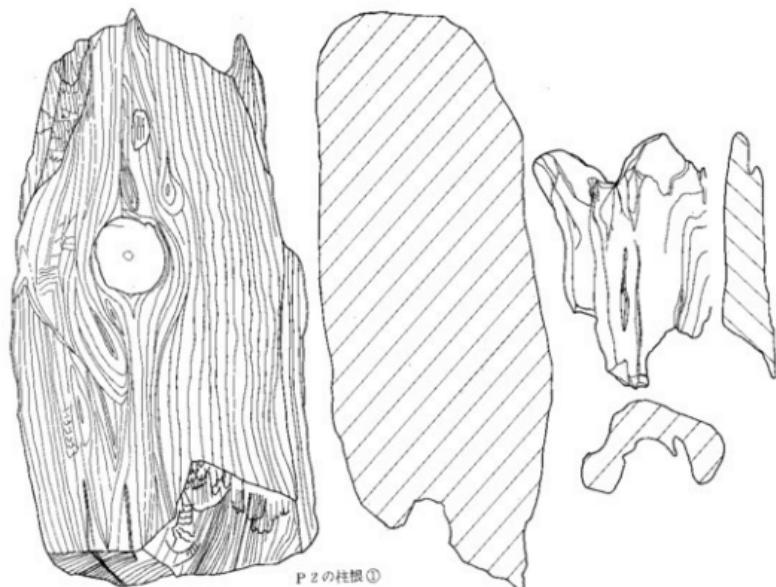
柱穴は7個を検出した。すべて円形の単孔である。P₂～P₇から柱根を検出した。(第83、84図①②③④⑤⑥) 材質はヒノキ材を用いている。各柱間距離はP₁から1.08、0.92、1.62、1.82、0.90、0.82mを測る。各柱穴底の絶対高はP₁より0.88、1.00、1.06、0.97、1.04、0.93、0.80mで、その差は26cmである。各柱穴プランはP₁より(34×32-7)(36×34-6)(34×32-7)(34×32-5)(30×30-8)(46×40-13)(42×38-10)cmを測る。遺物は床面から器台①②壺の底部③口縁④カメの口縁⑤⑥を検出しており、弥生後期後葉～古墳時代初頭(青木Ⅲ・Ⅳ)頃と考えられる。



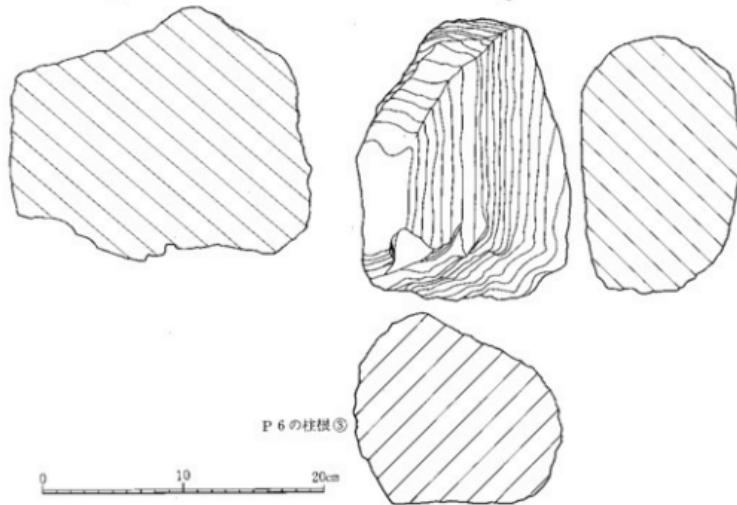
第81図 第1掘立柱建物跡遺構図



第82図 第1掘立柱建物跡遺物図



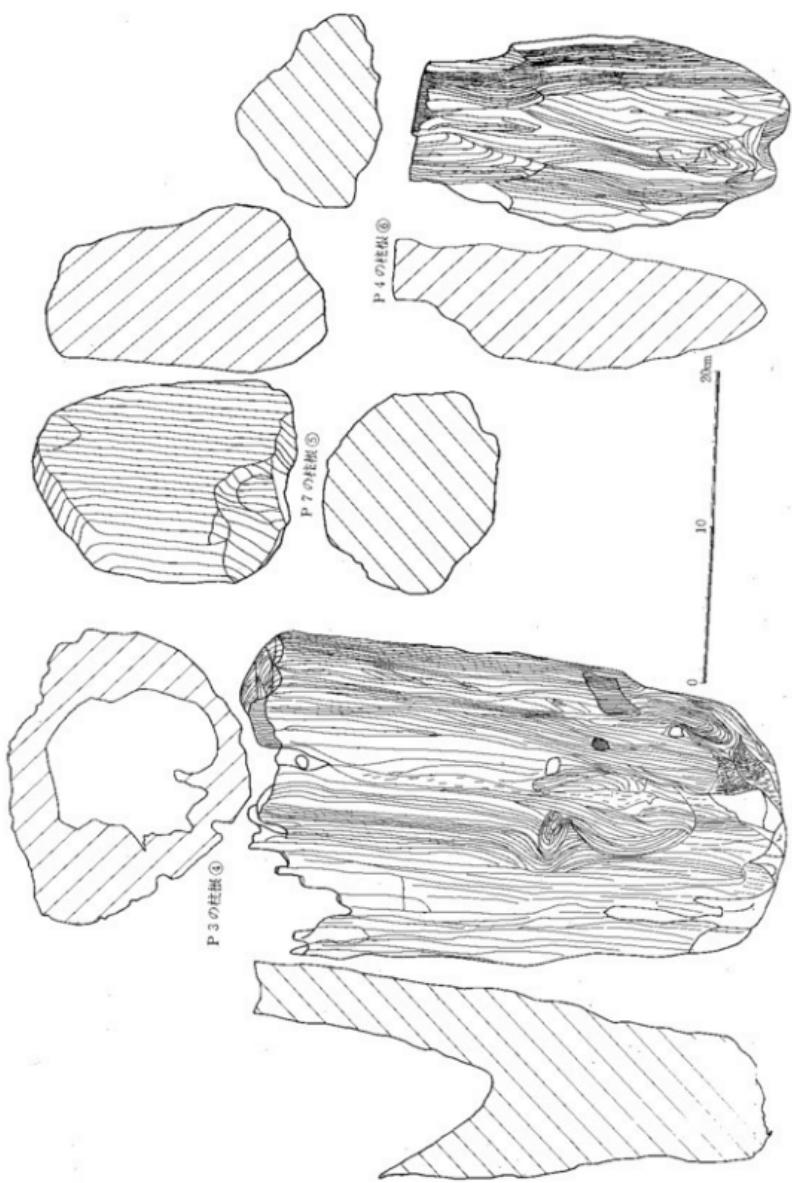
P 2 の柱根 ①



P 6 の柱根 ⑤

0 10 20cm

第83図 第1掘立柱建物跡柱根図



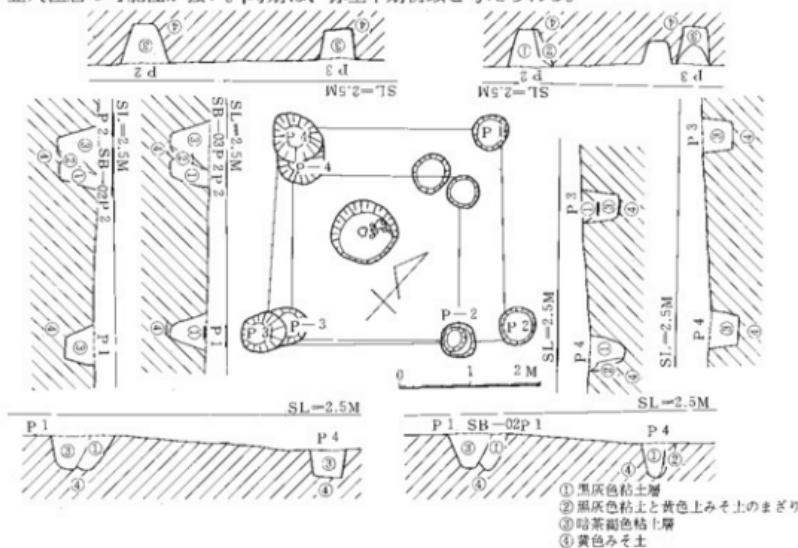
第84図 第1掘立柱建物跡柱根図

第2掘立柱建物跡

B地区の北側に位置し第1竪穴の西南西、井戸遺構の南々東に存在する。第3掘立柱建物跡とはP₂Rが切り合っており第2掘立柱建物跡の方が古い。主軸は北西—南東軸による梁間1間、桁行1間の建物である。長軸桁行2.34m、短軸妻通2.32mを測り床面積約5.4m²である。P₂のみ二段底で他はすべて円形の単孔である。各柱間距離はP₁から1.62、1.98、1.96、1.94mを測る。各柱穴底の絶対高はP₁より1.62、1.98、1.96、1.94mで、その差は31cmである。各柱穴プランはP₁より(46×46-52)(54×48-50)(96×54-50)(106×68-52)cmを測る。遺物はP₂より壺の口縁、土鍤等を検出している。時期は、弥生前期後葉頃と考えられる。掘立柱建物跡としているが側構が削平された竪穴住居跡の可能性が強い。

第3掘立柱建物跡

B地区の北側に位置し、第1竪穴住居跡の西南西、井戸遺構の南々東に存在する。上に述べたように、第3掘立柱建物跡の方が新しい。主軸を北西—南東軸による梁間1間、桁行1間の建物である。長軸桁行1.55m、短軸妻通1.54mを測り床面積約2.4m²である。各柱間距離はP₁から2.3、3.1、2.5、2.2mを測る。各柱穴底の絶対高はP₁より、1.74、1.62、1.77、1.71mで、その差は15cmである。各柱穴プランはP₁より(52×50-42)(56×50-40)(96×54-50)(106×68-56)cmを測る。中央に特殊ピットを持ち、中より、壺1点①、土器片②③磨製石斧1点④、炭を多量に検出している。第2掘立柱建物跡と同じく、竪穴住居の可能性が強い。時期は、弥生中期初頭と考えられる。



第85図 第2、第3掘立柱建物跡遺構図

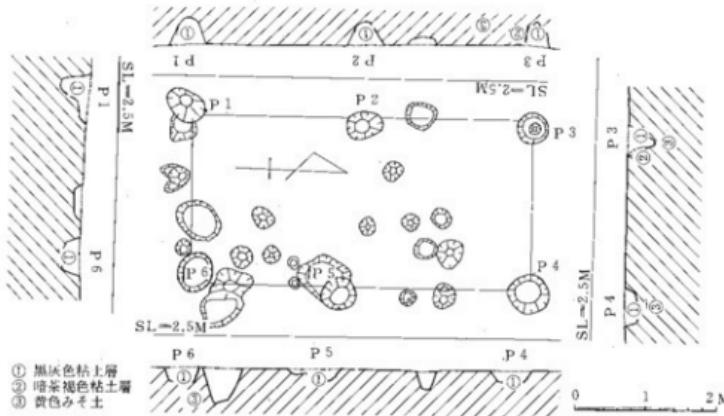


第86図 第2掘立柱建物跡遺物図

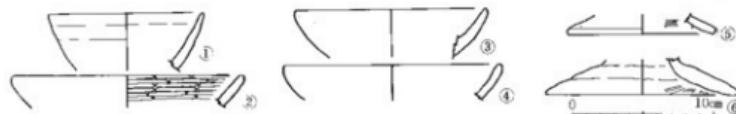


第4掘立柱建物

B地区のはば中央に位置し、第2、第3掘立柱建物跡の南、第5掘立柱建物跡の北西に存在する。主軸はほぼ南北軸による梁間1間、桁間2間の建物である。長軸桁行長4.8m、短軸妻通長2.4mを測り床面積約11.5m²である。柱穴は6個を検出した。Rのみ二段底で他はすべて円形の単孔である。各柱間距離はP1から2.04、1.94、1.84、2.18、1.62、1.86mを測る。各柱穴の絶対高はP1より、1.68、1.69、1.65、1.85、1.87、1.74mで、その差は22cmである。各柱穴プランはP1より(58×40-38)(50×38-38)(44×44-38)(58×56-20)(50×44-14)(58×48-26)cmを測る。遺物はRより高杯脚⑤⑥Rより高杯①②③④を検出している。時期は、古墳時代中期初頭(青木Ⅱ期)と考えられる。



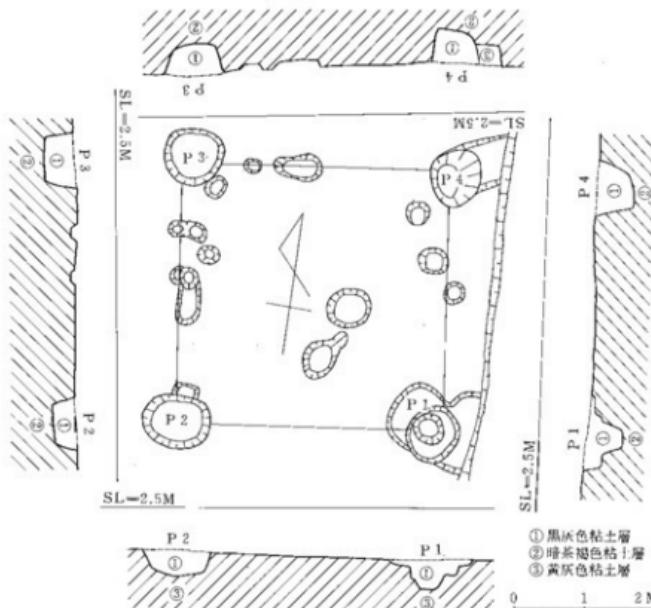
第88図 第4掘立柱建物跡遺構図



第89図 第4掘立柱建物跡遺物図

第5掘立柱建物

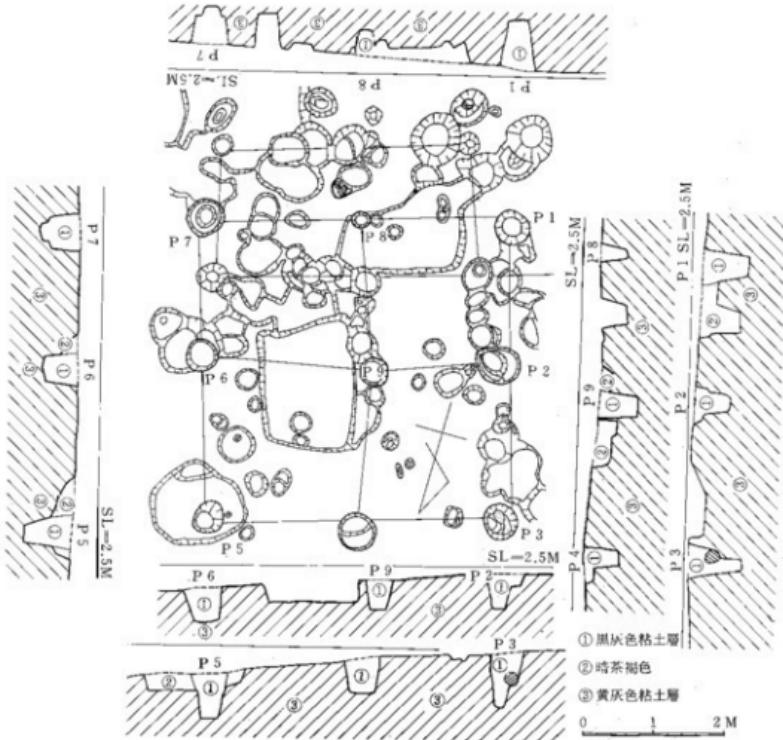
B地区のはば中央に位置し、第6掘立柱建物跡の北、第1土塁の東に存在する。主軸を東北東-西南西軸にとる梁間1間、桁行1間以上以上の建物と推定される。主軸は第4掘立柱建物跡と直交する。長軸桁行長3.8m、短軸妻通長3.7mを測り床面積約14.1m²である。柱穴は4個を検出した。 P_1 のみ二段底で他はすべて円形の単孔である。各柱間距離は P_1 から2.80、3.00、2.98、2.84mを測る。各柱穴底の絶対高は P_1 より1.33、1.52、1.48、1.29mで、その差は23cmである。各柱穴プランは P_1 より(82×72-52)(98×76-32)(84×82-50)(82×76-49)cmを測る。遺物は各柱穴から土師器片を検出しているが、図化できるものがなかった。時期は、不明。



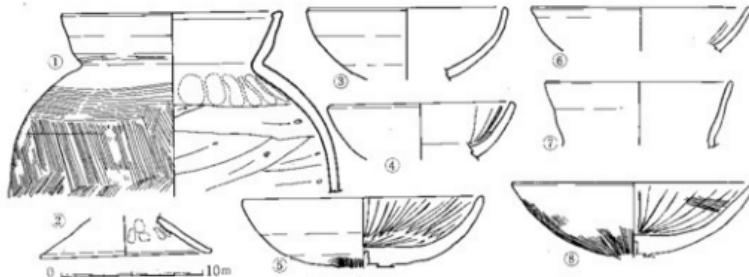
第90図 第5掘立柱建物跡遺構図

第6掘立柱建物跡

B地区の南に位置し、第7、第8掘立柱建物跡の北東にあり、第3土塹を内部にもつ、主軸を南南東-北北西軸による梁間2間、桁行2間の総柱の建物である。主軸が第7、第8掘立柱建物跡と直交する。長軸桁行長4.4m、短軸妻通帳4.2mを測り床面積約18.5m²である。柱穴は9個を検出した。P₂、P₃、P₄、P₇は二段底で、他はすべて円形の単孔である。各柱間距離はP₁から1.48、1.80、1.60、1.64、1.80、1.44、1.80、1.86、1.80mを測る。各柱穴底の絶対高はP₁より1.52、1.73、1.50、1.66、1.26、1.48、1.40、1.66、1.46mを測り、その差は47cmである。各柱穴プランはP₁より(50×50-66)(68×56-50)(50×48-74)(54×52-50)(43×42-66)(46×44-50)(56×52-58)(26×22-48)(40×40-54)cmを測る、遺物はP₁よりカメ①P₄より高杯②③④P₅より壺の口縁⑦P₆より高杯⑤⑥P₇より高杯⑧等を検出している。時期は古墳時代前期後葉頃（青木VII）と思われる。



第91図 第6掘立柱建物跡遺構図



第92図 第6掘立柱遺物図

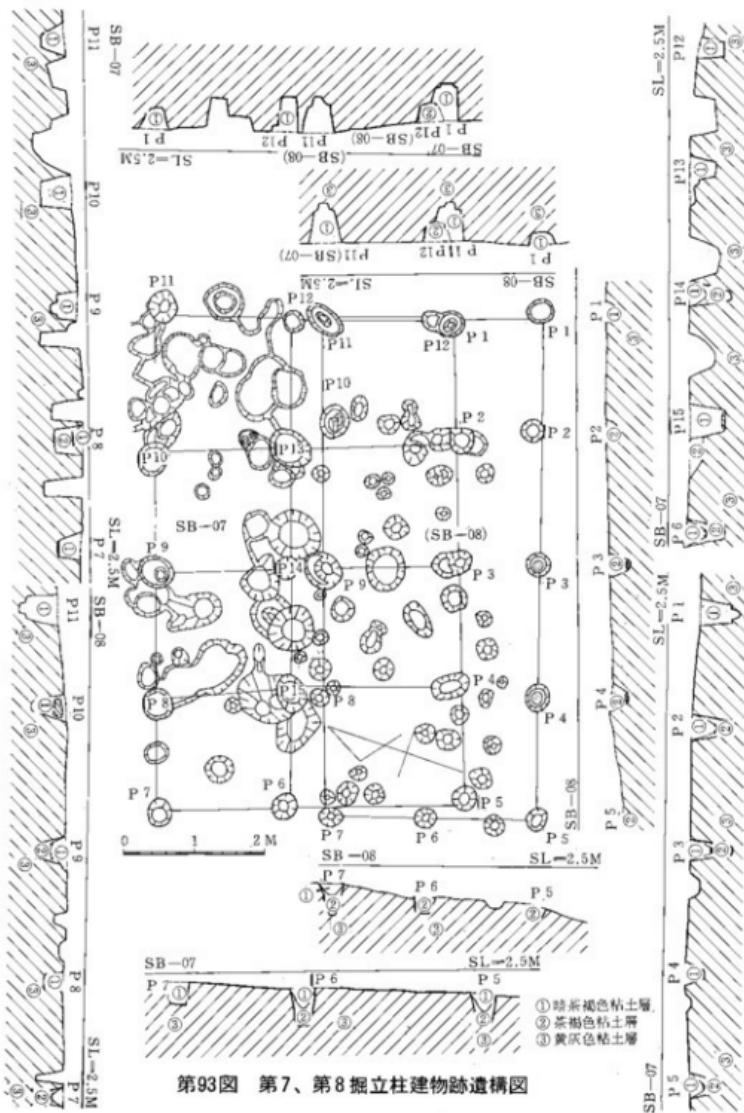
第7掘立柱建物跡

B地区の南に位置し、第6掘立柱建物跡の南西、第2土塙の南南東に存在する。主軸を東北東—西南西軸にとる梁間2間、桁行4間の総柱の建物である。主軸が第6掘立柱と直交し、第8掘立柱と平行する。長軸桁行7.0m、短軸妻通4.3mを測り床面積約30m²である。柱穴は15個を検出した。 $P_1 \sim P_4$ は建てかえのためか重複している。 P_1 と P_6 、 B が二段底で他はすべて円形の単孔である。 R_6 の底から平べったい石を検出している。各柱穴間距離は P_1 から1.30、1.36、1.40、1.30、2.26、1.40、1.10、1.44、1.12、1.72、1.54、1.40、1.40、1.34、1.40、1.18mを測る。各柱穴底の絶対高は P_1 より1.70、1.58、1.55、1.85、1.70、1.73、2.05、2.00、1.98、1.86、1.90、1.72、1.84、1.64、1.71で、その差は50cmである。各柱穴プランは P_1 より(40×36-51)(38×32-58)(56×32-58)(54×32-36)(36×34-40)(36×34-52)(38×34-32)(42×40-45)(50×42-38)(48×40-44)(46×40-34)(30×28×36)(60×44×36)(34×28-58)(50×48-48)cmを測る。遺物は P_6 より羽釜① R_6 よりカメの口縁②、高杯③④、 P_{11} より土錘①～④を検出している。中世の住居跡と考えられる。

第8掘立柱建物跡

B地区の南に位置し、第7掘立柱建物跡の南に存在し第7掘立柱建物跡とは主軸が平行する。主軸は東北東—西南西軸で梁間2間、桁行4間の建物である。長軸桁行7.1m、短軸妻通長3.0mを測り床面積約21m²である。柱穴は12個を検出した。 P_3 、 P_4 の底で平べったい石を検出し、 R_6 から石組を検出している。是は第7掘立柱建物跡の P_1 と切り合い第8掘立柱建物跡の方が古い。 P_9 、 R_8 は二段底で他はすべて円形の単孔である。各柱穴間距離は P_1 より1.40、1.50、1.54、1.36、1.26、1.0mを測る。各柱穴底の絶対高は P_1 より1.96、1.90、1.78、1.80、1.78、1.72、1.80、1.92、1.76、1.70、1.50、1.51でその差は最大値44cmである。各柱穴プランは P_1 より(38×34-14)(34×32-18)(36×34-30)(42×34-24)(34×32

- 12) (30 × 29 - 22) (34 × 28 - 44) (28 × 24 - 26) (58 × 48 - 50) (48 × 42 - 50) (58 × 34 - 54) (30 × 28 - 56) cmを測る。遺物はPnより宝珠つまみの須恵器のフタ①R2より土鍤②~⑥を検出している。7、8世紀頃の住居跡と考えられる。



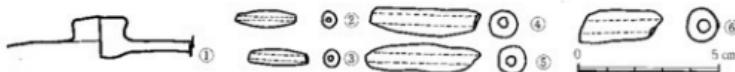
第93図 第7、第8掘立柱建物跡遺構図



第94図 第7掘立柱建物跡遺物図



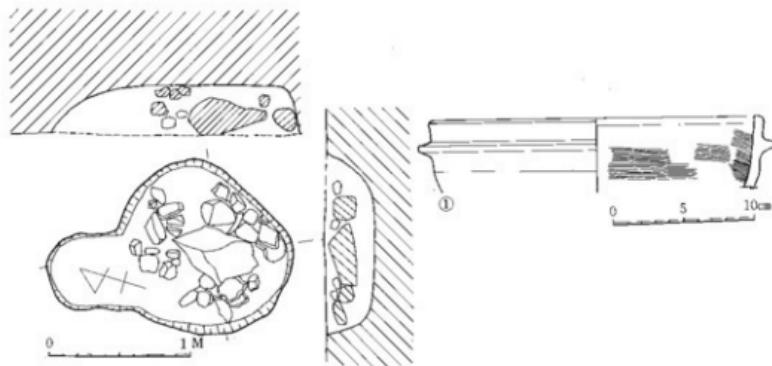
第95図 第7掘立柱建物跡遺物図



第96図 第8掘立柱建物跡遺物図

第1土塗

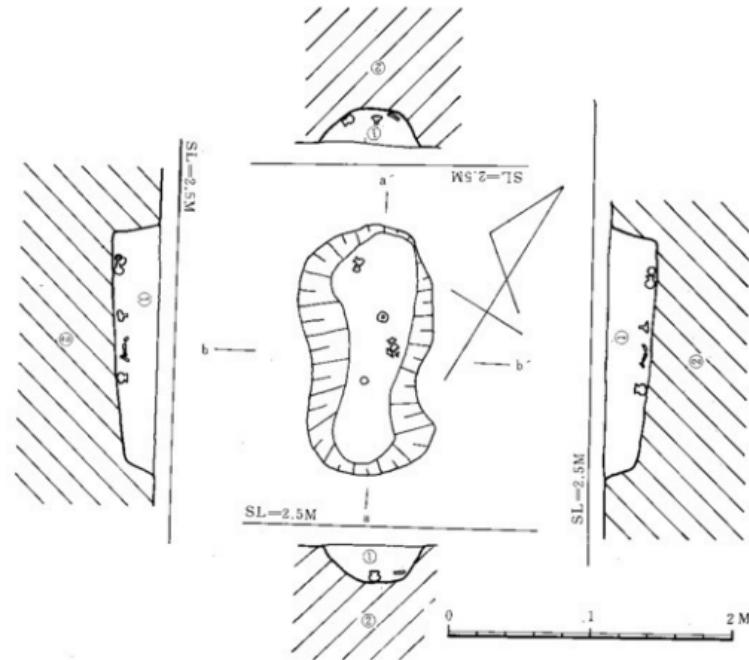
B地区の南に位置し、第5掘立柱建物跡の西、第2土塗の北西に存在する。平面形は、だるま形をなし、中に石組を伴うものである。主軸は北西—南東軸にとり、第2、第3土塗とはほぼ平行する。上縁部長軸 1.70 m、短軸 1.30 m、深さ 0.35 m である。底面もだるま形で、長軸 1.60 m、短軸 1.10 m を測る。遺物は石組直上で羽釜片を 1 点、①他に炭少量、焼けた石を検出している。近くに同時期の住居跡（第7掘立柱建物跡から羽釜出土）がある事から、中世の遺構で、煮たき等に使用されたものと考えられる。



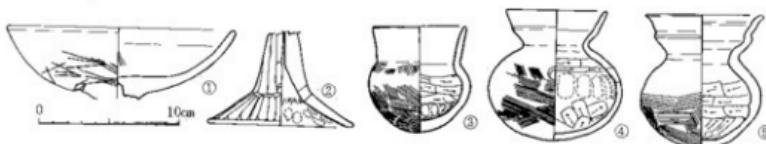
第97図 第1土塗遺構・遺物図

第2土塙

B地区の南に位置し、第6掘立柱建物跡の西、第7、第8掘立柱建物跡の北西に存在する。平面形は落花生形で主軸は北西—南東軸をとり、第2、第3土塙とほぼ平行する。上縁部長軸1.78m、短軸0.76m、深さ0.32mである。底面も落花生形で長軸1.64m、短軸0.40mを測る。遺物は底部直上北西側で完形の小形丸底壺2点④⑤、中央で高杯①②、南東側にて完形の小型丸底壺1点③を検出している。土塙墓かもしれない。時期は古墳中期後葉（青木IX期）頃と考える。



第98図 第2土塙遺構図

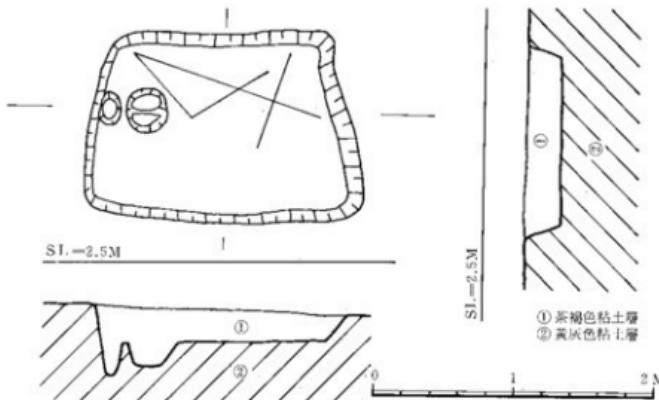


第99図 第2土塙遺物図

第3土塹

B地区の南に位置し、第2土塹の東南東、第5掘立柱建物跡の南、第6掘立柱建物跡の内部に存在する。平面形は長方形で、主軸は北西-南東軸をとり、第1、第3土塹とはほぼ平行する。

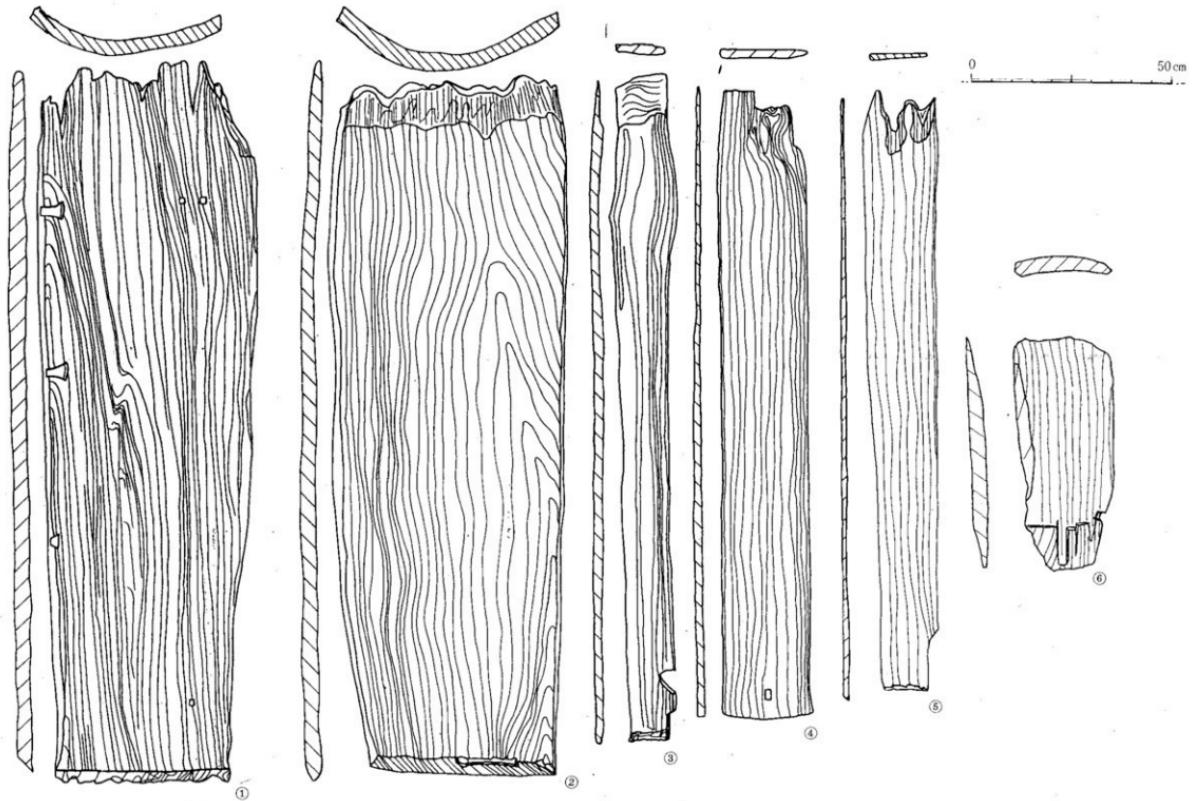
上縁部長軸1.84m、短軸1.34m、深さ0.24mである。底面も長方形で長軸1.64m、短軸1.20mを測る。北西壁下に2つのピット($22 \times 14 - 22$) ($32 \times 30 - 18$) cmがある。遺物は検出されていない。時期、性格は不明である。



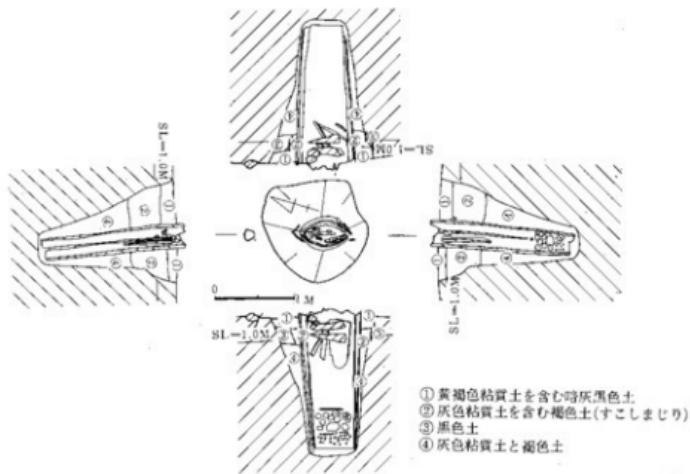
第100図 第3土塹遺構図

井戸遺構

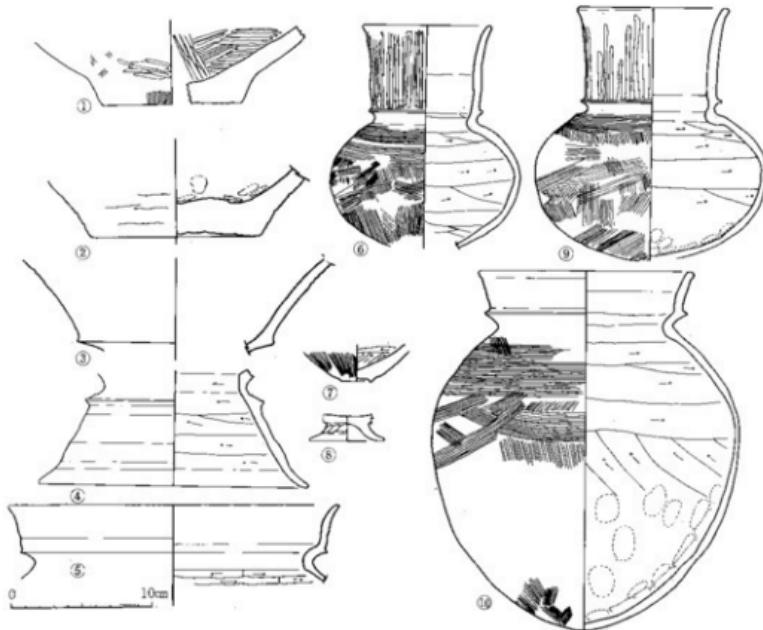
B地区の北に位置し、第1掘立柱建物跡の南南西、第2、第3掘立柱建物跡の北に存在する。井戸は不整形な楕円形で木枠（第101図①②）を伴うものである。主軸は北北西-南南東軸にとる。井戸の上縁部長軸1.25m、短軸1.20m、深さ1.65mで底面も楕円形をなし、長軸0.55m、短軸0.40mを測る。木枠は不整形楕円の掘り方に、木を弧状にくり抜き加工した板材二枚を組み合わせて埋めこんだもので、木枠の大きさは、長軸55cm短軸40cm長さ180cmを測る。材質は針葉樹の湿気につよいイヌガヤが用いられている（鳥大古川郁夫先生に鑑定していただく）。井戸底には、最下層に小さな礫と細かく破碎した土器片（第103図⑥等）が混じった層があり、その上層に大きな礫を置き、さらにその上層に完形に近い土器が（第103図⑦等）が検出された。ろ過装置と思われる。また、二枚の木枠の接合部には、同じ材質の板材（板状に割いたもの③④⑤）を外側から固定させるように⑥状に置いている。



第101図 井戸木わく実測図



第102図 井戸造構図



第103図 井戸遺物図

第3節 出土遺物・遺構に伴わない土器

遺構検出のため掘下中、北側黒色土層(第4～6層)から多くの土器が検出された。これらの土器は遺構に伴わないのである。中でも弥生土器片が多く検出された。弥生土器の壺・甕の口縁15点、底部70点、土師器18点、須恵器1点(表採)特殊なものでは、蓋2点、紡錘車1点、土玉2点が出土している。

①壺、口縁部、内側に蓋が置けるようはり付突帯を持ち、ヘラ刻みが施されている。(弥生前期初頭)。

②甕、口縁部 口縁部にヘラ刻み有。ナデ仕上げ。(弥生前期)

③④壺、口縁部 内外面ヘラミガキ有。頸部にヘラ付沈線を持つ、外面ハクリがはげしい。(弥生前期)

⑤壺、口縁部 肩に指突文を施している。胴部内面ヘラケズリ、外面ハクリがはげしい。(弥生前期)。

⑥壺、口縁部 外面ハケ目、口縁端部ヘラ付沈線、刻目を持つ。(弥生前期)。

⑦壺、口縁部 口縁の端部ヘラ刻み有。口縁大きく外反する。頸部に断面丸形貼付突帯をもつ。内面ヘラミガキ有。(弥生前期)。

⑧～⑪甕、口縁部 口縁の端部に3条の凹線、くの字に外反する。外面ハケ目、内面ナデ仕上げ。弥生中期～後期(青木I～III)。

⑫～⑯甕、口縁部 口縁外面は平行沈線を施し、ゆるく外反する口縁をもつ、弥生後期～古墳時代初頭(青木III～IV)。

⑰～⑲甕、口縁部 内外面ともナデ仕上げで、口縁の端部をつまみ上げている。古墳時代前期(青木IV)。

⑳甕、口縁部 口縁の端部を大きくつまみあげた後、やや押えている。外面少しスス付着、器肉はやや厚い。胴部内面ヘラケズリ。古墳時代前期(青木V、VI)。

㉑高杯、杯部 口径が広がり浅い。内面口縁ヘラミガキ有。内外面とも暗文が施されている。古墳時代前期(青木VII)。

㉒甕、口縁部 口縁部が肥大し、広口である。胎土は荒く、粗雑である。古墳時代後期(青木X)。

㉓、口縁部 チューリップ型で、口縁内外面とも指圧痕が残る。

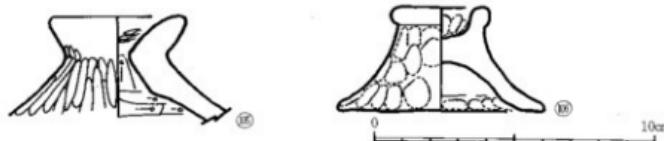
㉔～㉖甕、甕底部 外面、ハクリがはげしく調整が見分けられなかった。内面底部、指圧痕有。

㉗～㉙甕、甕底部 内外面ともヘラミガキ有。内面底部、指圧痕。

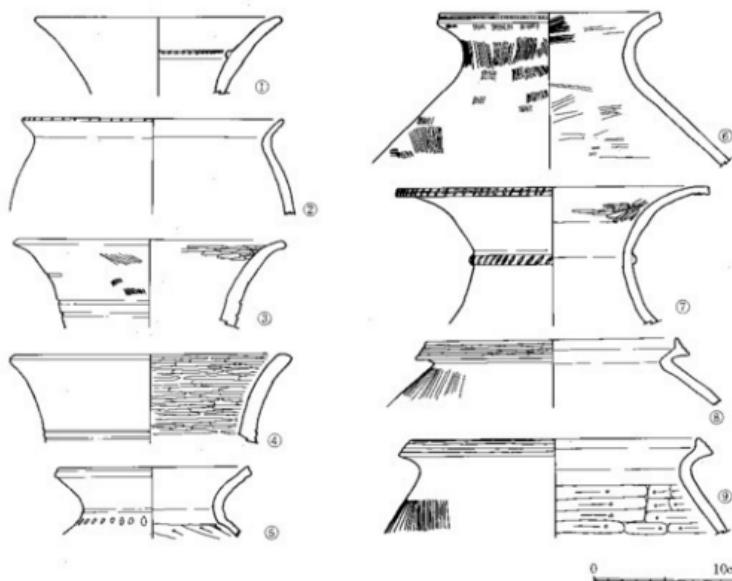
㉚～㉛甕、甕底部 外面ハクリが激しいが、ハケ目、ヘラミガキが多く見うけられた。内面ハケ目、指圧痕有。

㉕手づくね土器 内外面共に指圧痕多く残る。古墳時代中期(青木VIII)。

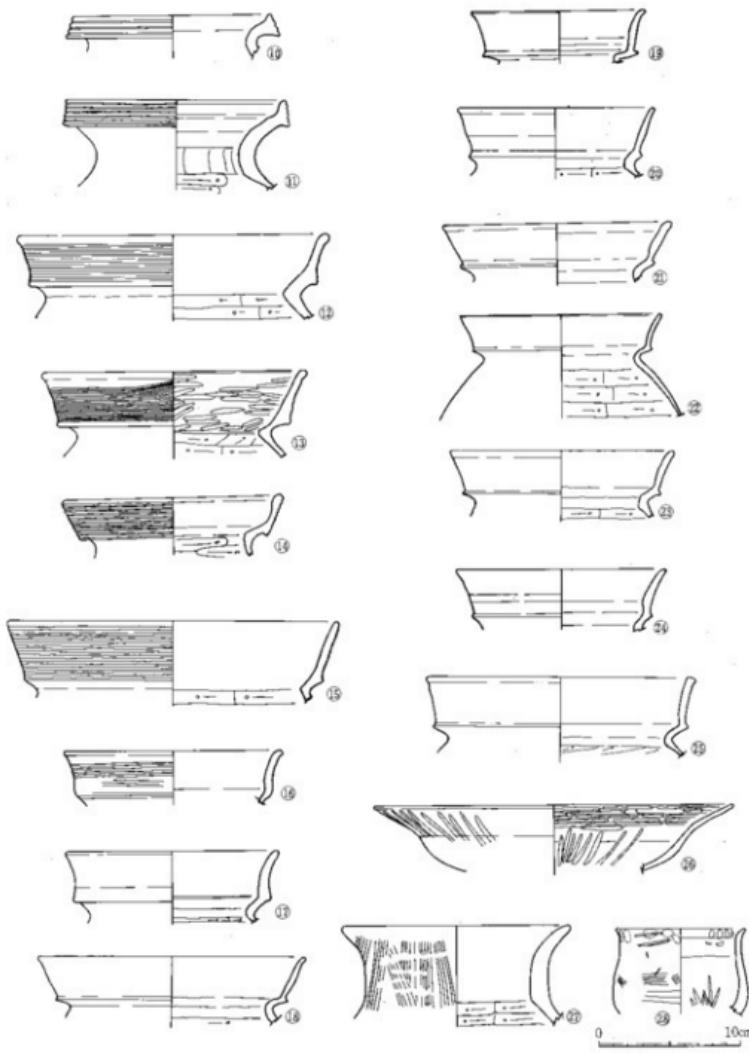
- ㊱壺、内外面ともヘラミガキ
 ㊲器台、脚、鼓形器台で、ラッパ状に開くものである。弥生後期（青木Ⅲ）
 ㊳～㊴高杯、脚底、筒部 外面ヘラミガキ、ナデ。内面ハケ調整並に指圧痕有。筒部は、外面ヘラミガキ、内面ヘラケズリ。絞り有。
 ㊵表採の須恵器壺、外面灰釉が多量に付着。胴部ラーメン模様。（陶邑Ⅱの終り）。
 ㊶蓋、つまみ部有孔。外面ヘラミガキ、内面ケズリ。弥生後期（青木Ⅲ）。㊷蓋、つまみ部無孔、内外面共指圧痕有。弥生後期（青木Ⅲ）。㊸紡錘車、両側から穿孔されている。両面とも磨いた跡が残っている。孔の径、6mm。㊹土玉



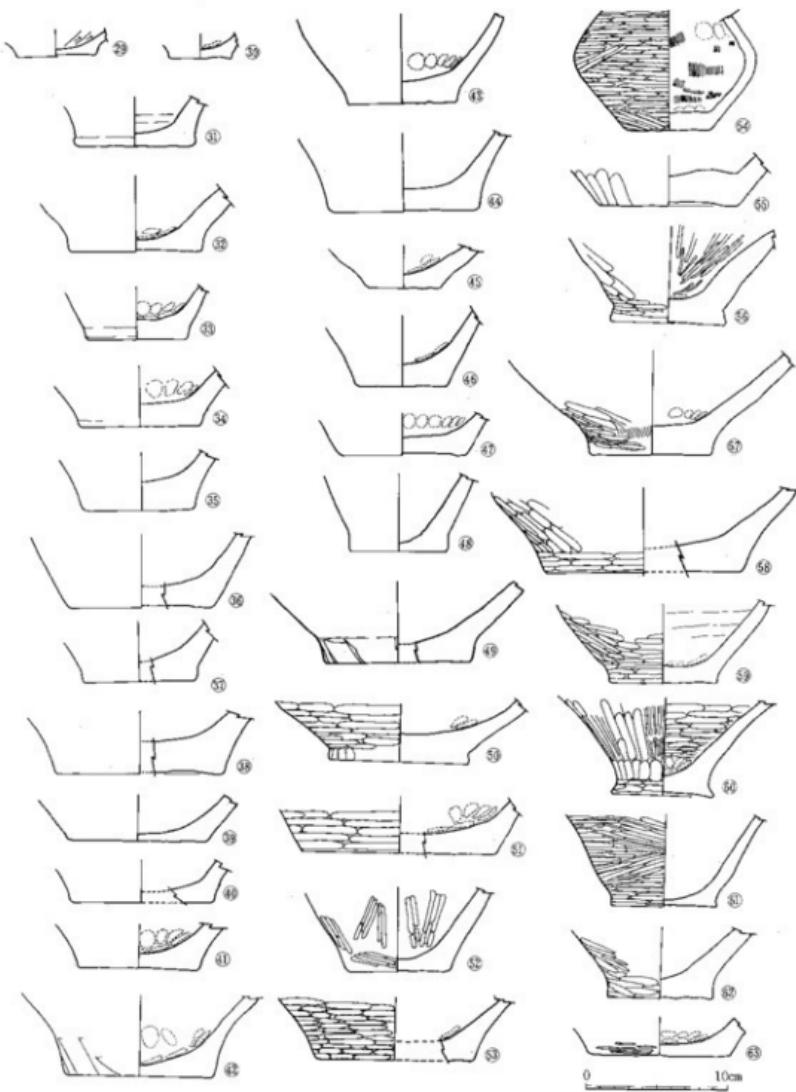
第104図 北側黒色土層蓋実測図



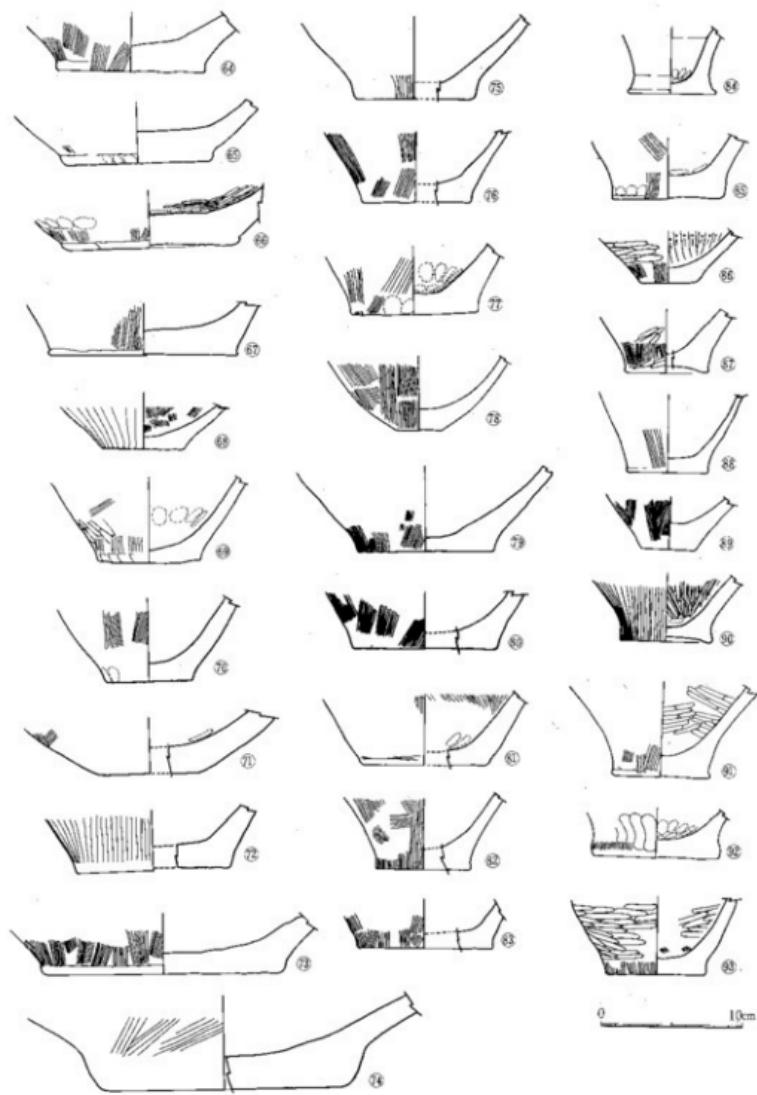
第105図 北側黒色土層口縁部実測図



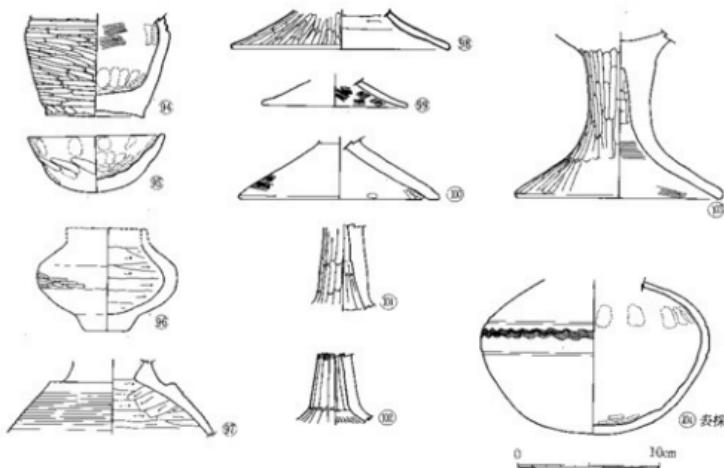
第 106 図 北側黒色土層土器口縁部実測図



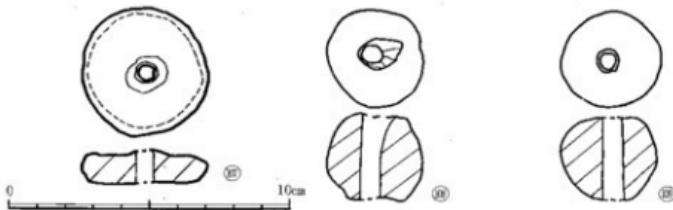
第 107 図 北側黒色土層弥生土器底部実測図



第108図 北側黒色土層弥生土器底部実測図



第 109 図 北側黒色土層土器実測図



第 110 図 北側黒色土層土製品実測図

旧海岸線

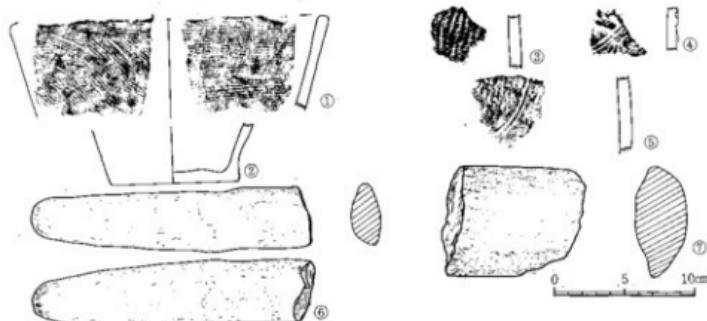
B区の北西部は褐色土の下に黄褐色バミスもロームもみられず、赤褐色腐植土が堆積していた。試掘調査時、このような地層がみられなかったので、急掘幅2mのトレンチを入れたところ腐植土下は褐色砂、灰白色砂、青灰粘土層が堆積しており、青灰粘土層に砂層の落ち込みがみられた。落ち込み中の褐色砂から縄文土器3点③④⑤、粘土層上面より石錐1点を検出し、縄文時代の遺構の存在が想像された。その範囲は黒色土層が弧状にひろがる北西部の約400m²である。

ここは急激に落ち込んでいるが、途中でテラス状の平坦地がみられ、再びほぼ垂直に落ち込む。遺物を含むのは褐色砂で、流木等多くの植物遺体とともに石錐が点在していた。また、わずかに縄文土器が出土している①②。その他青灰色粘土上面より櫂の先と思われるもの⑥⑦も出土しており、褐色砂層は縄文時代後晩期の層と思われる。

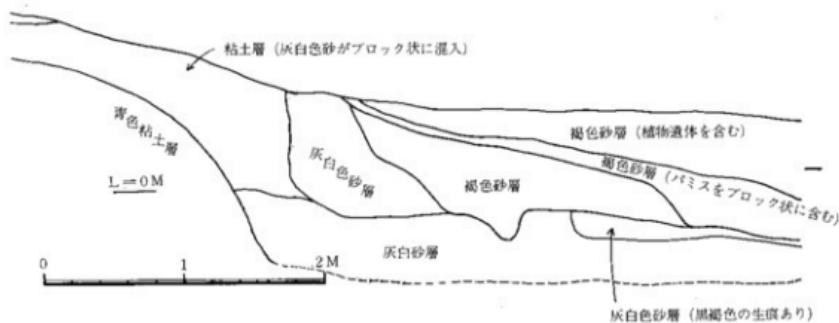
ブロック状のバミスを含む褐色層下には遺物は全く含まれていなかったため、時期は不明である。この層は、波によってあらわれたバミスがブロック状にかたまって堆積したものと思われる。

3層は津ノ井粘土層と思われるが、これらの上面にはそれぞれ褐色砂と灰白色砂が班点状に混入していた。これは、長瀬高浜遺跡でもみられる生痕である。長瀬高浜のそれが淡水性生物によるのに対し、このものは海棲生物によるものと思われる。津ノ井粘土が急激に落ちるのは、波等の作用によるものと思われる。

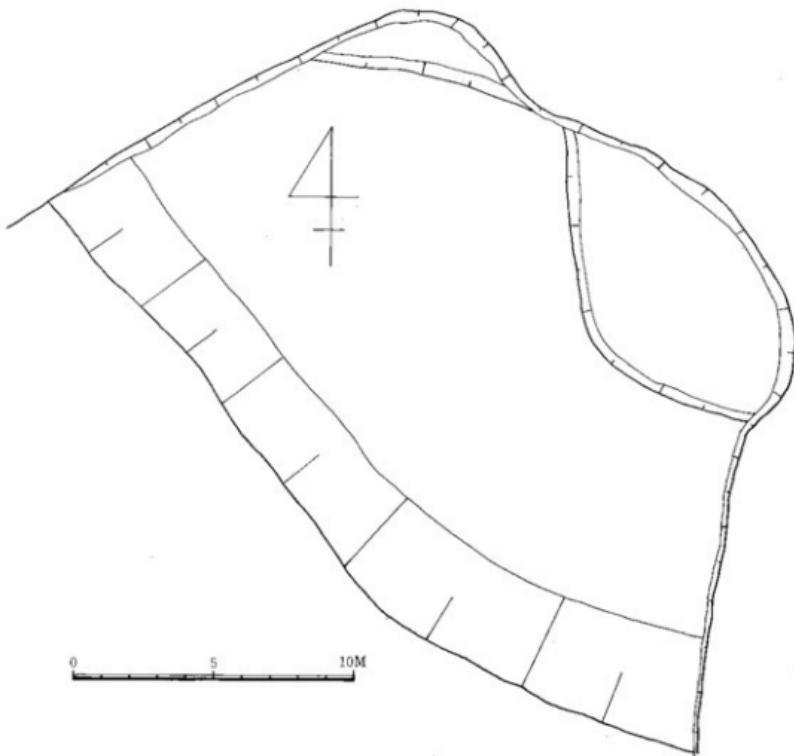
これらのことからこの区域が海であったことがわかる。流木等から考えるならば、海面が一番高かった時の海岸線は上段の時であるが、水底はなだらかな傾斜で北東に下る。その時期は、黒色粘質土砂から出土する土器と褐色砂中から出土した土器から考えるならば、縄文時代後晩期以前である。その後は沖積作用と海退現象により、現在の湖山池が形成されていたものと思われる。



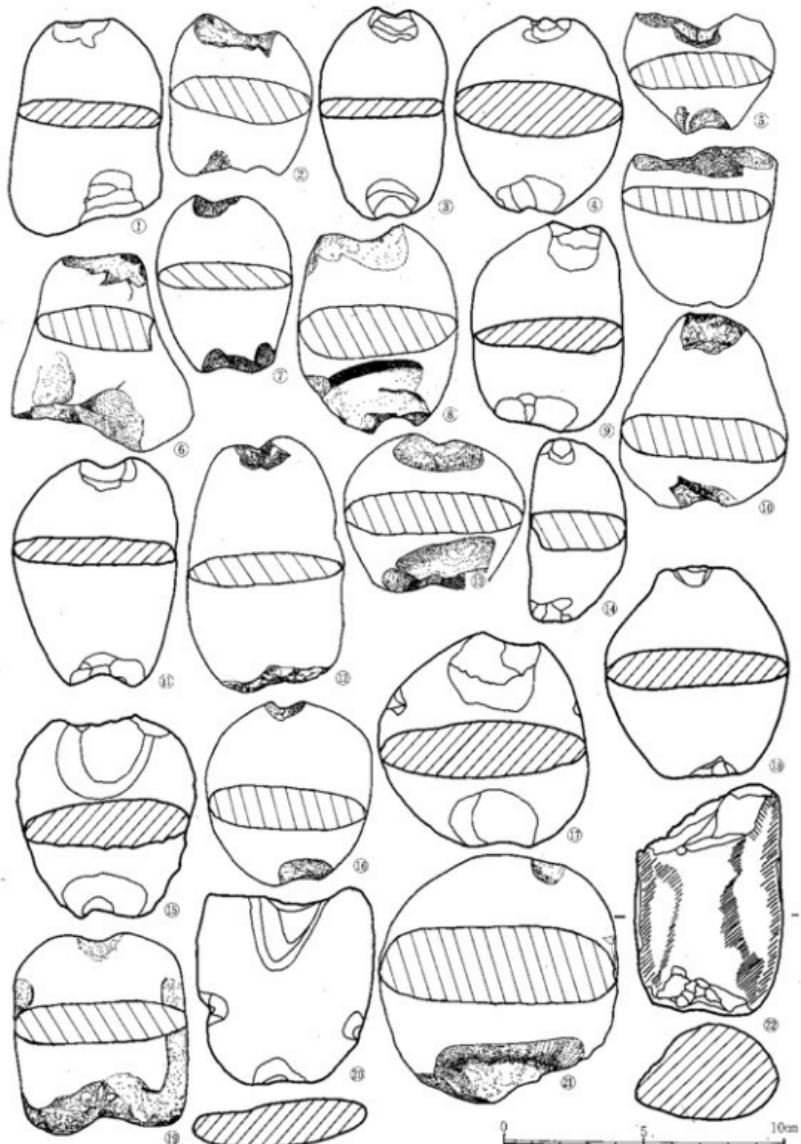
第111図 採集遺物図



第112図 旧海岸線土層図



第113図 旧海岸線



第114図 石錐実測図

第4節　まとめ

B地区は、A地区の南東側に位置し、南西側には湖山池がある。

人々の生活の痕跡がみられるのは縄文時代からで、北側の自然の落込み（概要で述べた）の砂層から、若干の土器片および石錘等の石製品が出土している。これらの遺物は、旧海岸線で使用されたものが、落ちたか、あるいは、捨てられたものと考えられる。しかし、遺構は検出されなかった。北側と北東側が調査区外にあたり、旧海岸線（水際）の地形全容を知る事ができなかった。

人々の生活跡が残っていたのは、弥生時代前期末頃からで、北側の黒色土層上で、第2、第3掘立柱跡が2棟検出された。弥生後期になると、すぐ近くから、第1堅穴住居跡、北東すみから第1掘立柱建物跡が検出された。第1掘立建物跡は、柱根が残るという貴重な遺構であったが、北東側が調査区外にあたりその実際の大きさを確認する事ができなかった。

弥生時代の遺構は全て、北側の黒色土上に位置している。

古墳時代になると生活の場は、バミス（黄色みそ土）と黄灰色粘土層上を中心として北から南に移行し、第4、第5、第6掘立柱建物跡、第2、第3土塙が検出された。少し変った場所（北側黒色土層）で、木棒を伴う井戸を検出している。

奈良時代から中世に入ると更に南へと移行し、黄灰色粘土層上から第7、第8掘立柱建物跡、第1土塙を検出し、中から羽釜片、宝珠つまみの須恵器の蓋、土錘を数十点検出しており、人々の生活が続いている事を思いうかべる事ができる。

出土遺物の中で興味深い事は、どの時代を通しても土錘、石錘等の漁業等に関わっていたものが多く出土していることである。この地には何らかの漁業集団が存在していたのではないだろうか。

いずれにしても、堅穴住居跡1棟、掘立柱建物跡8棟、土塙3基、井戸状遺構1基と少ない遺構の中で判断するのは、非常にむつかしい事である。

北側、北東側が調査区外にあり、遺跡の全容をつかめなかつたのが、非常に残念であった。

第5章 参考資料

B地区の東隣りは鳥取大学造成工事の際、土器の散布がみられ、昭和49年に鳥取県立博物館によって調査された地区である。調査の結果、奈良時代の土塙墓5基とビットが検出された。また、弥生時代前期から中世までの遺物が多く出土した。この概報は鳥取県立博物館『郷土と博物館』第18巻49-3号に記載された。今回は、湖山第2遺跡の性格をより明らかにする目的のため、出土した遺物のうち図化できるものを掲載した。

遺物は、弥生時代のものから中世のものまで種々様々であった。これらの遺物は層序に分かれることなく混在しており、攪乱されたものと思われる。

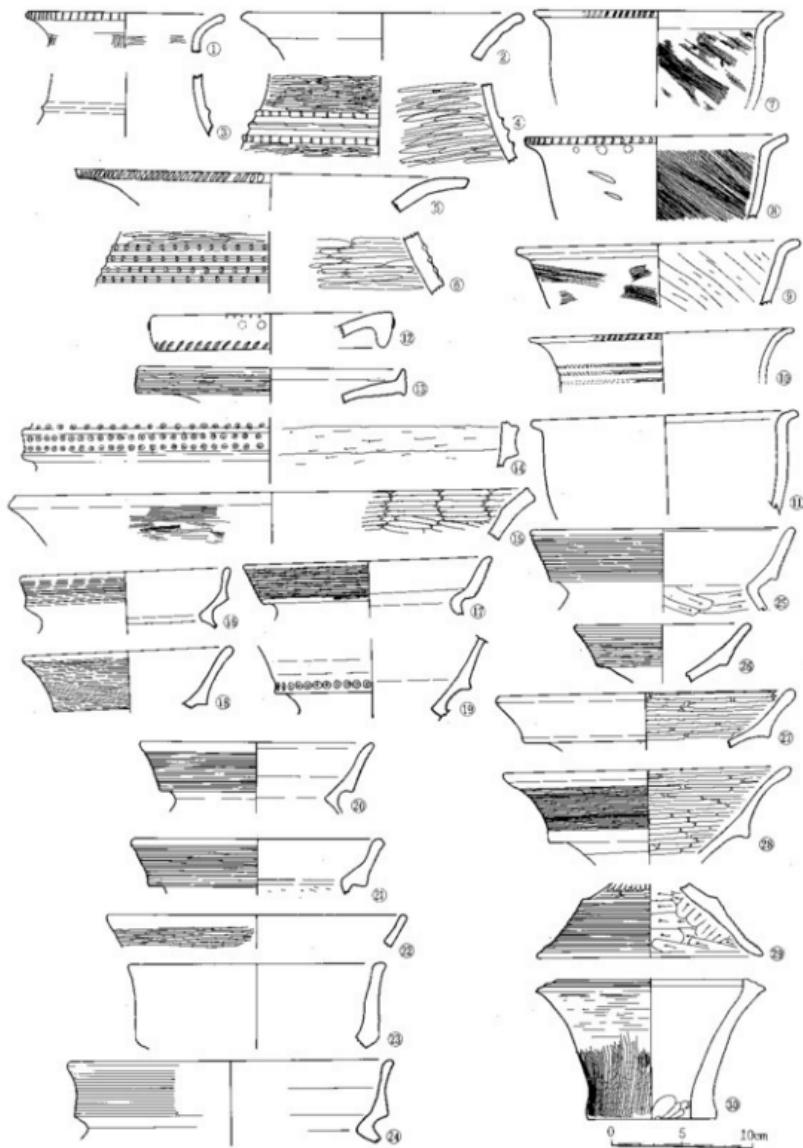
弥生時代前期（第116図-①～⑥）のものとして、壺と甕がみられる。壺は口縁が外反し、口縁端部に刻目をもつもの、（①、⑥）がある。④⑥は肩部に断面三角形の突帯を数条もち、突帯に刻目をもつ。外面ともていねいなヘラミガキがなされている。甕（⑦～⑪）は、外反する口縁をもち、胸部ややふくらむものと思われる。外面ともハケ調整である。

中期のものもわずかにみられる。⑫は壺の口縁部である。口縁が「ハ」の字状に下垂し刻目と円形浮文をもつ。緻密な粘土で、褐色である。⑬壺の頭部と思われる。凹状の突帯をもち、竹管文が施されている。

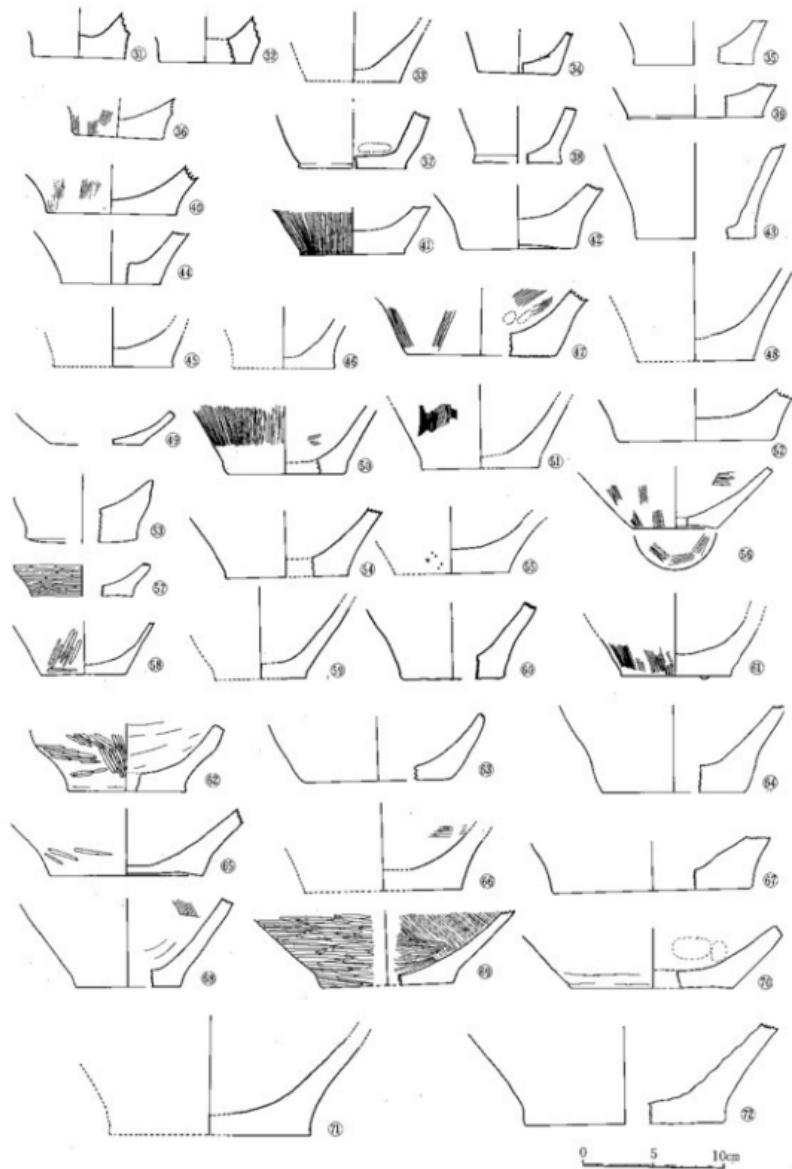
第116図は、弥生土器の底部である。いずれも平底である。甕はやや外に開くものもまっすぐたちあがり、壺は開きが大きく、器形としても大きい。

第117図は、古墳時代のものを集めた。⑭～⑯は凹線がかすみにみられ弥生後期のなごりを残すものである。⑰～⑲は複合口縁で、端部をつまみあげている。稜はシャープである。⑮～⑯は口縁部が平坦となり、やや新しくなる。⑰～⑱は、複合口縁がだいに退化していく過程のものである。⑲～⑳は、布留式土器の影響を受け、口縁が「く」の字状になる。⑳は口縁端部を内側に折り曲げている。㉑～㉓は「く」の字の口縁で、古墳時代後期から奈良時代のものである。㉔、㉕は「ハ」の字に開く脚で、端部は丸くなっている。㉖同じく低脚杯であるが、前者のものに比べて脚が高くなっている。㉗～㉙は高杯である。大型のものと、小型のものがある。底部は広くひろがり、ヘラミガキがなされている。杯部は外に開くものと内湾するものがある。㉚は丸く内湾する椀である。㉛～㉝は器台と思われる。鼓形をなし外反する。

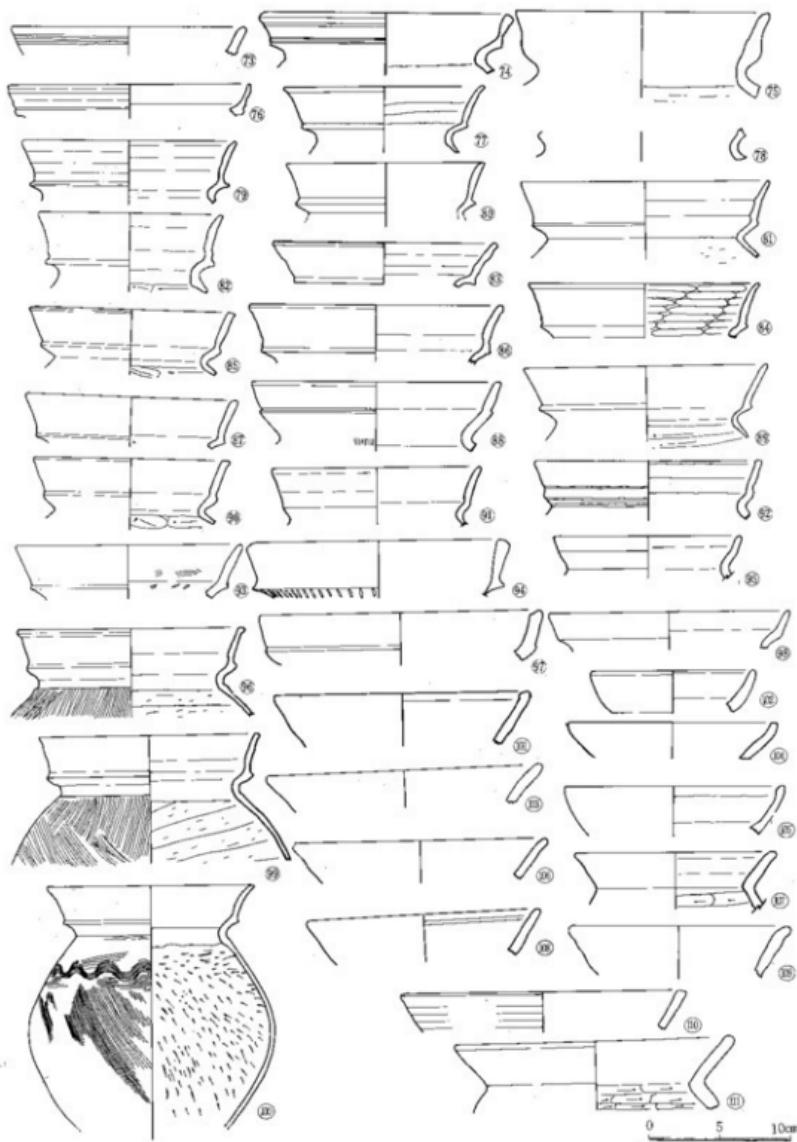
須恵器は杯と高杯、壺、平瓶等が出土している。㉞杯身である。立ちあがりが長く内傾している。㉟杯蓋である。稜の痕跡が全く消え、天井部から口縁部にかけて丸くなだらかなカーブを描いている。㉛大型の杯蓋である。ほぼ、水平の天井部をもっと思われ、その端で大きく「Z」字状にカーブする。その端部は下方へ屈曲し段をなす。㉝短頸壺である。肩の張りがなく丸底である。㉞平瓶である。肩の張りがなくなっている。高台をもつ杯身であ



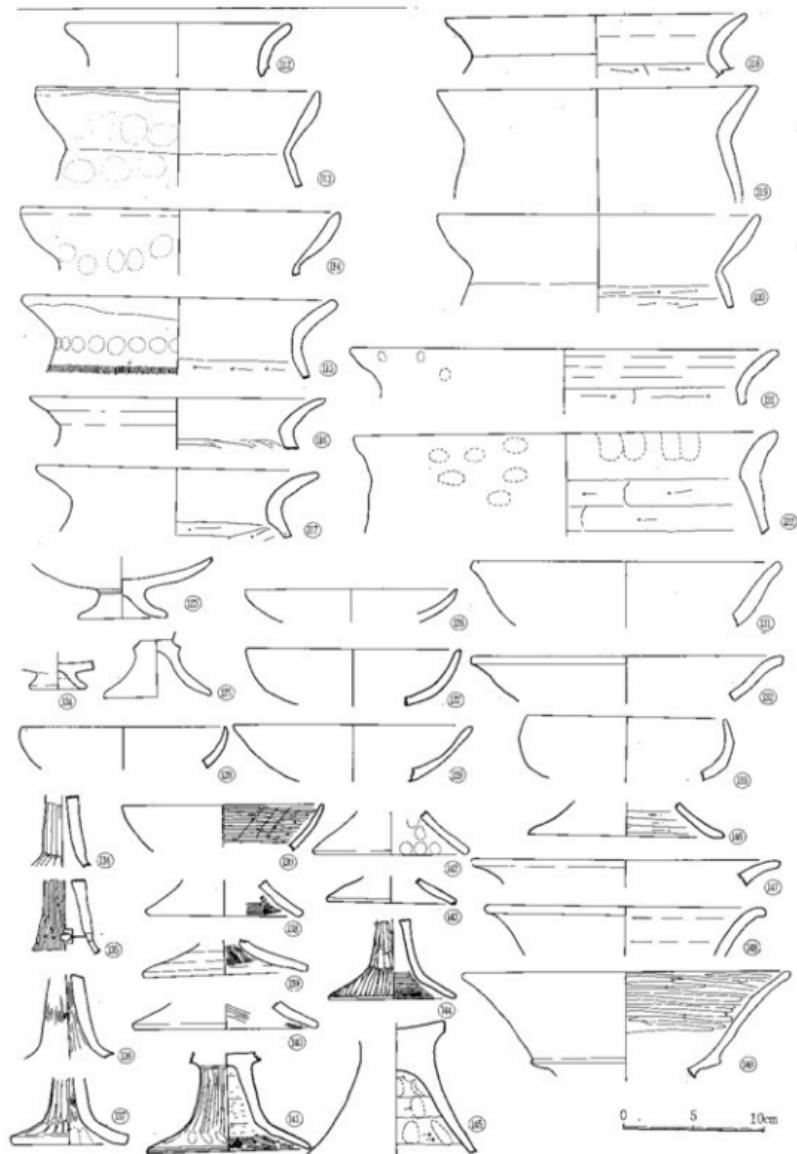
第115図 育種場出土弥生土器実測器



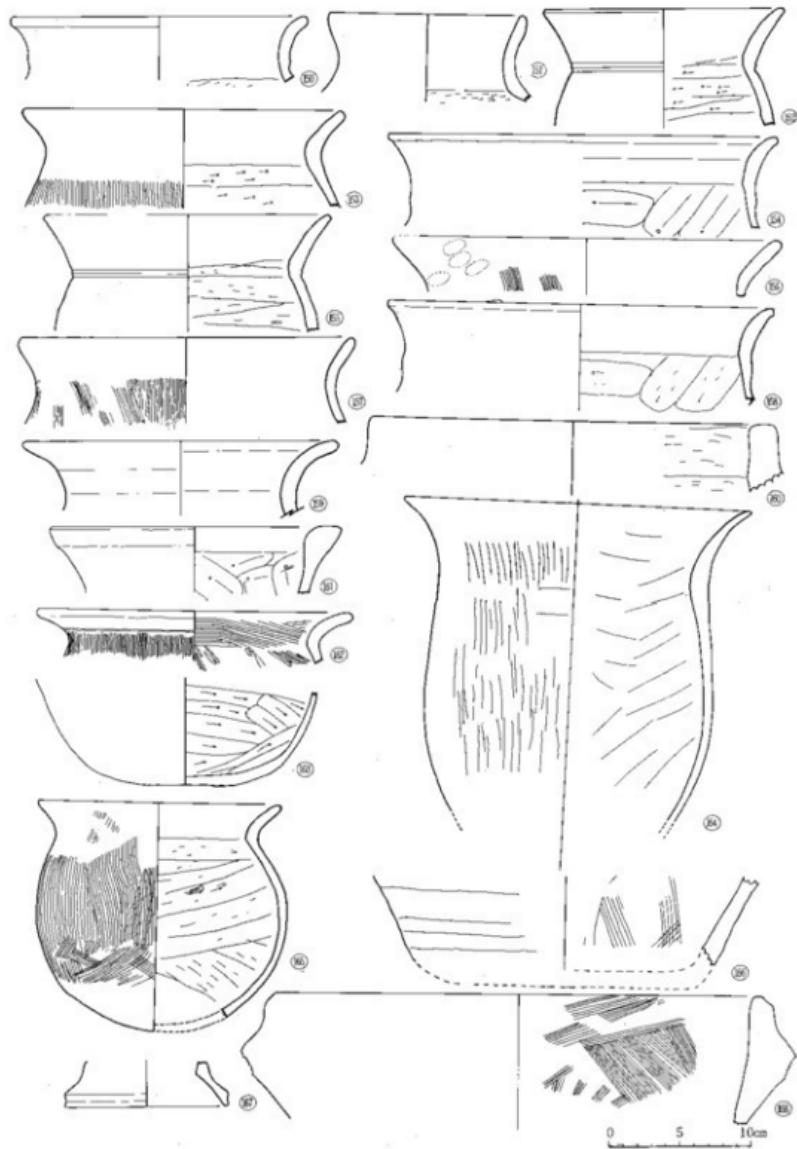
第 116 図 弥生土器底部実測図



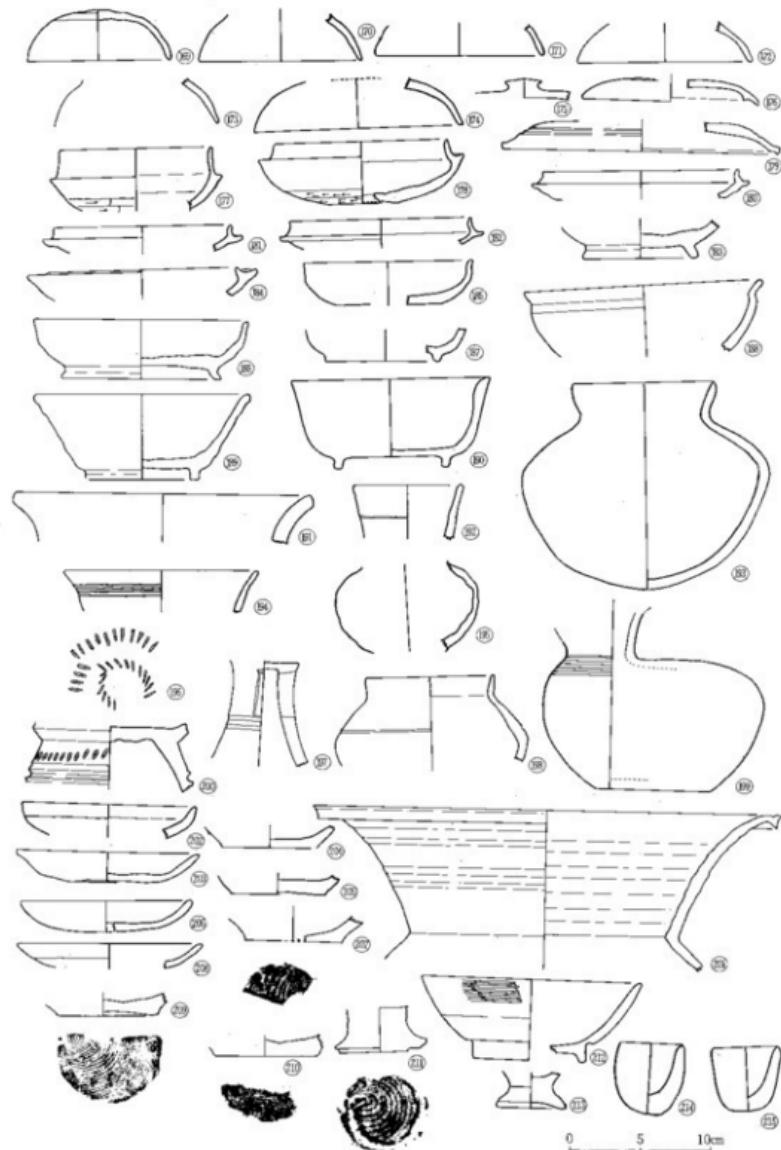
第 117 図 土篩器実測図



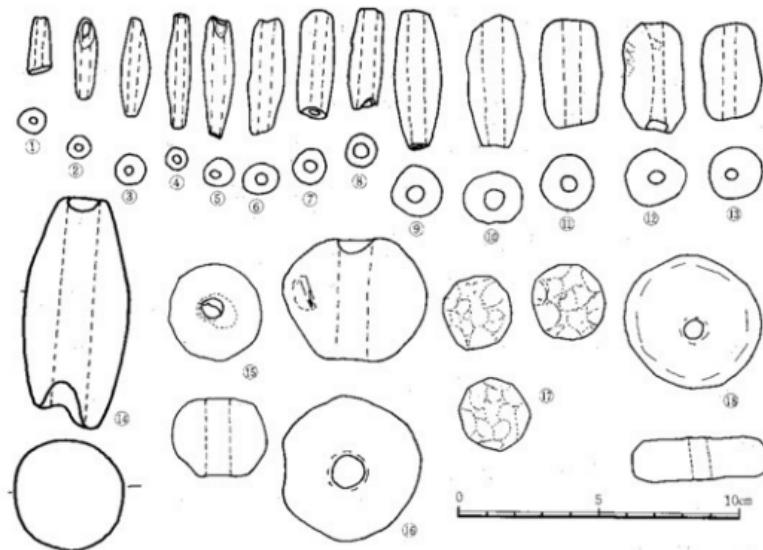
第 118 図 土器実測図



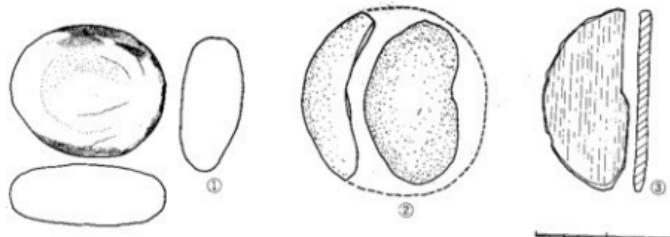
第119図 土師器実測図



第120図 土師器・須恵器実測図



第121図 土製品実測図



第122図 石製品・木製品実測図

る。器高の高いものと低いものがある。如④～如⑨縫皿も出土している。如⑩～如⑪底部が平たいものと上げ底気味のものがある。

土製品も出土している。土錘は、管状土錘と球状土錘がある。前者は大型、中型、小型にわかれ。小型のものは現在でも湖山池で使用されている。その他、紡錘車⑮1個と土玉⑯がある。この土玉は孔がなく、何を目的として作られたのか不明である。

石製品は、すり石がある。②はほとんどが、欠損しているが、扁平な円形をしているものと思われる。

③は曲げものの底板である。

第6章 まとめ

湖山第2遺跡の発掘調査を通じて、A地区が弥生時代中期から古墳時代中期にかけての集落跡であること、B地区が縄文後・晚期から中世にかけての複合遺跡であることがわかった。

縄文時代の遺物は、B地区の北西の灰白色砂層と、第15トレンチで検出された。出土した七器の量はわずかではあるが、この地が縄文後・晚期の人々の生活の場であったことを推測させる。また土器と共に出土した石錘から縄文時代の人々が漁業にたずさわっていたことが推測される。湖山第2遺跡で縄文土器他の生活用具が検出されたことにより、湖山池南東岸の桂見遺跡、布勢遺跡、大柄遺跡の縄文後期の遺跡群が、北東岸のこの地まで続いていることが想像される。この地の縄文の遺物は、湖山池南東岸から北東岸にかけてを一つの生活圏とした集団の生活の跡だと考えられる。

弥生時代前期の遺構はB地区の第2、3掘立柱建物跡（堅穴住居跡か？）のみであり、集落としてのまとめは不明である。A地区では遺構はみつかっていないが、弥生前期と考えられる遺物は少量出土している。中期以降になると、A地区で集落と呼べるような形でかなりの住居跡が検出されるようになる。A地区の集落は古墳時代中期まで続き、またB地区では古墳時代前・中期の掘立柱建物跡・井戸等があり、集落が発展する中でB地区に集落が伸びていったのかもしれない。そして興味深いのは、B地区には、堅穴住居跡はほとんどなく、唯一の堅穴住居跡も住居として使用されたとするには、特殊な形すぎると思われることである。このことはこの地に住んだ人々は、A地区とB地区とを使いわけていたことを想像させる。

それではこの集落を営んだ人々の生活の基盤は何であったか。この地の北には、砂丘地が広がり、耕作には適さない。南は、湖山池である。西には現在水田となっている陸地があるが、その水田が古墳時代までさかのぼることはできないであろう。当時は湧水のはげしい低湿地であったか、あるいは、まだ陸化していなかったかもしれない。東は湖山川があり、西同様低湿地が多い。本遺跡からも石窓丁が数点出土していることから、農耕にたずさわっていないとは考えられないが、農業生産のみからこの集落を考えることはできないであろう。この地は湖山池北東岸に位置し、湖山池の水が流れだす湖山川の水門を近くにもっており、湖山池水運の要所である。この地に住んだ人々は、何らかの形で湖山池の漁業、水運にたずさわっていたであろう。

しかし、古墳時代後期になると、A地区B地区ともに遺構は検出されなくなり、集落は続かない。つまり古墳後期にいたって、ここに住んだ人々の集団移住があったことを示す。その原因は何かは難しい問題である。考えられることは、気候変化による環境の激変、あるいは、鉄製農具の大量使用による農業の構造の変化、大勢力による移動強制等が考えられるが断定することはできない。興味深いことは、この地に集落が営まれなくなった後に、

すぐ北の濃山台地上に、大熊段1・2号墳、三浦1・2号墳等の古墳群が築造されはじめることである。6世紀代の古墳では、濃山台地上の古墳が湖山池周辺では最大の規模をもつものであり、6世紀においては、湖山周辺にいた勢力が湖山池を支配する勢力となつたと想像される。集落が姿を消すことと、古墳群の形成は密接に関係する問題であろうが、その関係の解明は今後の課題である。また、本遺跡で検出された須恵器は、この古墳群の築造に際してこの地が利用されたために残されたという可能性がある。

次にこの地に遺構があらわれるのは8世紀である。B地区で掘立柱建物跡が検出されているが、正確な年代はわからないので断定できないが、8世紀中葉に湖山池東岸地域が東大寺領高庭庄として開墾されていくことと関係がありはしないかと推測される。8世紀の因幡には、湖山池を含む高草郡に因幡国造氏という大勢力があり、高庭庄開発の墾田長も国造氏であり、今後周辺地域で調査が進めば高庭庄の経営を考古学的にも確かめられるかもしれない。

本遺跡では中世の遺構も検出されたが、性格はつかみがたい。興味深いのは、B地区的第1土塙で、このように石をたくさんうめたような遺構は昭和49年に行った調査の際にも多く見つかっており、特殊なものではなくある意味をもって一般的に作られたものであろう。

以上のような多くのことが判明した貴重な調査であったが、まだ未解明の点も多い。この集落を作った人々の性格（どの住居跡もそう大差はないことから階層分化はあまりないと思われる。また首長層を含む集落にしては遺物が貧弱であるように思える）、また北の古墳群との関係（古墳群を築造した勢力は、因幡においては独自の勢力であり、8世紀に姿を現わす因幡国造氏には系譜的につながらないと考えられる）、その他諸々の問題があるが、いずれの問題を考える場合にも湖山池の問題を中心にして考えて考えなければならないだろう。



A地区全景



発掘前 A地区全景



A地区北側地形



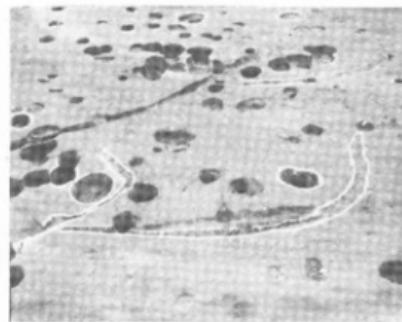
第 1 堪穴住居跡



第 2 堪穴住居跡



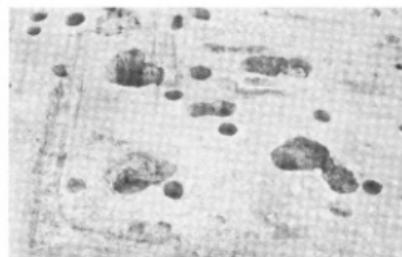
第 3 堪穴住居跡



第 4 堪穴住居跡



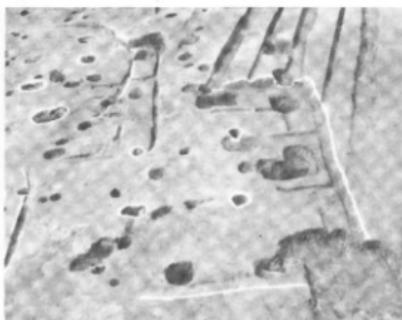
第 5 堪穴住居跡



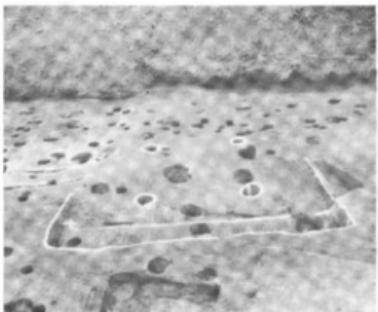
第 6 堪穴住居跡



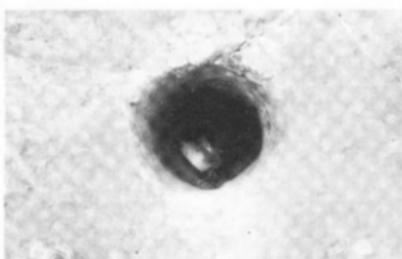
第7・8竪穴住居跡



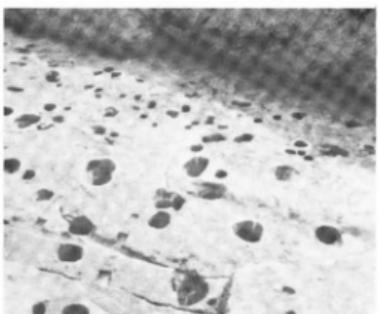
第9竪穴住居跡



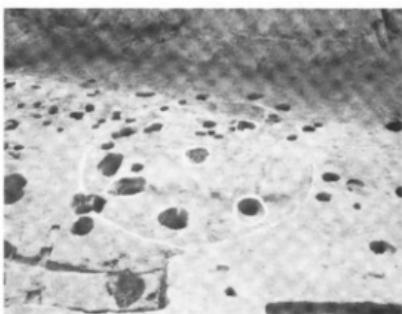
第10竪穴住居跡



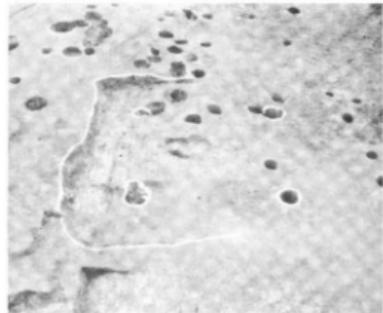
第9竪穴住居跡柱穴内土器出土状況



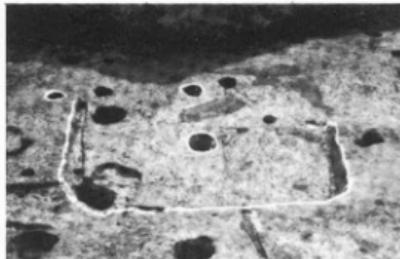
第11竪穴住居跡



第12竪穴住居跡



第13堅穴住居跡



第14堅穴住居跡



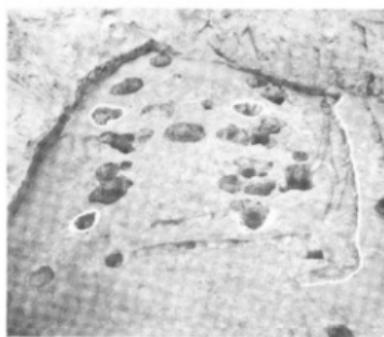
第15堅穴住居跡



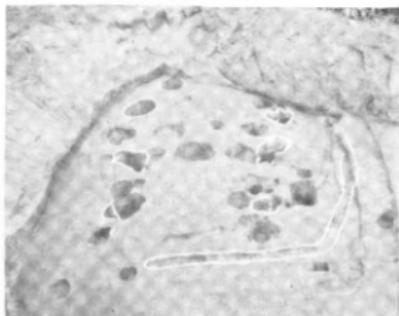
第15堅穴住居跡貯藏穴內土器出土狀況



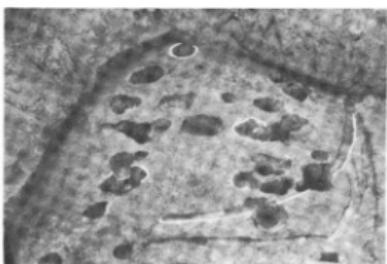
第17堅穴住居跡



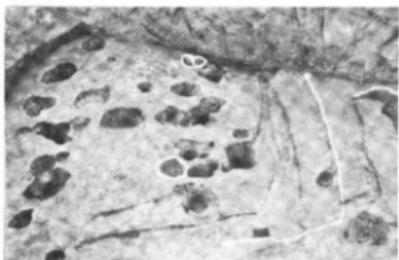
第16堅穴住居跡



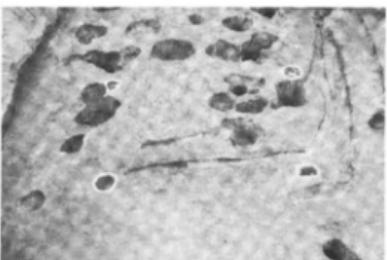
第18竪穴住居跡



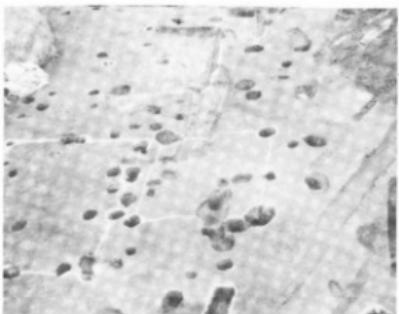
第19竪穴住居跡



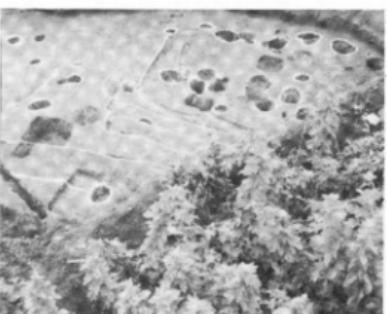
第20竪穴住居跡



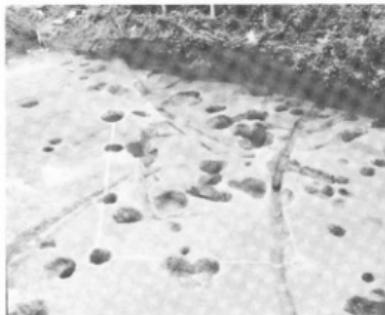
第21竪穴住居跡



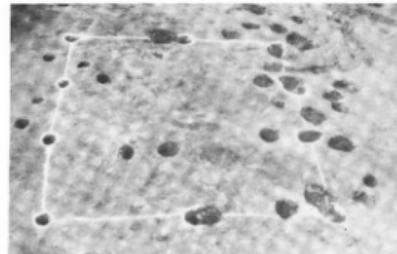
第22竪穴住居跡



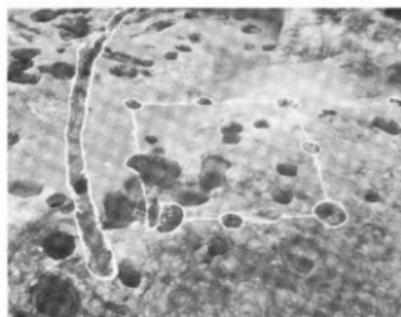
北側住居跡密集地区



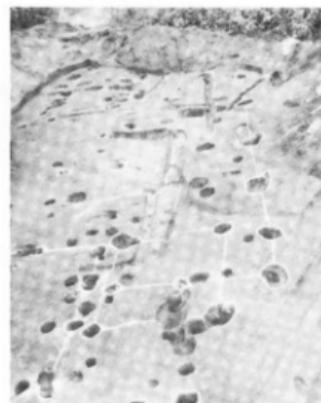
第1掘立柱建物跡（北西より）



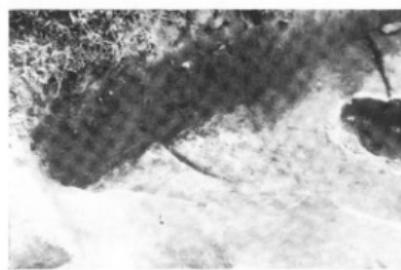
第3掘立柱建物跡（南より）



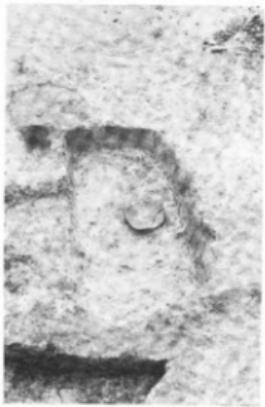
第2掘立柱建物跡（北西より）



第4掘立柱建物跡（南より）



第1土塙（北より）



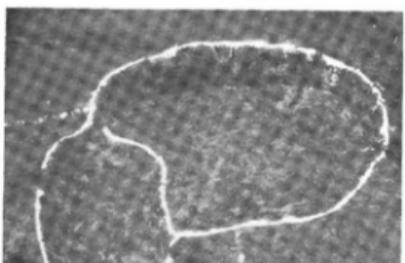
第3 土塚



第3 土塚出土高杯



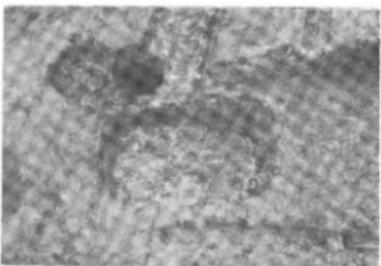
第5・6 土塚



第4 土塚



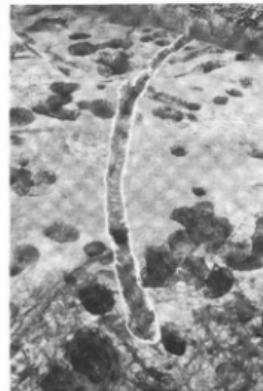
第8 土塚



第9 土塚



第10土塙



第1溝状遺構



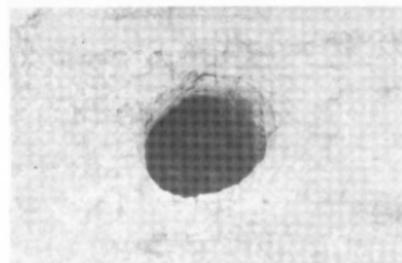
第2・3溝状遺構



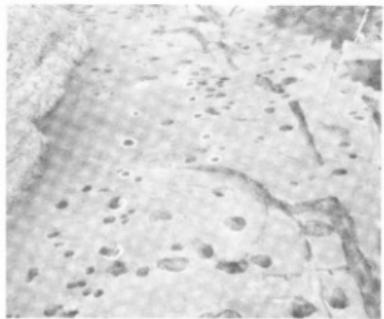
第4・5溝状遺構



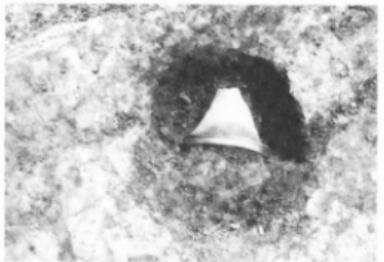
貯藏穴状遺構



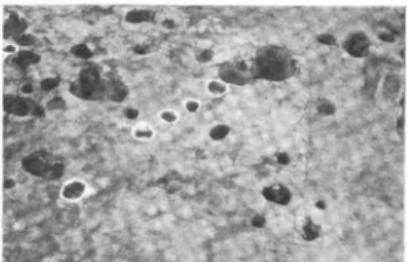
井戸状遺構



第1・2柵列状遺構（南より）



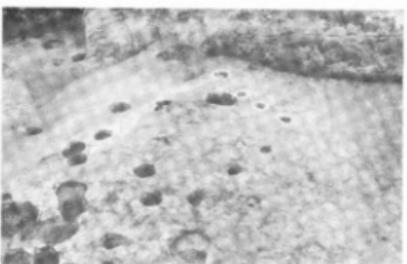
第2柵列状遺構出土状況



第7柵列状遺構



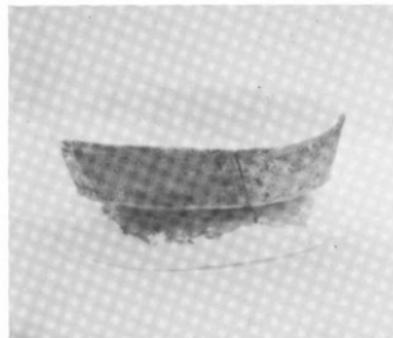
休憩風景



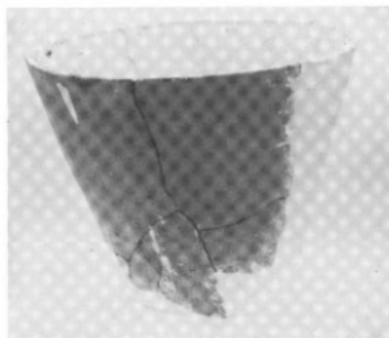
第8柵列状遺構



第1 竪穴住居跡



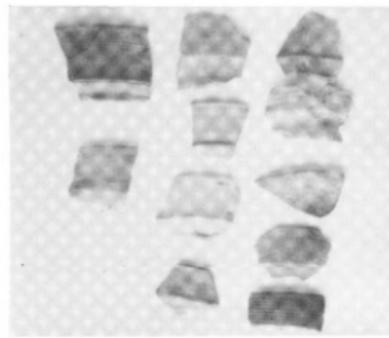
第1 竪穴住居跡



第1 竪穴住居跡



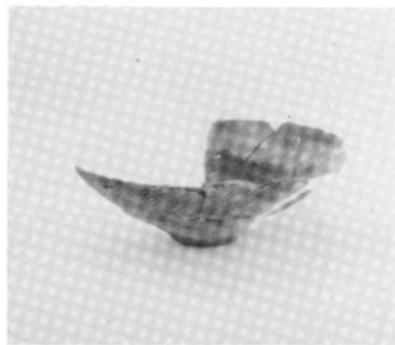
第1 竪穴住居跡



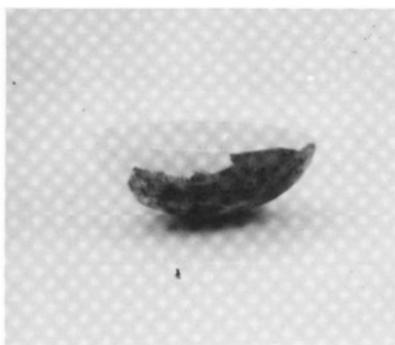
第1 竪穴住居跡



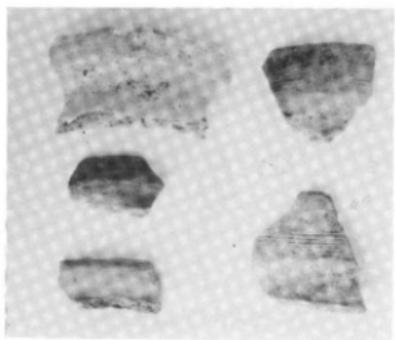
第1 竪穴住居跡



第2 竪穴住居跡



第2 竪穴住居跡



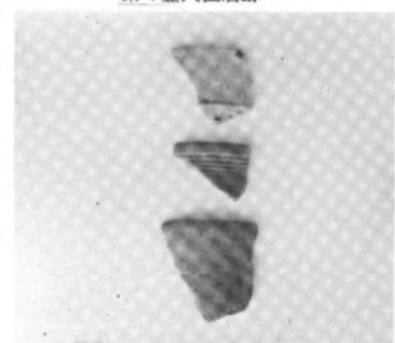
第3 竪穴住居跡



第4 竪穴住居跡



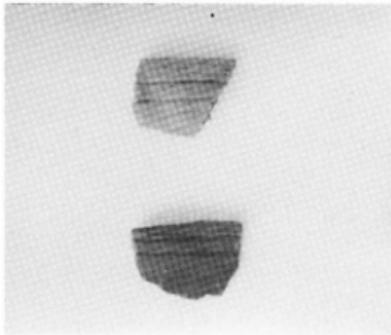
第4 竪穴住居跡



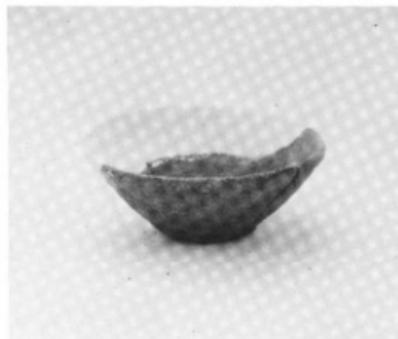
第5 竪穴住居跡



第6 竪穴住居跡出土遺物



第8 竪穴住居跡出土遺物



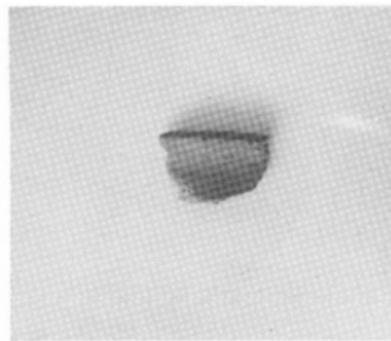
第9 竪穴住居跡出土遺物



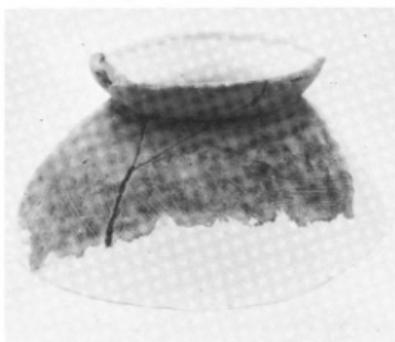
第9 竪穴住居跡出土遺物



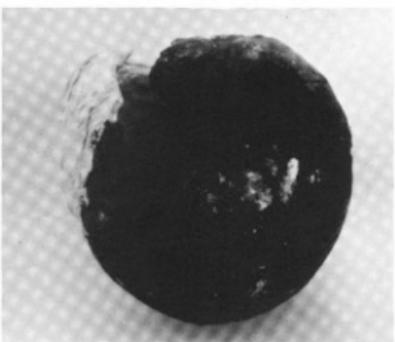
第11 竪穴住居跡出土遺物



第12 竪穴住居跡出土遺物



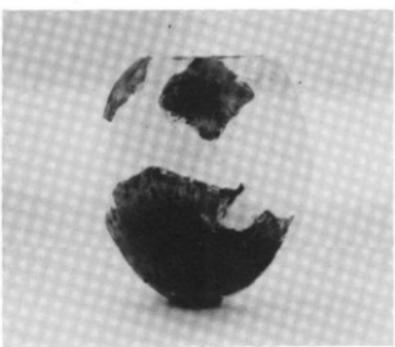
第10竪穴住居跡



第10竪穴住居跡



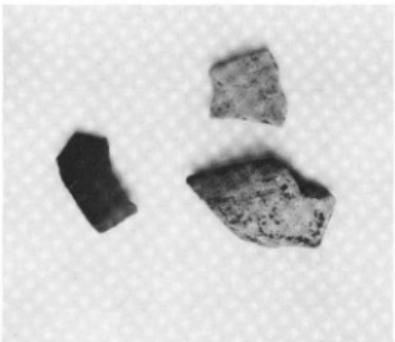
第10竪穴住居跡



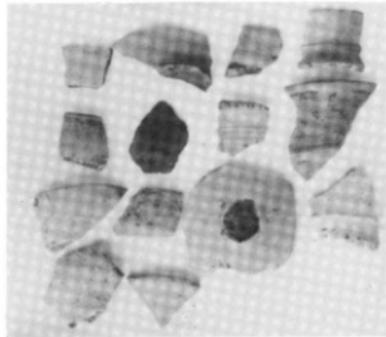
第13竪穴住居跡



第13竪穴住居跡



第14竪穴住居跡



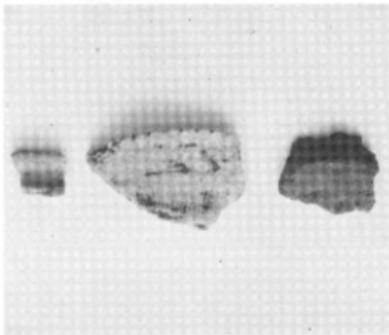
第15竪穴住居跡



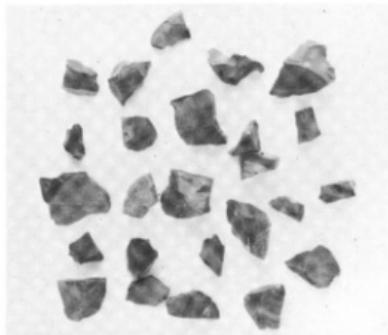
第15竪穴住居跡



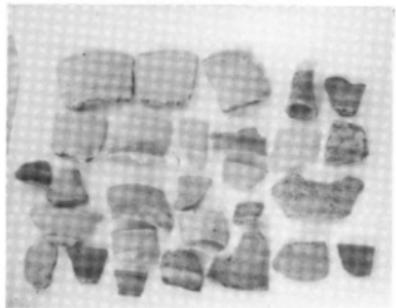
第16竪穴住居跡



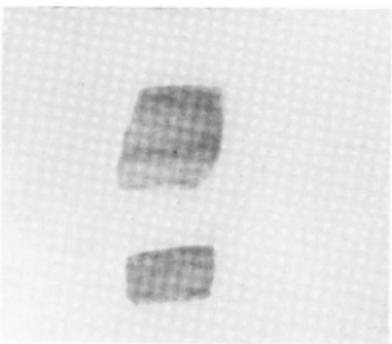
第18竪穴住居跡



第22竪穴住居跡



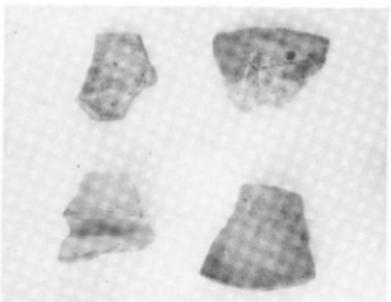
第1土塚出土遺物



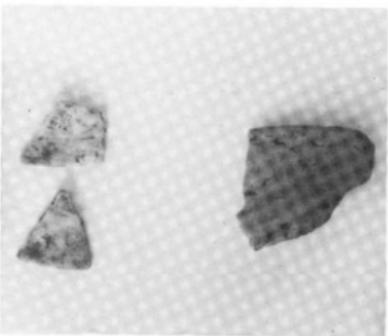
第2土塚出土遺物



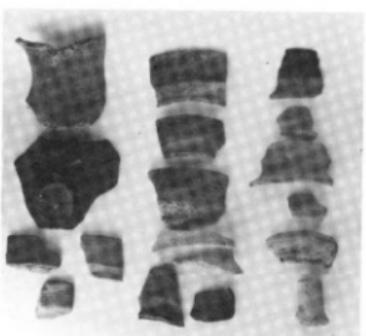
第3土塚出土遺物



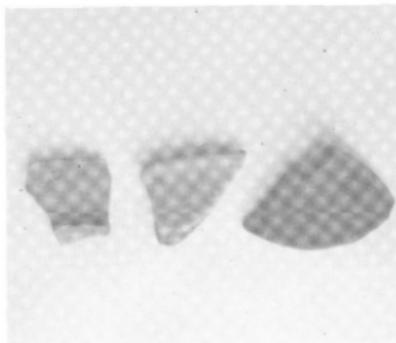
第4土塚出土遺物



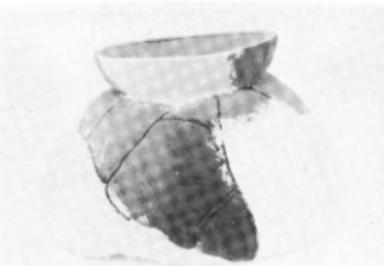
第6・9土塚出土遺物



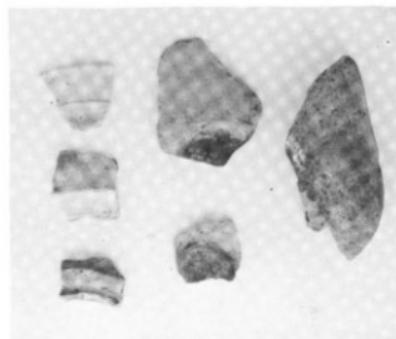
第10土塚出土遺物



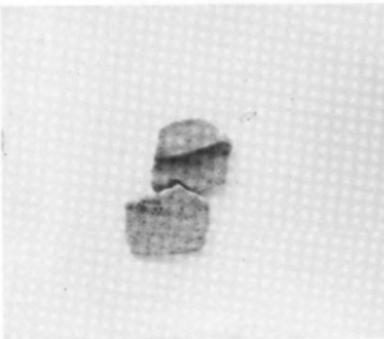
第8 土塹出土遺物



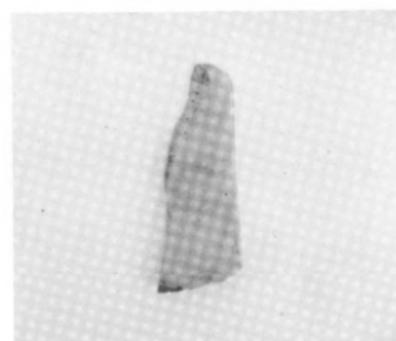
第8 土塹出土遺物



第1 挖立柱建物跡



第1 挖立柱建物跡



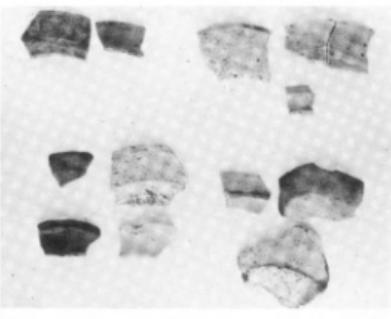
第2 トレンチ出土遺物



第2 トレンチ出土遺物



第1 溝状遺構遺物



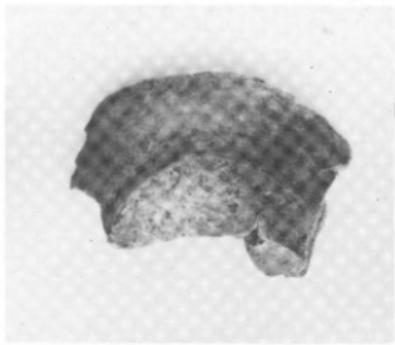
第2・3・4・5 溝状遺構遺物



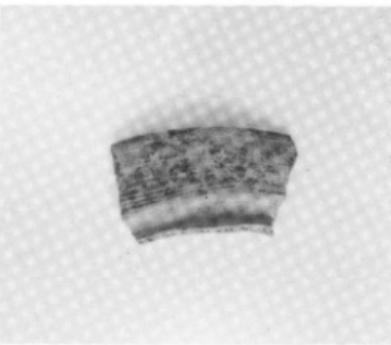
第2 櫃列状遺構遺物



第6 櫃列状遺構遺物



第8 櫃列状遺構遺物



貯藏穴藏遺構遺物



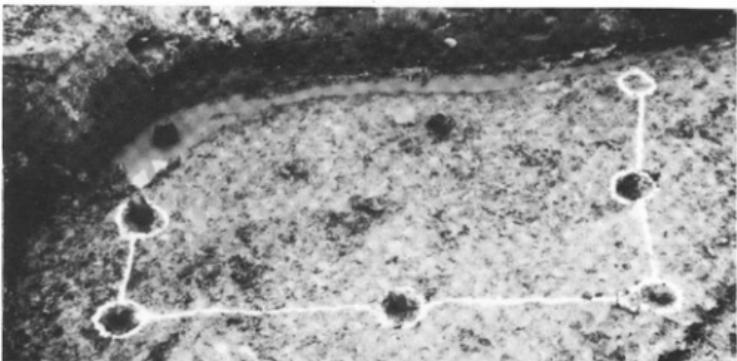
① B地区全体写真 北側



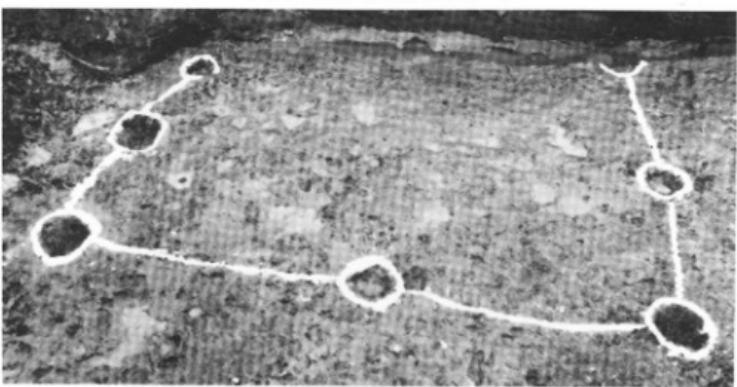
② B地区全体写真 南側



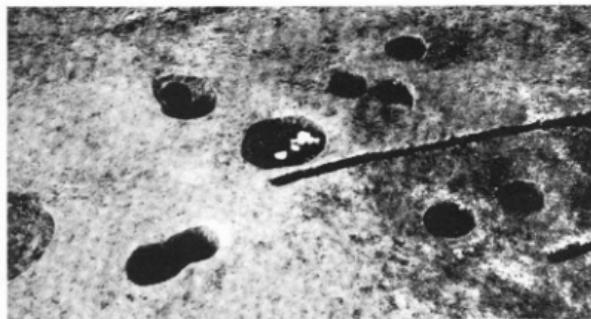
① 第1竪穴住居跡



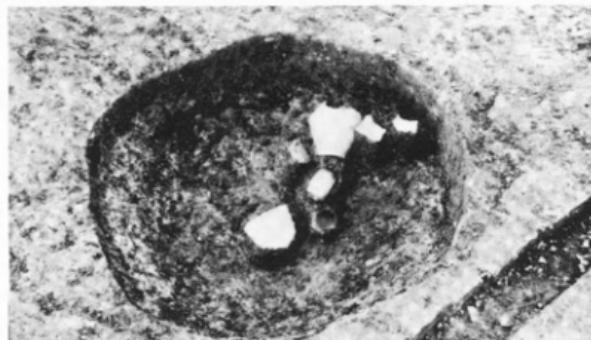
② 第1掘立柱建物跡柱根有



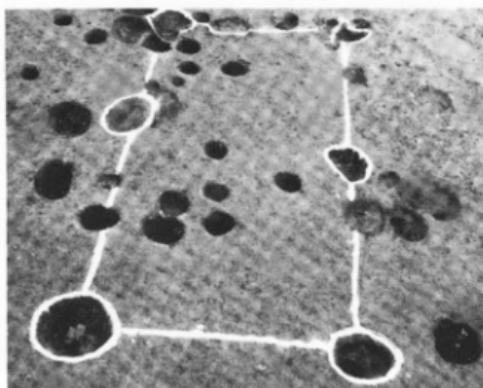
③ 同 柱根を抜いた跡



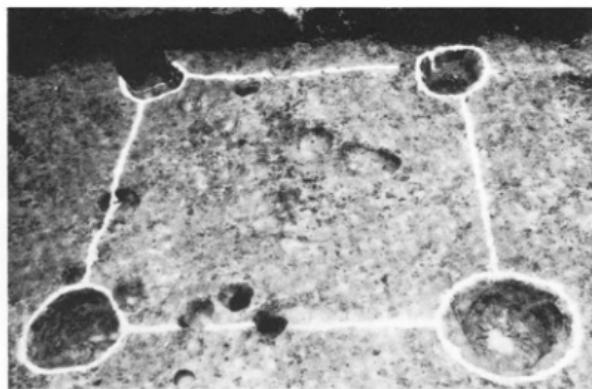
① 第2、第3掘立柱建物跡



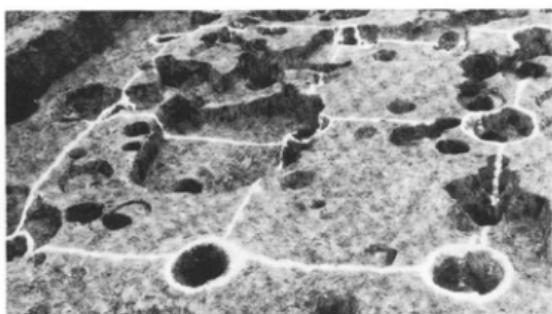
② 第3掘立柱建物跡特殊ピット



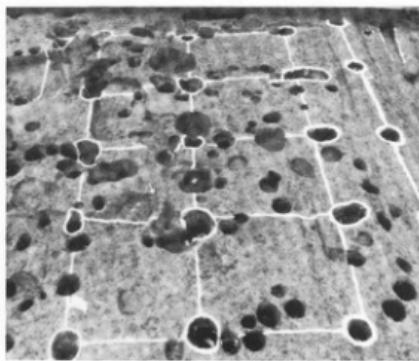
③ 第4掘立柱建物跡



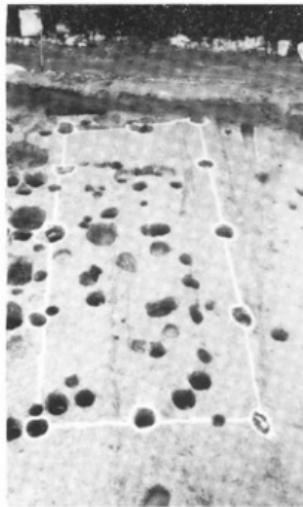
① 第5掘立柱建物跡



② 第6掘立柱建物跡



③ 第7掘立柱建物跡



① 第8掘立柱建物跡



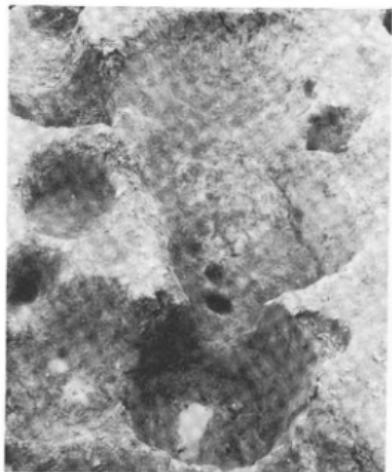
② 第1土塙 (石組)



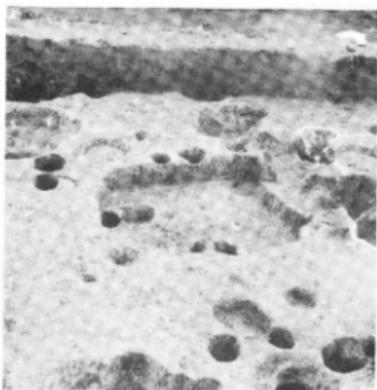
③ 第2土塙 (土器) 北側から



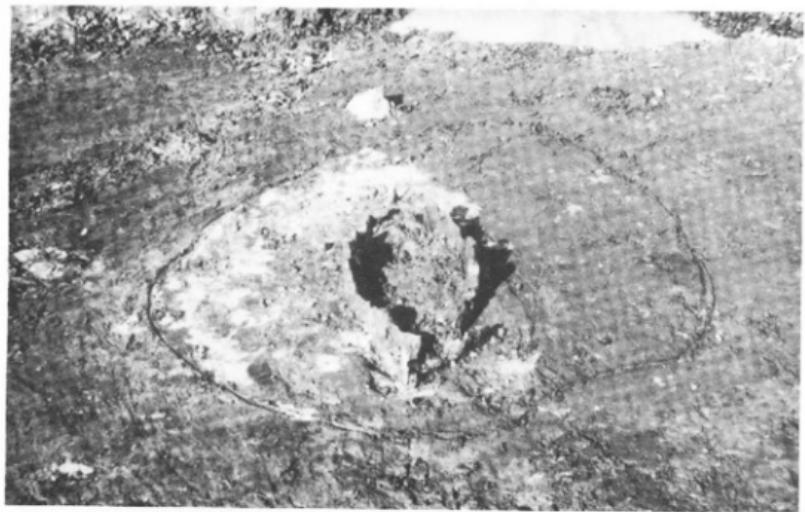
④ 同 (南側)



① 第2土塗土器とり上げた後



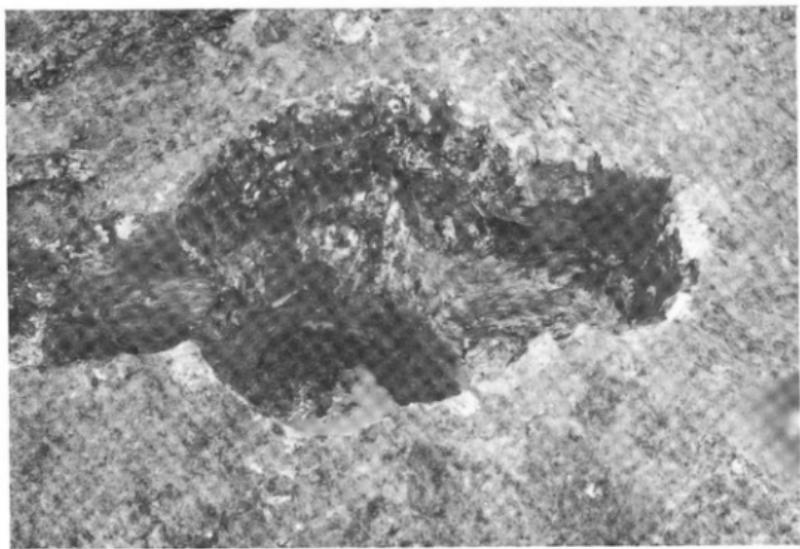
② 第3土塗



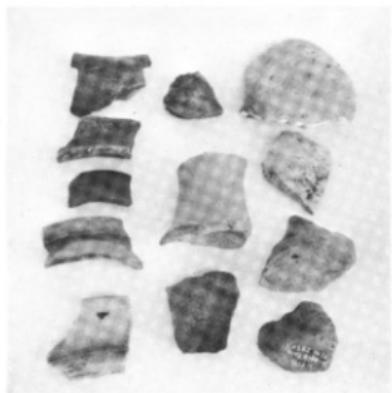
③ 井戸遺構（掘り方検出）



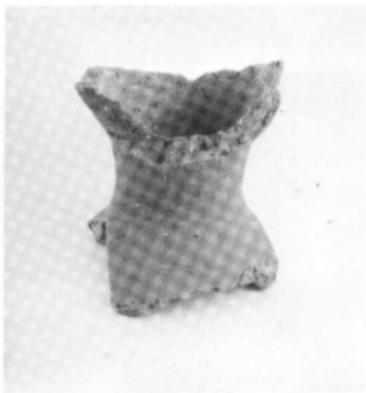
① 井戸遺構・木わくを伴うもの



② 同 挖り上げたもの



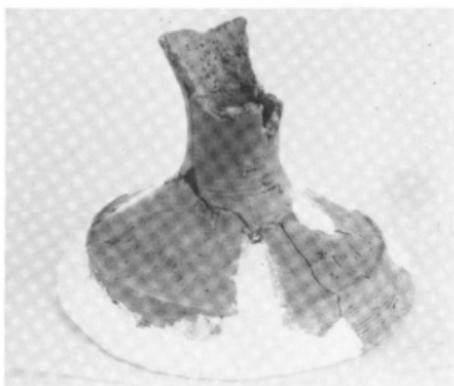
①



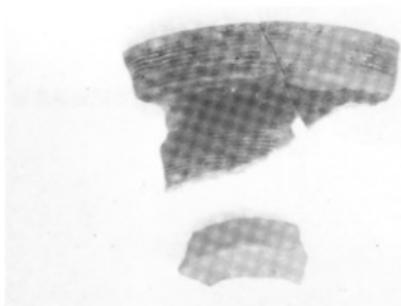
②



③



④

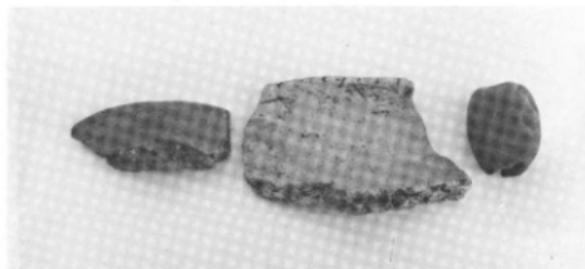


① 第1 竪穴住居跡遺物

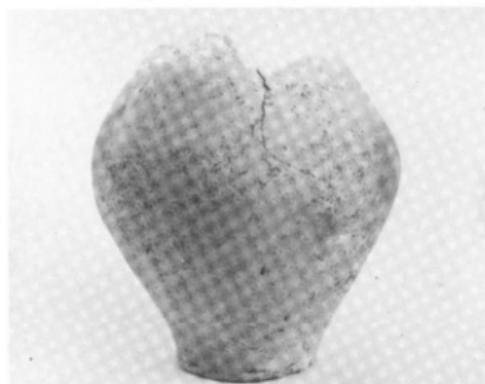
②～⑤

第2 堀立柱建物跡遺物

⑤



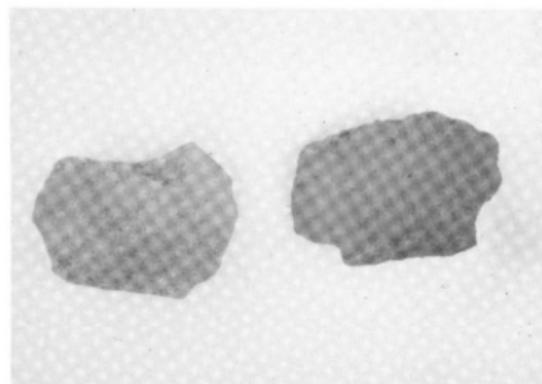
①



②



③

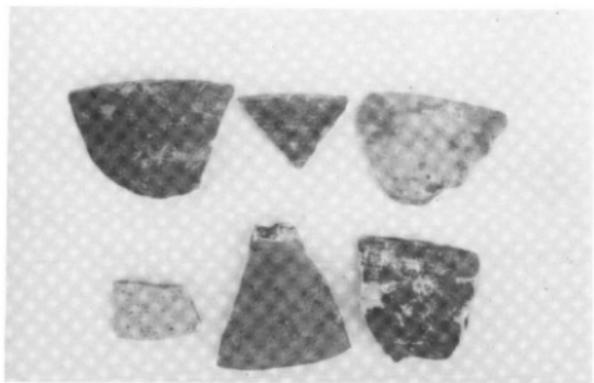


① 第2掘立柱建物跡遺物

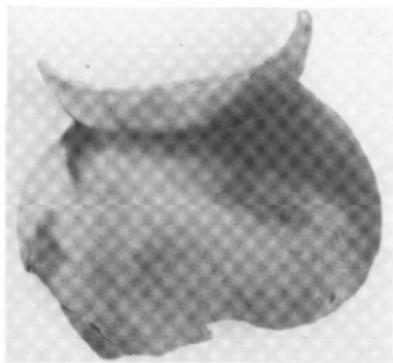
②～④

第3掘立柱建物跡遺物

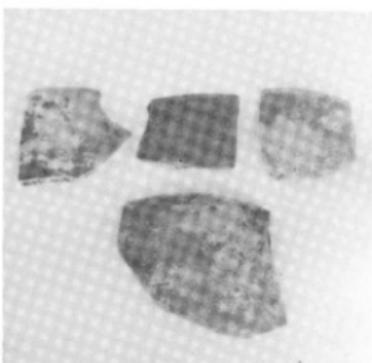
④



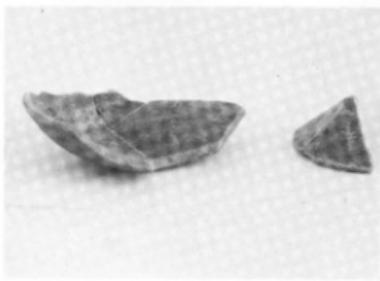
①



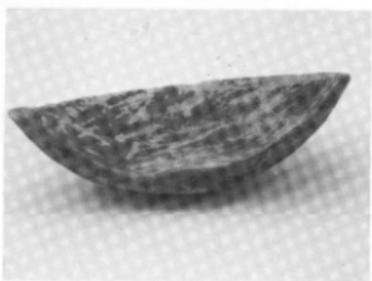
②



③



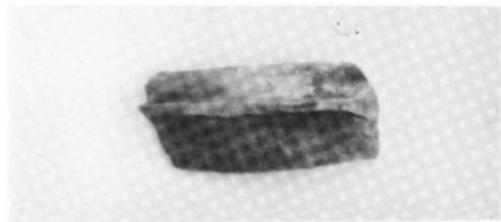
④



⑤



① 第8掘立柱建物跡遺物



② 第1土塙遺物



③ 第2土塙遺物高杯、杯



④ 同 脚



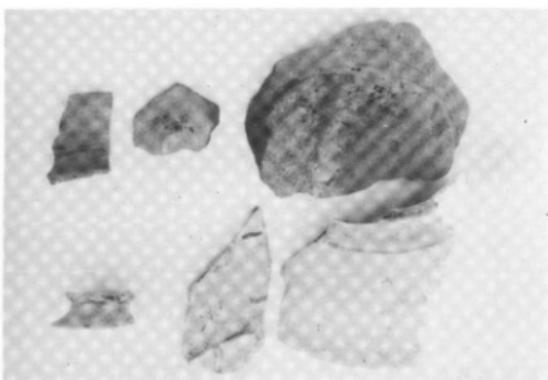
⑤ 同、小型丸底壺



⑥ 同



⑦ 同



①



②

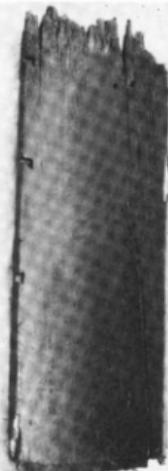


③



④

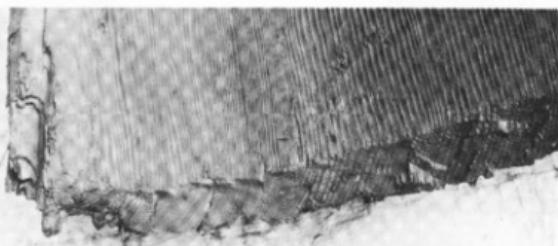
①～④
井戸遺構遺物



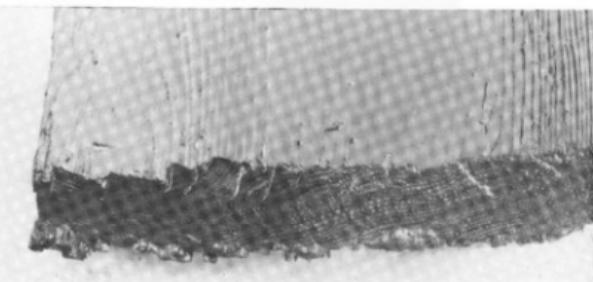
① 井戸造構木わく



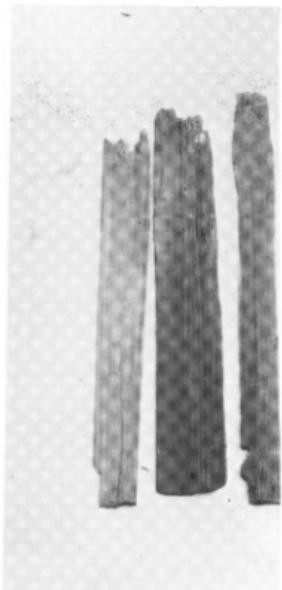
② 同 木わく



③ ①の木わくの拡大部分



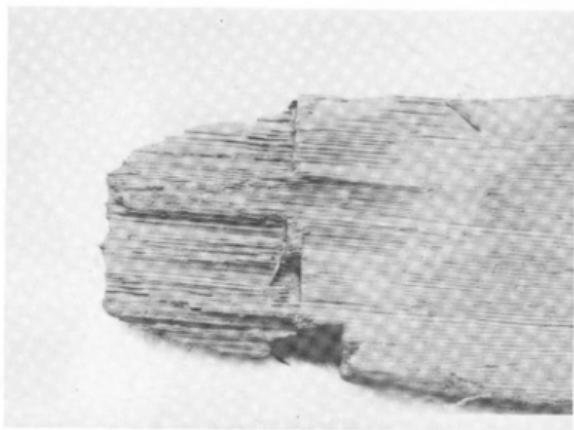
④ ②の木わくの拡大部分



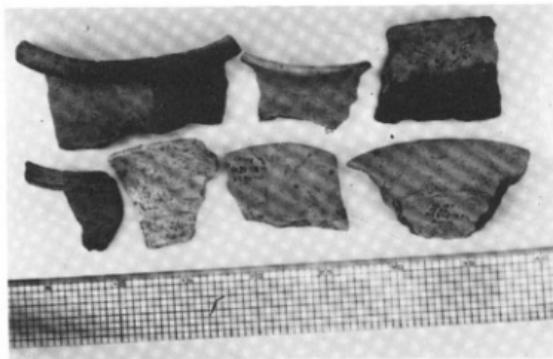
① 井戸遺構・板状遺物



② 同



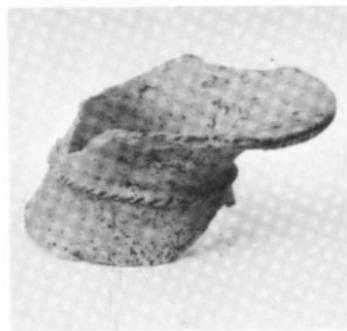
③ ②の拡大部分



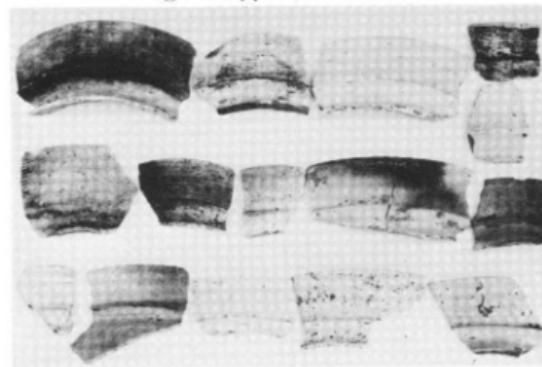
① 北側黒色土層、口縁部



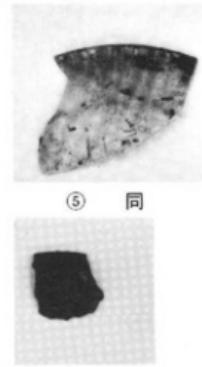
② 同



③ 同



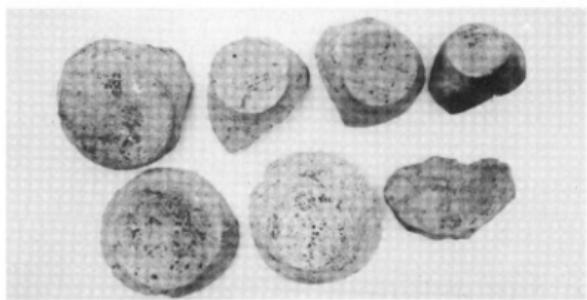
④ 同



⑤ 同



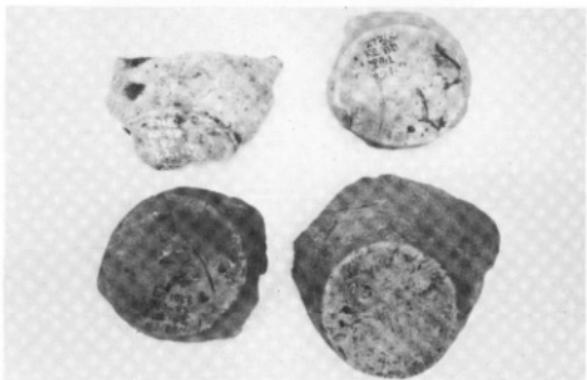
⑥ 同



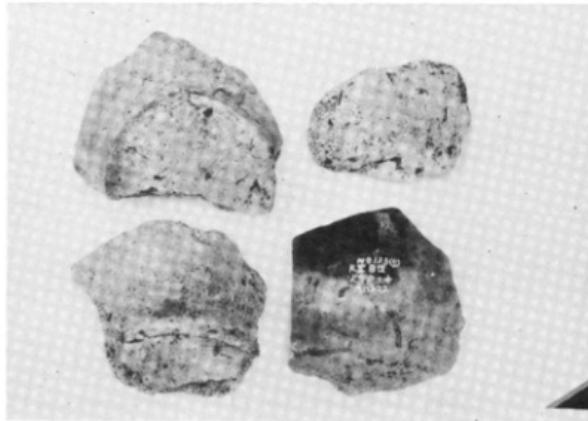
① 北側黒色土層 弥生底部



② 同



③ 同



① 北側黒色土層、弥生土器底部



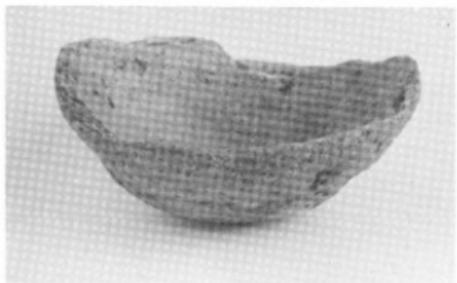
② 同



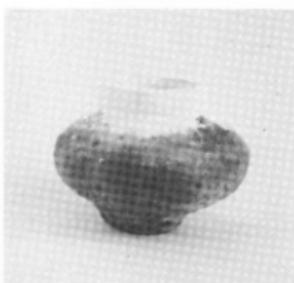
③ 同



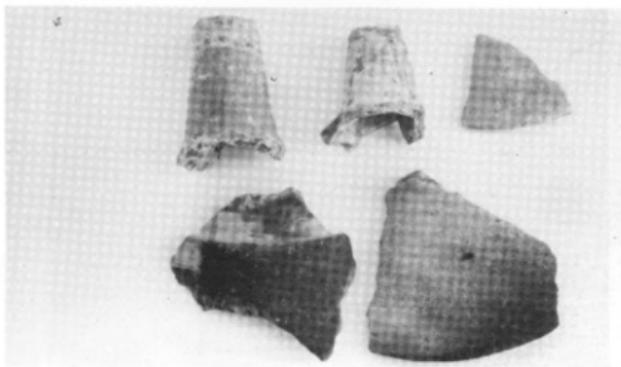
④ 同



① 北側黒色土層底部 手づくね土器



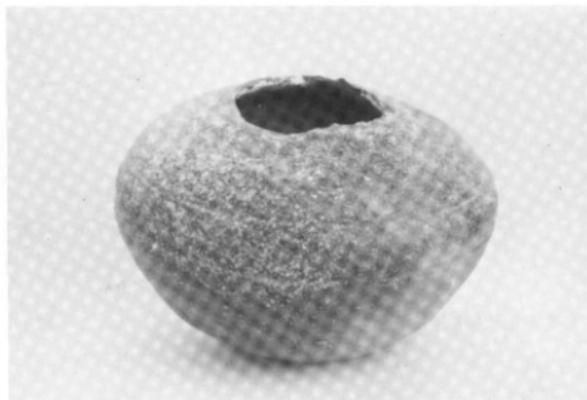
② 同 壺



③ 同 高杯、脚、器台



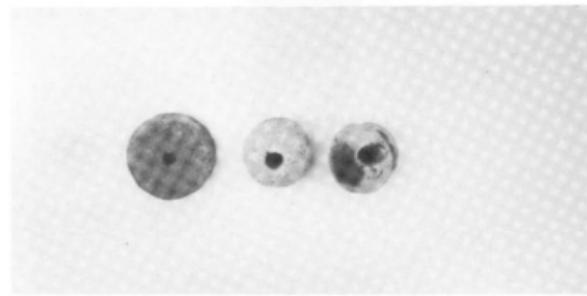
④ 同 高杯



① 表探 須恵器、壺



② 北側黑色土層 蓋



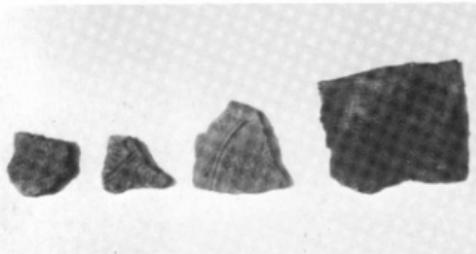
③ 同 紡錘車、土玉



旧海岸線 北側（南西より）



旧海岸線 南側（北西より）



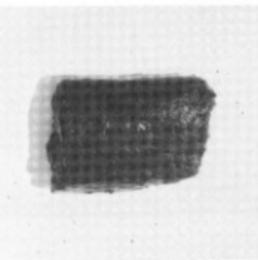
縄文土器



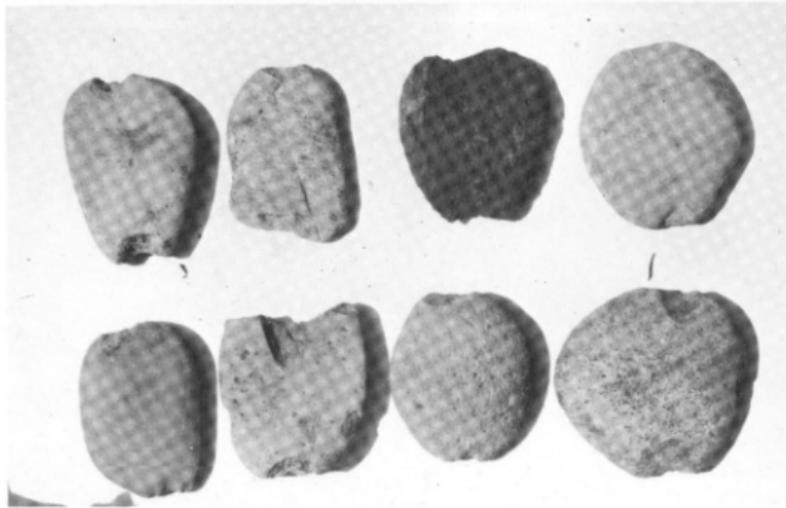
縄文土器



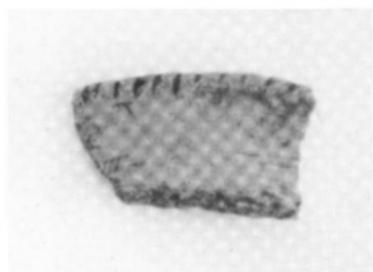
櫛



櫛



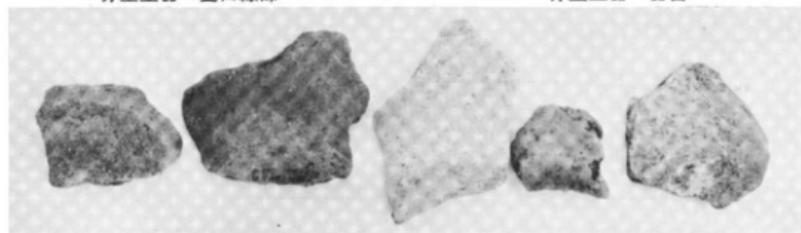
石錘



弥生土器 壺口縁部



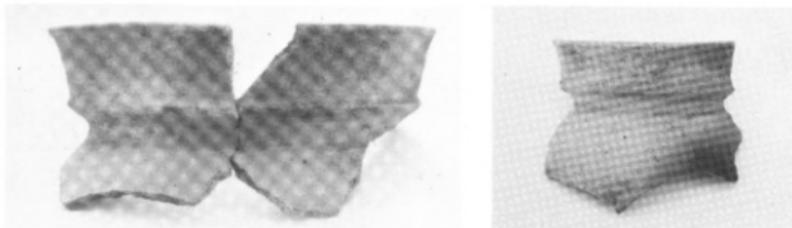
弥生土器 器台



弥生土器底部(1)



弥生土器底部(2)

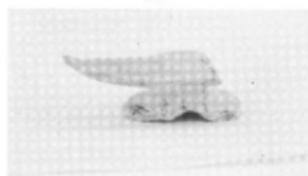


土師器 壺

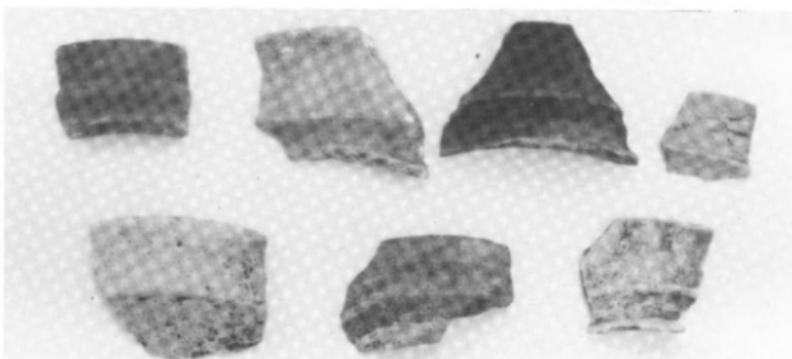
同



脚部



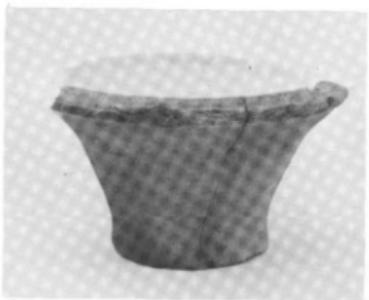
低脚杯



土師器 壺



土師器 壺



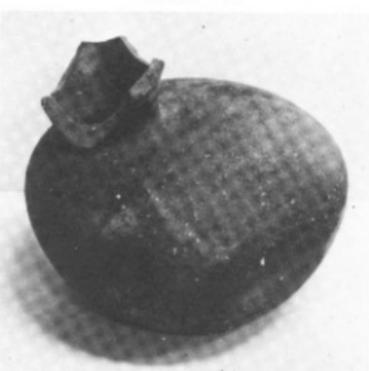
用途不明土器



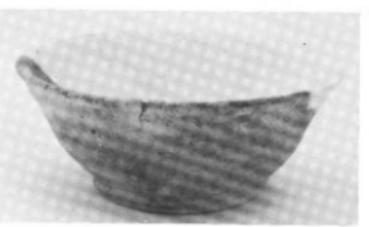
土師器 壺



須恵器 壺



須恵器



椀



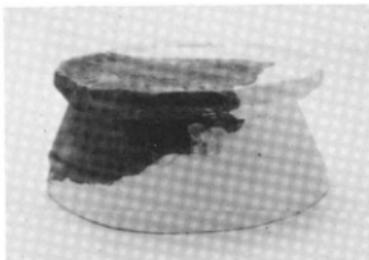
椀



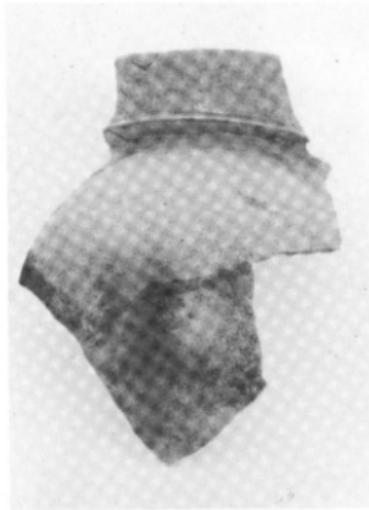
浅皿



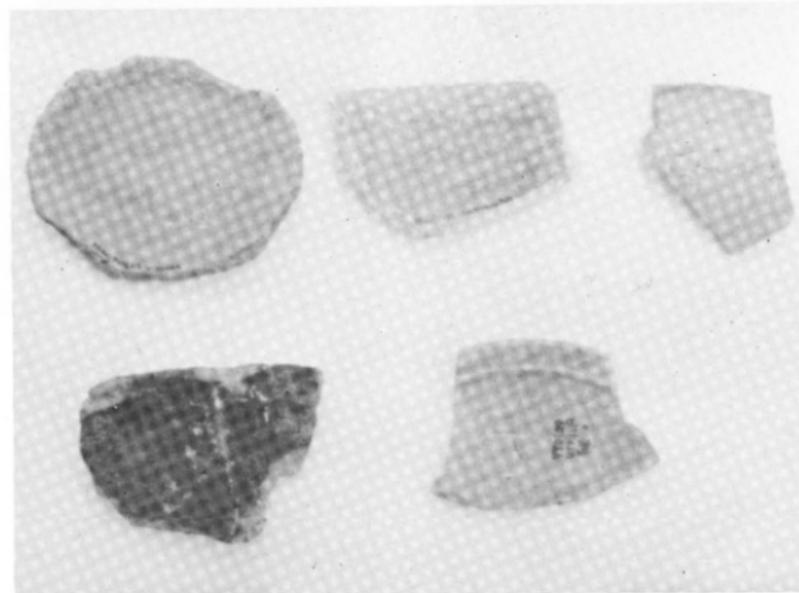
皿

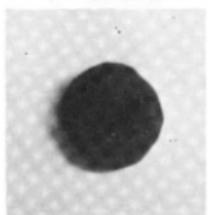
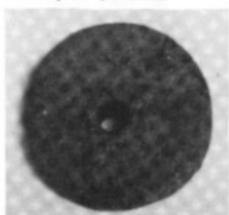
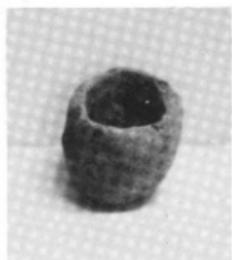


須恵器 器台



土師器 壺





湖山第2遺跡発掘調査報告書

鳥取大学附属小中学校移転整備事業に伴う埋蔵文化財
発掘調査

発行日 1982（昭和57年）3月31日

発行者 財団法人鳥取県教育文化財団

〒680 鳥取市扇町21

TEL (0857) 27-5252

印 刷 谷岡印刷

〒680 鳥取市元町126

TEL (0857) 26-2001